



(1)室橋遺跡遠景(北西から)



(2)室橋遺跡第17次2区 溝S D 17203(南から)

2.室橋遺跡第15・17次発掘調査報告

はじめに

室橋遺跡第15次・第17次調査は、主要地方道亀岡園部線幹線道路改良事業交付に先立って、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。

室橋遺跡は、京都府南丹市八木町室橋に所在する。周辺は丹波地域の中でも遺跡が多く分布する地域であり、南に弥生時代後期の焼失住居や、平安時代後期の正方位をもつ掘立柱建物跡群が検出された野条遺跡や、玉作り工房や多数の方形周溝墓群が検出された弥生時代中期の拠点集落である池上遺跡が所在する。東には諸木山裾部に集落遺跡が広がり、弥生時代後期の住居跡や、古墳時代中期の導入期竈をもつ住居が点在する大谷口遺跡や、弥生時代後期前半の住居跡や、最古式の造り付け竈をもち、初期須恵器を出土する住居群を検出した諸畑遺跡が所在する。

室橋遺跡の調査は、ほ場整備事業の実施に先立ち、平成10年度から旧八木町教育委員会によって試掘が行われ、以後、17次の調査を経てその概要が明らかになっている。当遺跡は、弥生時代中期から近世までの複合集落遺跡で、これまでに弥生時代中期の住居跡、古墳時代中期から後期の集落、さらに奈良～平安時代にかけての溝群が確認され、各所に灌漑用水路が掘削されていることが明らかとなった。今回の調査では、第15次調査で、古墳時代後期の住居群が検出され、奈

付表3 室橋遺跡調査回数一覧(調査主体の各教育委員会を省略)

次 数	調査主体	調査年度	面 積	主 要 遺 構	備 考
第1次	八木町	平成10年度	40㎡	柱穴等(古代～中世)	試掘
第2次	南丹市	平成17年度	170㎡	竪穴式住居(古墳)・柱穴(奈良～平安)・溝(平安)等	試掘
第3次	当センター	平成17年度	200㎡	柱列(奈良～平安)・竪穴式住居・溝(鎌倉)等	試掘
第4次	当センター	平成18年度	400㎡	竪穴式住居(古墳中期)・溝(平安)等	本調査
第5次	当センター	平成18年度	1,230㎡	竪穴式住居(古墳後期)・溝(平安)等	本調査
第6次	京都府	平成18年度	236㎡	竪穴式住居(古墳中期)・掘立柱建物(奈良)等	本調査
第7次	京都府	平成18年度	—	竪穴式住居(古墳中期)・溝・土坑等	立会調査
第8次	南丹市	平成18年度	280㎡	竪穴式住居(古墳後期)・溝(平安)・柱穴等	本調査
第9次	南丹市	平成18年度	250㎡	溝・柱穴(平安)等	試掘
第10次	京都府	平成18年度	257㎡	竪穴式住居(古墳中・後期)・溝(平安)	本調査
第11次	当センター	平成18年度	2,000㎡	竪穴式住居(古墳中期)・溝(奈良～平安)	本調査
第12次	南丹市	平成19年度	400㎡	溝(奈良～平安)・柱穴	本調査
第13次	京都府	平成19年度	800㎡	溝(奈良～平安)・土坑(平安)・柱穴	本調査
第14次	南丹市	平成19年度	235㎡	溝(奈良～平安)・柱穴	本調査
第15次	当センター	平成19年度	1,830㎡	溝(弥生)・竪穴式住居(古墳後期)・掘立柱建物・溝(奈良～平安)	本調査
第16次	南丹市	平成19年度	580㎡	溝(平安～鎌倉)・柱穴	本調査
第17次	当センター	平成20年度	1,200㎡	溝(弥生)・溝(古墳中期)・竪穴式住居(同後期)・溝(奈良～平安)	本調査

良時代後期～平安時代初頭の大規模な掘立柱建物跡が確認されている。また第17次調査では、弥生時代の大規模な溝や、古墳時代中期の溝、平安時代後期の灌漑用水とみられる溝群を検出した。

第15次調査は、平成19年度事業として実施し、平成19年9月5日～平成20年3月7日の期間を調査期間にあて、1,830㎡の調査を実施した。また第17次調査は、平成20年度事業とし、平成20年12月3日～平成21年2月25日の期間をあて、1,200㎡の調査を実施した。発掘調査は、当調査研究センター調査第2課長肥後弘幸、調査第2課第2係長森正、同次席総括調査員辻本和美、同調査員高野陽子が担当した。本報告書の執筆は、(Ⅰ)を辻本が執筆し、(Ⅱ)を高野が執筆し、そのほかを高野がまとめた。



第1図 調査地位置図

- | | | | | | |
|----------|------------|------------|------------|-----------|----------|
| 1. 室橋遺跡 | 2. 野条遺跡 | 3. 新庄城跡 | 4. 新庄遺跡 | 5. 船枝遺跡 | 6. 清谷古墳群 |
| 7. 大谷口遺跡 | 8. 諸畑遺跡 | 9. 八木田遺跡 | 10. 日置遺跡 | 11. 幡日佐遺跡 | 12. 如城寺 |
| 13. 野条城跡 | 14. 池上院 | 15. 筏森山古墳群 | 16. 城谷口古墳群 | | |
| 17. 池上遺跡 | 18. 池上古里遺跡 | 19. 刑部城跡 | 20. 多国山古墳群 | | |

調査に際しては、南丹市教育委員会、京都府教育委員会のほか、地元の方々から多くのご指導・ご協力を得た。記して、感謝したい。^(注1)なお、今回の調査にかかる経費は、全額、京都府建設交通部が負担した。

(高野陽子)

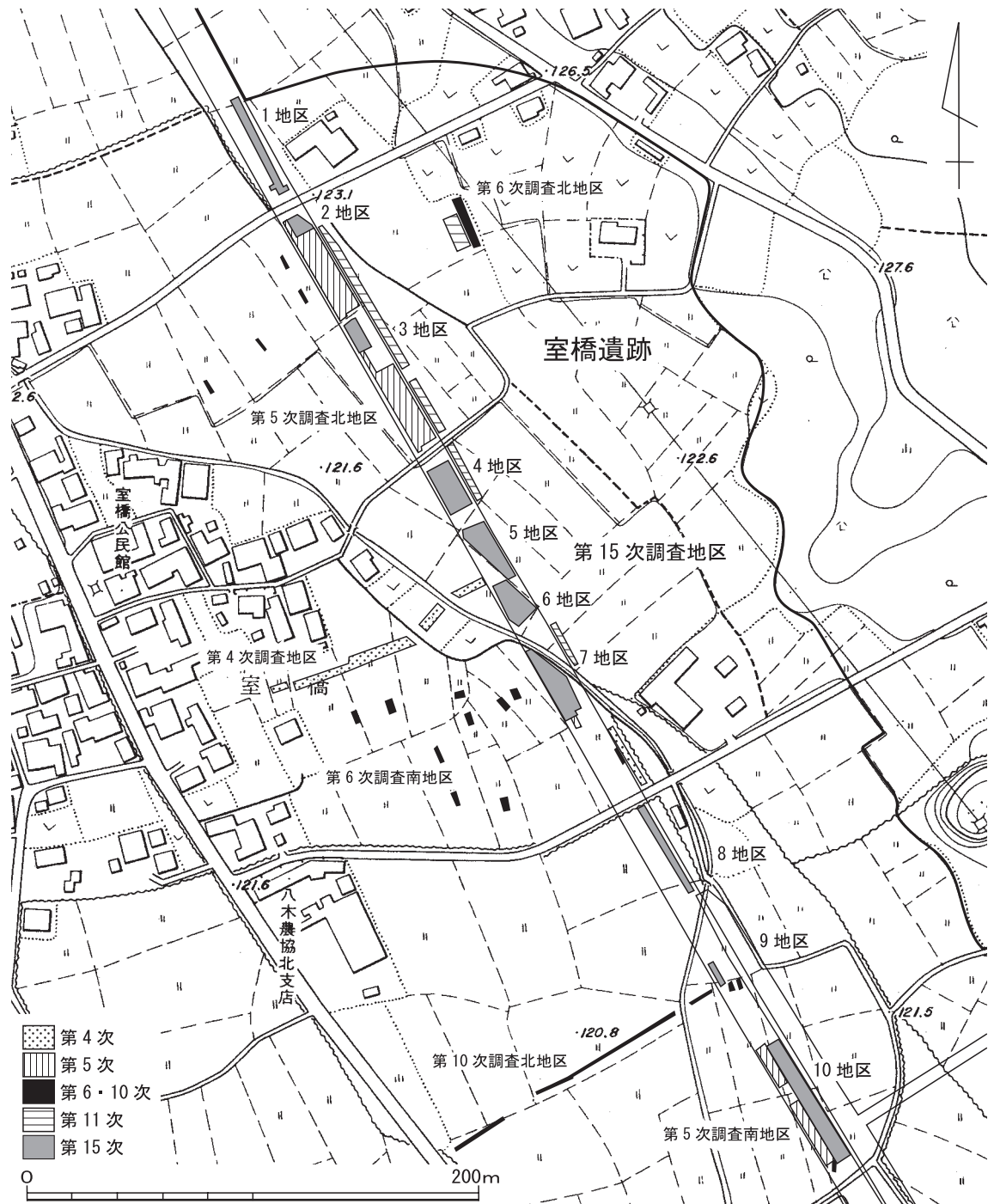


第2図 室橋遺跡調査区配置図

(I)室橋遺跡第15次調査

1. 調査の概要

第15次調査は、全体で10地区の調査区を設けた。室橋遺跡の北部に第1～6地区を設定し、南部に第8～第10地区を設定した。このうち、第1地区と第7地区は、試掘調査である。第1地区は、第17次の1地区調査が本調査となるもので、また第8地区は、第17次の第2地区調査で本調査を実施している。これらの報告については、後述する第17次調査報告においてあわせて述べる。



第3図 第15次調査地配置図

(1) 層序

第15次調査地における標高は、北側にあたる第1地区で122.3m、南側の第10地区で約119.6mを測り、北から南に向けて傾斜する地形を示す。検出遺構面の標高については、第1地区で約121.8m、第10地区で約119.2mを測り、ほぼ地形の高低と対応する。調査前の現状は第9・10地区が、道路造成土が敷設されていた以外は水田および畑地であった。層序は、耕作土の下が鉄分を含む灰色ないし暗褐色土の水田床土で、第1地区から第7地区では概ねこの直下で遺構を検出した。遺構検出面は暗黄灰褐色ないし黄褐色の粘質土で構成され、遺構面は後世の耕作等により多少削平を受けているものとみられる。第7地区以南の地区では、耕作土・床土の下に、いわゆる丹波黒ボクの再堆積と思われる黒褐色粘質土がみられた。

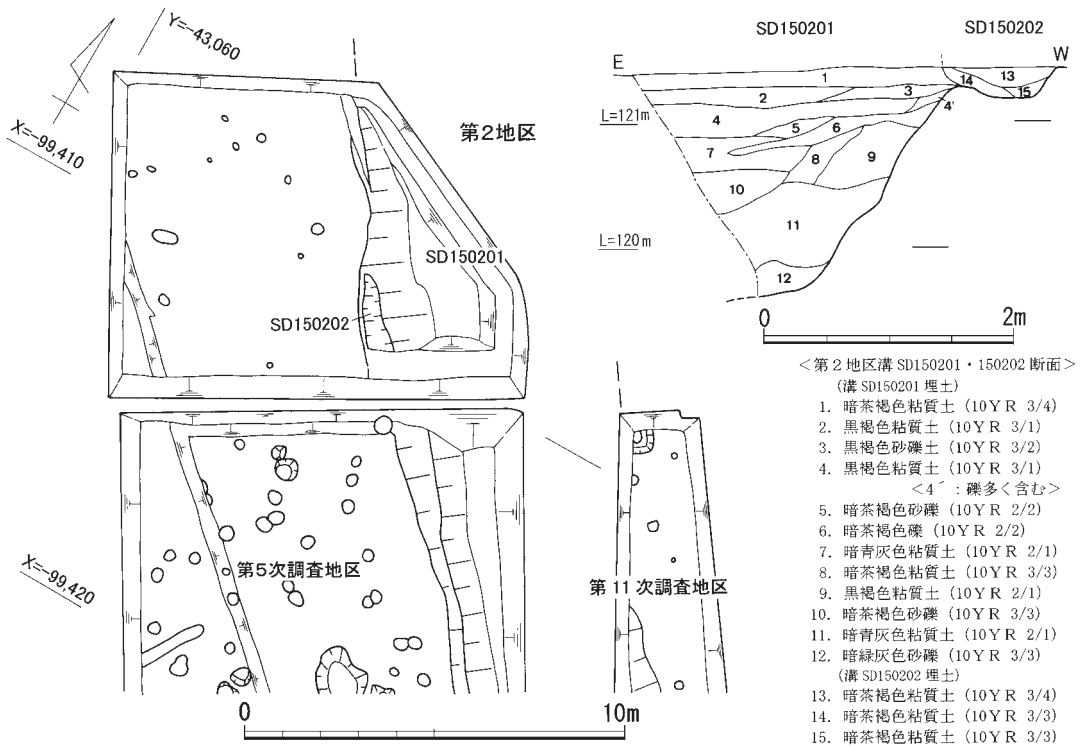
以下、それぞれの調査地ごとに主な検出遺構を概略する。

(2) 各調査区の検出遺構

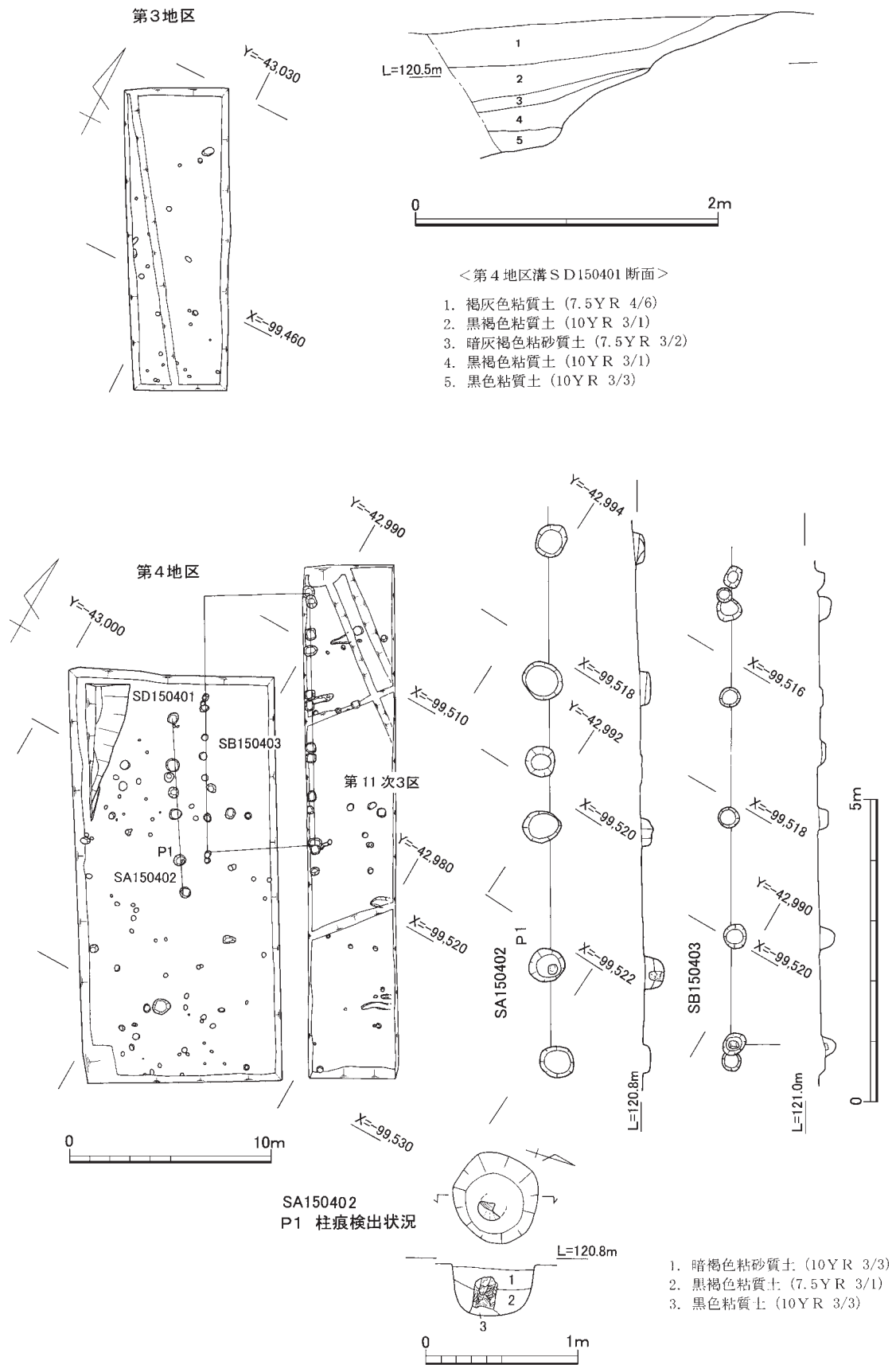
1) 第1地区

今回の調査対象地のうち最も北側に位置する。概ね室橋遺跡の推定範囲の北限に相当する地域である。第5・11次調査で、幅約5mにおよぶ大規模な溝(大溝)が検出されている。今回は、溝の延長部にあたる北側に調査区を設定し、溝の規模および残存状況を確認するために試掘調査を実施した。調査トレンチは長さ約37.5m、幅3.5mを測る。調査面積は131㎡である。

調査の結果、北西から南東方向にのびる大規模な溝(大溝)の延長を確認した。大溝は今回調査を行った室橋遺跡の推定範囲を越えてさらに北側に延長する。遺構検出面は現水田面から深さ約0.6mを測る。大溝のほか、調査地北部で小ピット群を検出した。なお、同地区については第17



第4図 第2地区遺構配置図、溝SD150201土層断面図



第5図 第3・4地区遺構配置図、柵列SA150402、掘立柱建物跡SB150403実測図

次調査で大溝を中心とする本調査を実施した。

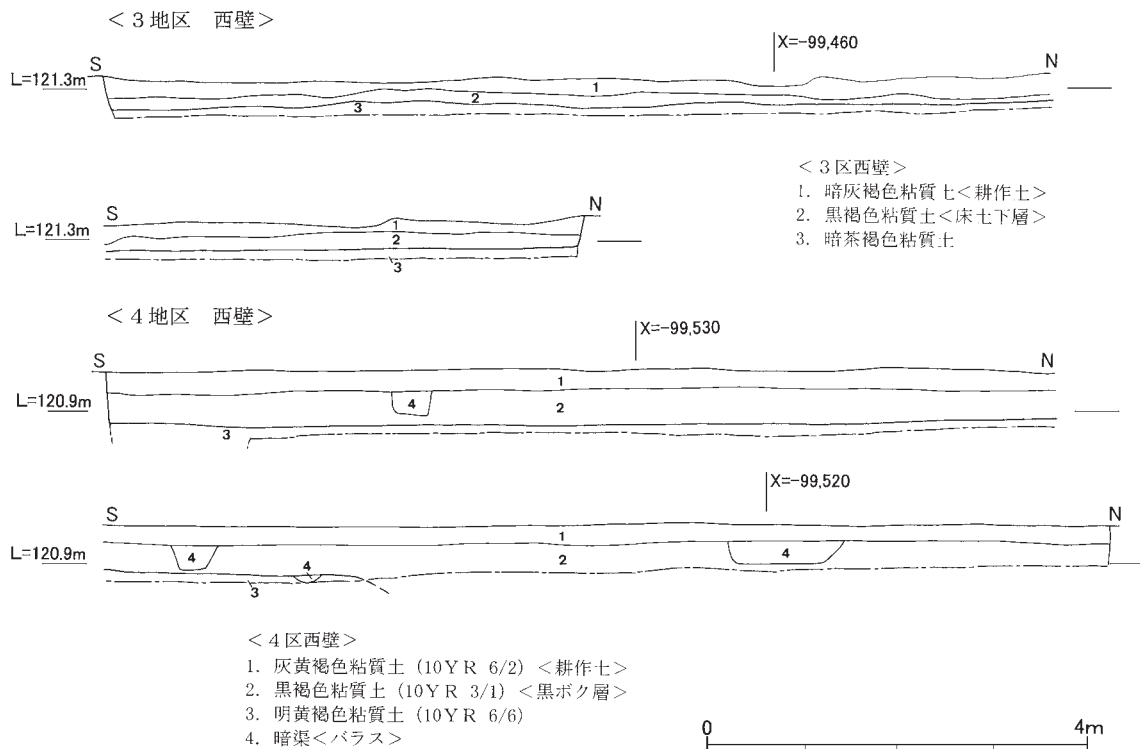
2) 第2地区(第4図)

第5次および第11次調査地の北側に接して設定した調査区で、前回調査で確認されている大溝の規模を確認することを目的とした。調査面積は87㎡である。

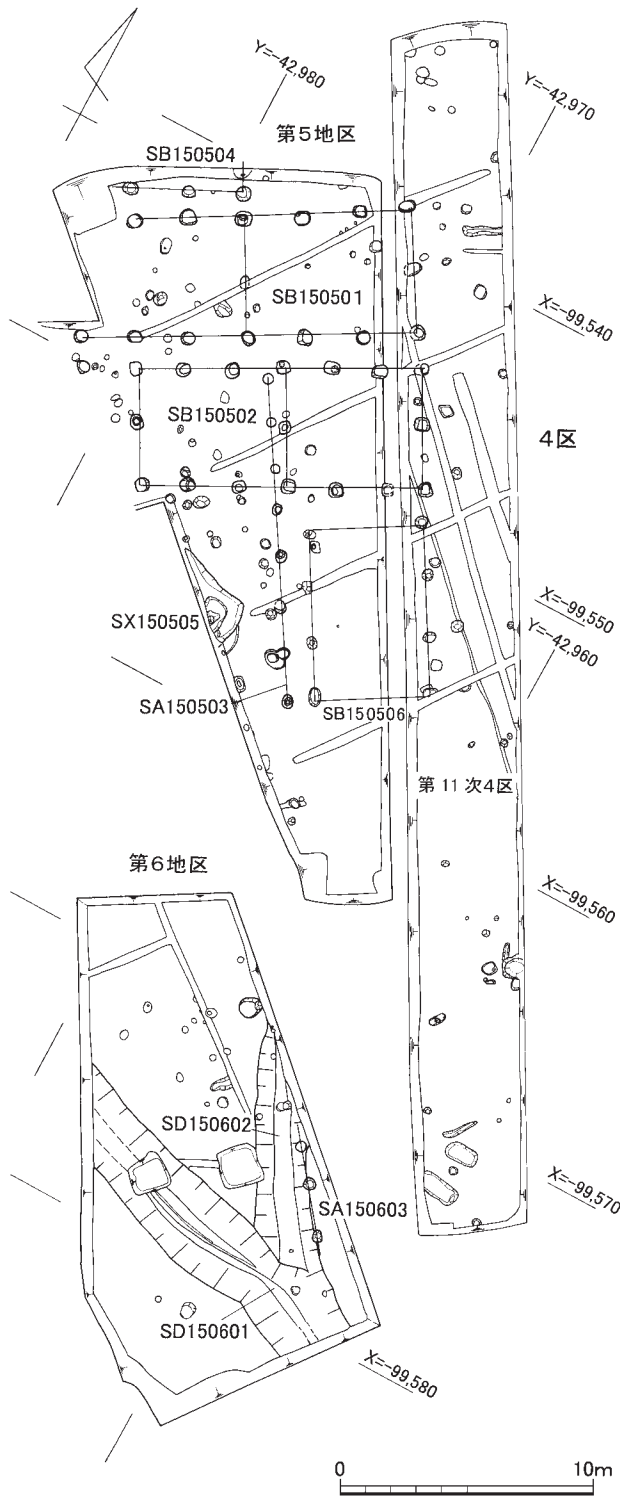
溝S D 150201 調査地東側から、溝西側肩部の延長約8 m分を検出した。溝は黄褐色の地山面から約55°の傾斜角度で掘り込まれている。溝の下部では傾斜角度が緩くなり、このまま底部に移行していくと思われ、溝の断面形は底部が平坦な台形を呈するものと想定される。なお、トレンチ壁の崩落の危険があり、底部は西肩下部付近の一部を確認するにとどまった。検出面から今回の溝最深部までの深さは約1.8mを測る。溝内の堆積土は、粘土質土と砂礫の互層からなり、上層(①~③層)、中層(④~⑪層)、下層(⑫層)の3層に大別される。特に中層では不整合な堆積面がみられ、滞水によって形成された粘質土層が、砂礫の移動を伴う強い流水によって削り込まれた状況が窺える。堆積の状況からみて、溝は滞水と流水を繰り返しながら埋没していったものと思われる。本溝内からは、第5次調査で弥生時代後期後葉~古墳時代初頭とみられる土器片が出土しているが、今回の調査では遺物は出土しなかった。第5次調査では上層から奈良時代後期後半から平安時代初期に属する須恵器が出土しており、溝の埋没時期が窺われる。

溝S D 150202 溝S D 150201の西肩上部を切るかたちで平行に延びる溝である。幅0.9m、深さ0.25mを測る。溝の断面は底部が平坦な「U」字形を呈する。北側部分は溝S D 150202と重複しており明確な溝肩を検出することができなかった。出土遺物はなく時期は不明である。

3) 第3地区(第5・6図)



第6図 第3・4地区土層断面図



第7図 第5・6地区遺構配置図

第5次調査の第1地区と第2地区の間に設けた調査区で、第3次調査区の東側に位置する。第5次調査では、奈良時代後半から平安時代に属する掘立柱建物跡や工房跡と推定される半地下式建物跡が検出されている。今回の調査では柱穴状ピット、暗渠排水溝等を検出した。柱穴状ピットは規模が小さく建物跡としてはまもらなかった。調査面積は83㎡である。

4) 第4地区(第5・6図)

第11次調査第3地区を西側に拡張して設定した調査区である。掘立柱建物跡1棟、柵1条、溝1条を検出した。調査面積は210㎡を測る。

掘立柱建物跡 S B 150403 第11次調査で東側桁行柱列が確認された掘立柱建物跡 S B 11301に対応するものと思われる。今回、この西側で平行する4基の柱穴を検出した。柱穴の規模は0.4m前後で、各柱穴間の距離は2.2~3.0mを測る。北側の2間分は調査範囲外になる。建物跡の主軸はN28°Wである。今回検出した西側柱列と東側柱列の柱間は約5.5mを測るが、この間では柱穴は検出できなかった。所属時期は奈良時代後半~平安時代初頭と推定される。

柵 S A 150402 調査地の中央部で検出した南東から北西にのびる4基(P1~P4)の柱穴からなる。東西に対応する柱穴がみられないことから柵とした。

柱穴は直径約0.6mの円形で深さ約0.35mを測る。各柱間は2.3~2.4mを測る。主軸はN35°Wである。南端部の柱穴P1内に柱根の一部が遺存した。腐食が著しいが復原径20cmを測り、残存部の高さは20cmを測る。樹種はスギとみられる。

溝 S D 150401 調査地北西角で検出した南北方向に延びる溝である。溝上肩の東側辺約8m

分を検出した。溝西側は調査地外になる。掘削範囲での最深部は0.85mを測る。溝の断面は底部が平坦な台形を呈しており、中程で段を形成する。堆積土は黒褐色粘質土の互層からなる。溝の方向からみて、第5次調査の溝S D 230および第11次調査の溝S D 11201の南延長部に相当するものと思われる。第5次調査では上層から古墳時代前期の甕が出土しており、溝の埋没時期を想定できる。

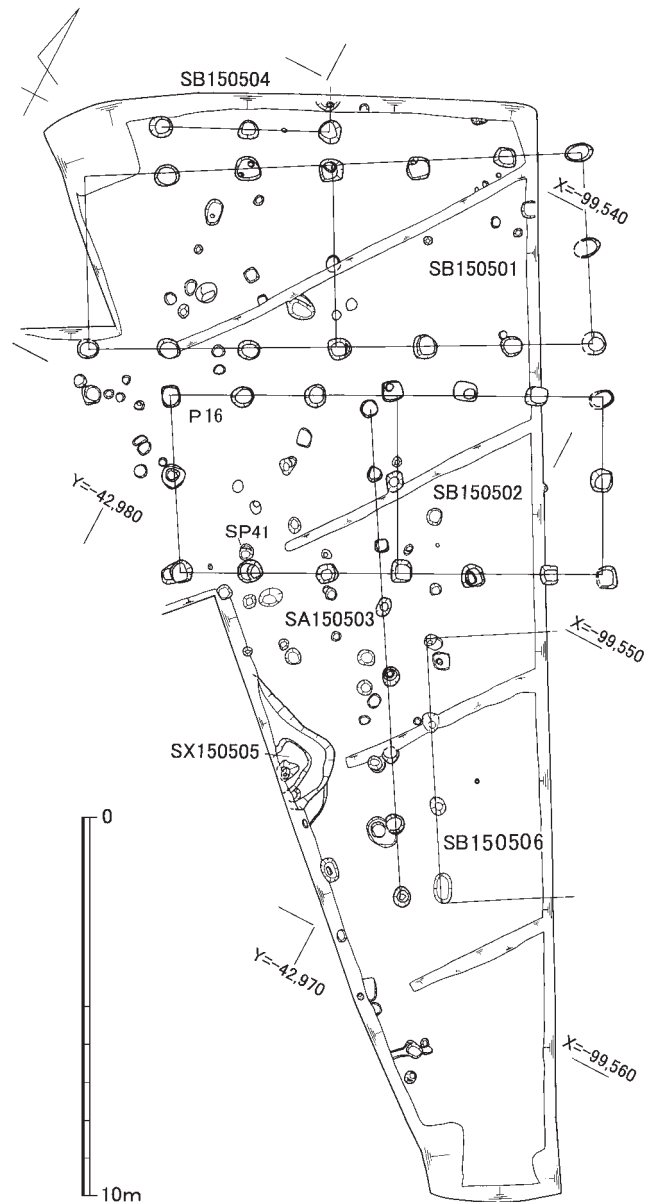
5) 第5地区(第7～9図)

第11次調査の第4地区の西側に接して設定した調査区である。掘立柱建物跡4棟、柵1条のほか、焼土坑、風倒木痕を検出した。調査面積は265㎡である。

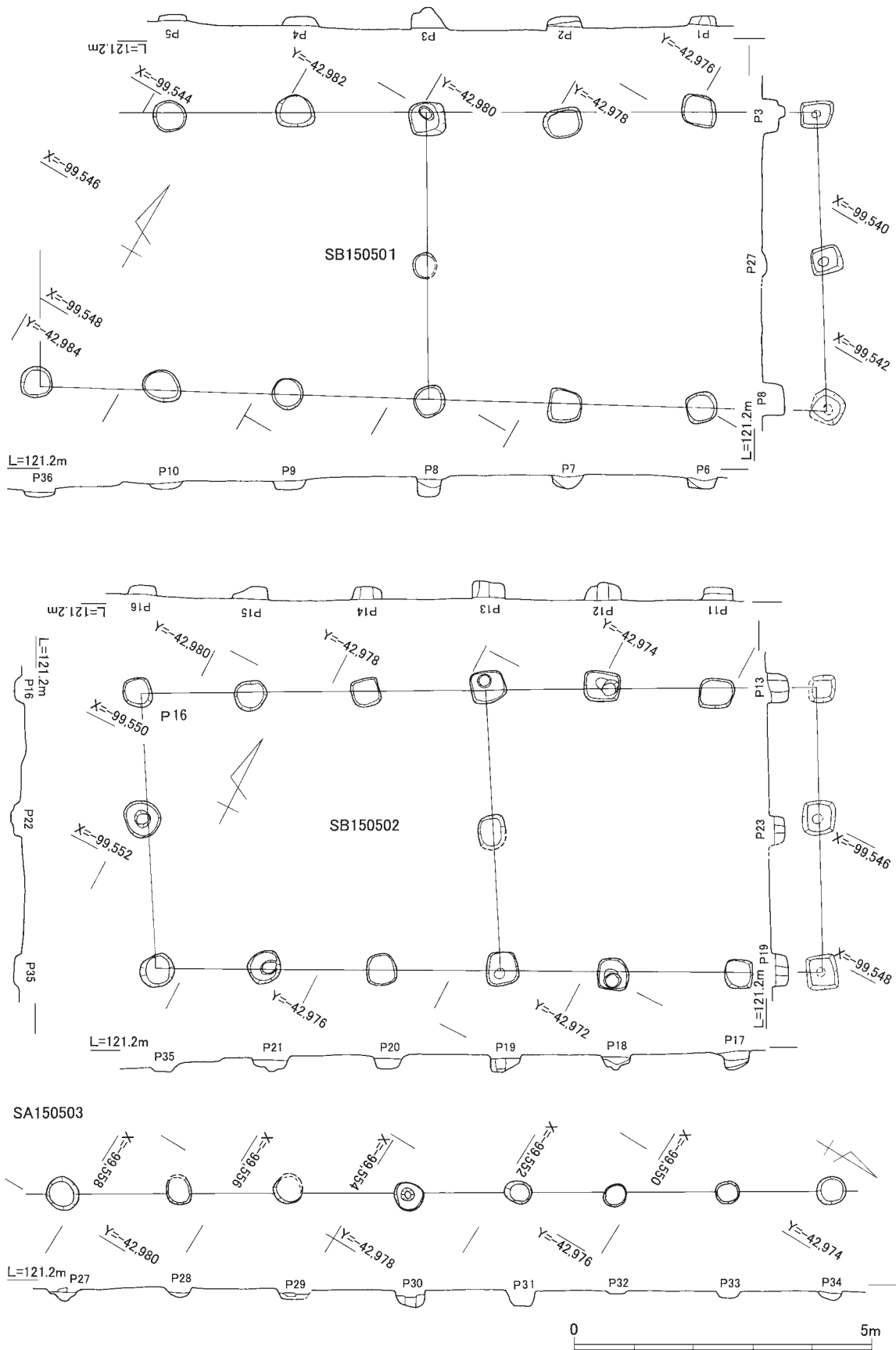
掘立柱建物跡S B 150501(第7～9図) 第11次調査第4地区のトレンチ西壁際で、建物東梁間を構成すると思われる3基の柱穴が検出されており(S B 11405)、今回、西側への拡張で梁間2間(約5m)×桁行6間(約13.2m)の東西棟の掘立柱建物跡であることが判明した。建物西梁間柱列の北

西角柱と中間柱については、この地点が西側で一段下がるため検出できなかった。建物主軸はN 62° Eである。柱穴掘形はほぼ方形で一辺の規模は約0.5～0.6m、深さ約0.2～0.3mを測る。掘形内には柱痕跡が認められるものがある。各柱穴間の距離は2.4～2.5m前後でほぼ8尺等間を測る。東側柱列から3間分にあたる梁間中央で柱穴が検出されており、内部を二等分する間仕切り柱をもつ建物に復原できる。南側に約1.2mの間隔を置き、掘立柱建物跡S B 150502が同一方向に並行するが、近接具合からみて同時に建てられていたとは考えにくい。建物跡に切り合い関係がなく先後関係は不明である。所属時期については、柱穴掘形の規模や形状から奈良時代後半～平安時代初頭と思われる。

掘立柱建物跡S B 150502(第7～9図) 掘立柱建物跡S B 150501の南側に近接して検出された建物跡で、第11次調査で検出した掘立柱建物跡S B 11406の西側本体部分にあたる。今回、桁



第8図 第5地区遺構配置図



第9図 掘立柱建物跡S B150501・150502、柵S A150503実測図

行柱穴の南北各6基分を検出し、梁間2間(約4.8m)×桁行6間(約11.4m)の東西棟の建物跡であることが判明した。なお、建物北西隅柱の柱穴P16の西延長上に、柱穴状のピットが数基みられるが、掘形が浅く本建物とは直接関係しないものと思われる。建物の主軸はN62°Eで、掘立柱建物跡S B150501と並行する。柱穴掘形はほぼ方形で、一辺の規模は約0.4~0.5m、深さ約0.3m前後を測る。掘形内には柱痕跡を残すものがみられる。各柱穴間の距離は1.8m前後でほぼ6尺等間を測る。掘立柱建物跡S B150501と同じく、東側柱列から3間分の梁間中央で柱穴が検出されており、間仕切りをもつ。本建物の平面構造は、掘立柱建物跡S B150501に類似するが、柱穴規模が前者に比べ少し小振りで、柱間隔も短い等、全体的に規模が小さい。しかしながら、両建物の東側柱列は揃えられており、計画性をもって建てられたことが窺える。所属時期については、掘立柱建物跡S B150501と同様、奈良時代後半~平安時代初頭と思われるが、先後関係については不明である。

掘立柱建物跡S B150504(第7・8図) 調査地の北端で東西に並ぶ3基の柱穴を検出した。今回検出した東端の柱穴から東側には柱穴が検出されないことから、これを南東隅柱とし北西側に広がる東西2間以上の掘立柱建物跡が想定される。建物主軸はN67°Eである。柱掘形は隅円方形を呈し、一辺約0.5m、深さ0.25m前後を測る。各柱間隔は2.1mと2.4mを測る。掘立柱建物跡S B150501と北側に1m程の間隔をもって近接するため、同時に併存しなかったものと思われるが、先後関係は不明である。時期は先の2棟同様、奈良時代後半~平安時代初頭と思われる。

掘立柱建物跡S B150506(第7図) 調査地南側で南北に並ぶ柱穴4基を検出した。第11次調査掘立柱建物跡S B11407に対応する西側柱の柱穴列とみられる。南北棟建物で、桁行3間(7m)を測る。主軸はN32°Wを示す。柱穴の一辺は約0.6mで、各柱穴の間隔は2.1~2.3mを測る。桁行の東側柱列との間隔は約4.7mを測るが、この中間にあたる位置では柱穴を検出できなかった。所属時期は、上記の建物跡群と建物方向が同じであることからみて、同時期と思われる。

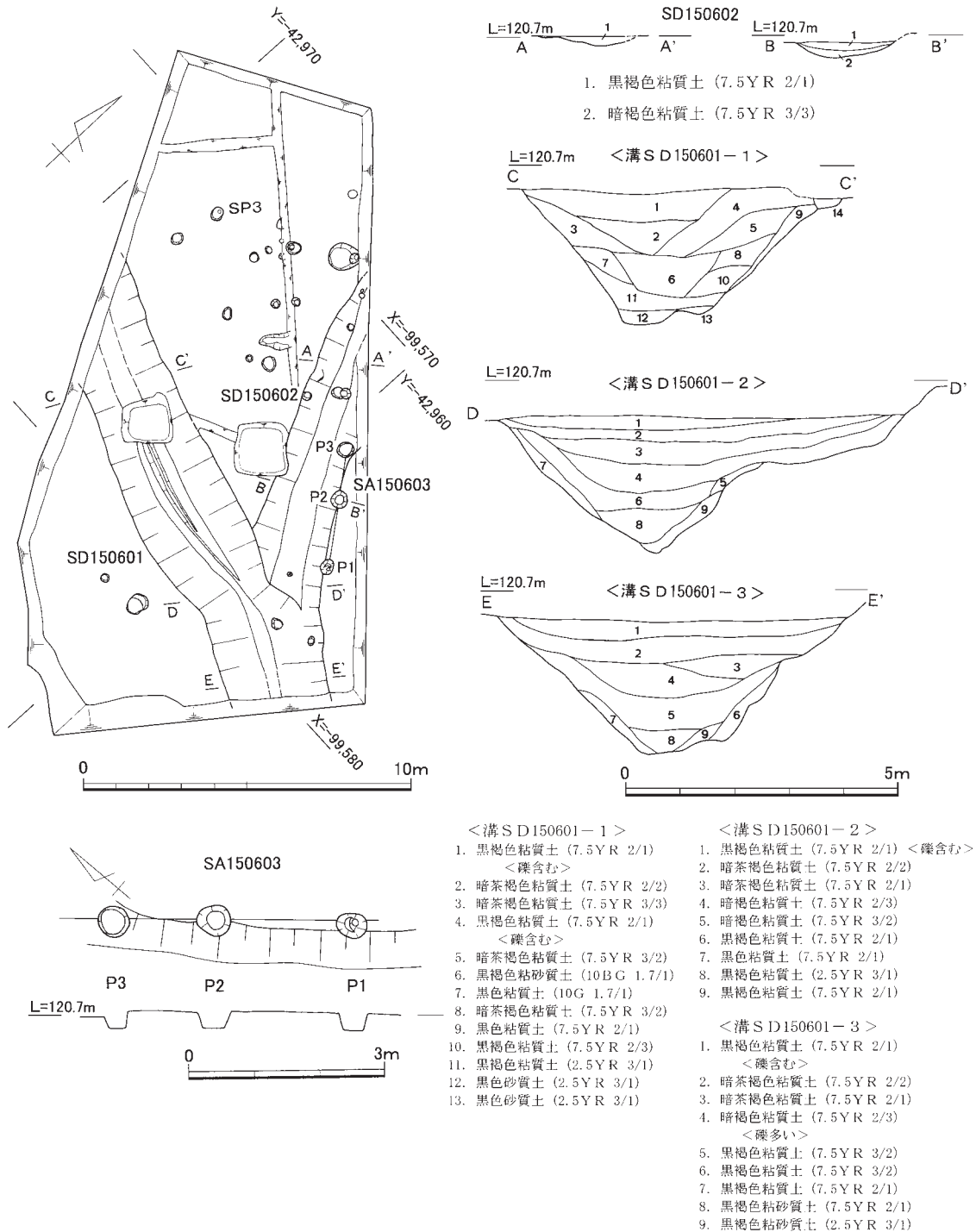
柵S A150503(第7~9図) 調査地中央で検出した柱列である。南東から北西方向に直線上に8基の柱穴が並び、この両側に対応する柱列が検出できなかったことから柵とした。主軸はN31°Wで、長さ13.2m(7間)を測る。柱掘形は隅円方形を呈し、一辺0.4~0.5m、深さ約0.2mを測る。列北端の柱穴から3基目の柱穴は他のものに比べ浅い。各柱穴間の距離は1.6mから2.0mとばらつきがみられる。所属時期は、建物群と同時期と思われる。

焼土坑S X150505(第7・8図) 調査区の南東隅で検出した埋土に焼土が混じる浅い土坑である。検出範囲が部分的であるため規模や性格等については不明である。

6)第6地区(第10図)

第11次調査第5地区の北西側に設定した調査区である。主な遺構としては、溝2条、土坑、柱穴列がある。調査面積は172㎡である。

溝S D150601 調査区の西寄りで検出した北西から南東方向にのびる溝で、第5次調査第5地区で検出された溝S D501および第11次調査第5地区で検出された溝S D11501の北延長部にあたる。今回、延長15m分を確認した。溝上肩の幅は約3mを測る。後述する溝S D150602が南側



第10図 第6地区遺構配置図、溝 S D150601・150602土層断面図

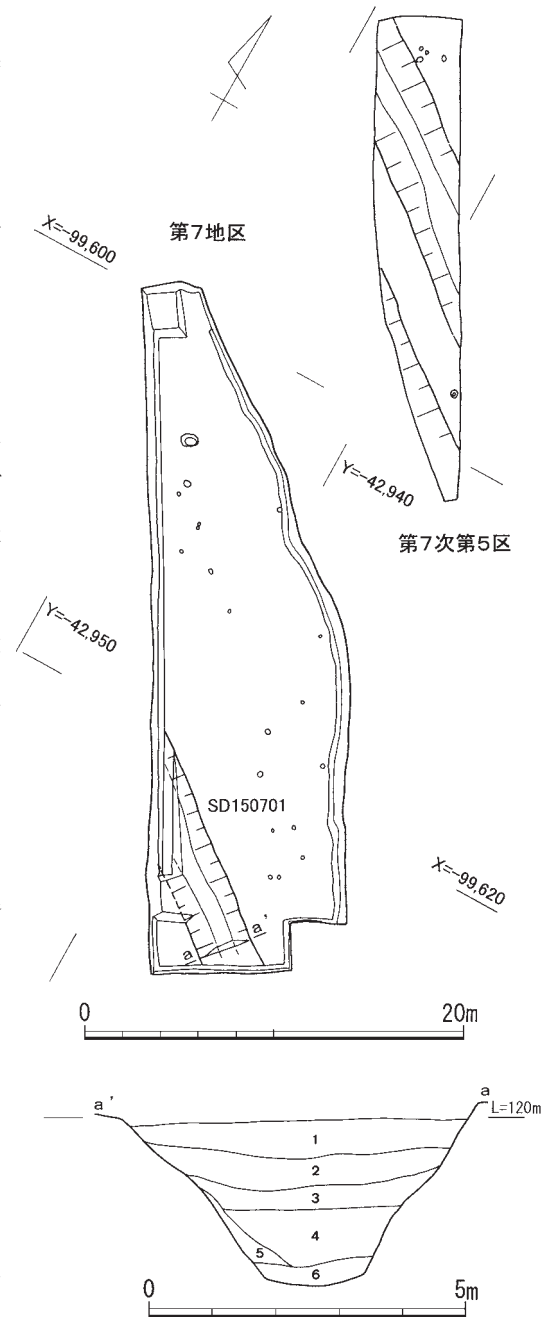
で合流しており、このか所では幅約3.5mと広がる。深さは1.4mを測る。溝の断面形は台形状で底部に狭い平坦面をもつ。溝内の堆積土は、黒色ないし暗褐色粘質土の互層からなるが、各層や層間には径5cm大の礫や細かい砂礫を含んでおり、流水の状況が窺われる。溝の中央より北側では溝底部に2条の溝状の窪みがみられ、その間は畦状に掘り残されている。この部分は近年の送電線設営のため周囲が大きく掘削されており不明瞭な点があるが、溝の部分的な改修に伴う掘り返しの跡と思われる。ただし、溝底部の堆積層から上層では掘り返しを示す明瞭な層序の変化

は認められないため、開削は、最初の溝掘削後の早い時期に行われたものと思われる。溝の開削時期は、出土遺物から奈良時代後半～平安時代初頭とみられる。後述する溝 S D 150602 も同時期に比定されるもので、本流となる本溝 (S D 150601) への排水溝と考えられる。なお、本溝の南側では調査地南西角に向かって遺構面が大きく下がっていくことを確認した。

溝 S D 150602 溝 S D 150601 の南東側で合流する溝である。北西方向からやや南東方向にのびる。約 9 m 分を検出した。溝断面は緩い「U」字形を呈しており、溝内には暗褐色粘質土が堆積する。規模は最大幅 2.3 m を測り、溝底は合流点付近では深さ 0.5 m、北端部では 0.1 m となり、南から北側に向かって急傾斜で浅くなる。北側部に位置する第 5 地区では、溝の延長が検出されていないため、途中で途切れるものと思われる。溝 S D 150601 との合流点付近で少量の炭と共に墨書土器を含む須恵器杯がまとまって出土した。出土した位置は溝 S D 150601 内に含まれるが、層的にみて本溝の溝底部の延長部に当たっており、本溝から流れ込んだ可能性が高い。溝上層の堆積層は、黒褐色の粘砂質土で溝 S D 150601 の上層と一体となることから、同時期に埋没したことが窺える。溝上流方向の北西側には第 5 地区の奈良時代後半～平安時代初頭の掘立柱建物跡群が存在しており、本溝はこれらの施設の排水の役割をもつ溝と思われる。

柱穴状ピット S P 3 (第 10 図) 長径 0.45 m、短径 0.35 m、深さ 0.15 m を測る長楕円形のピットで、内部から土師器皿 (第 17 図 23) が出土した。

柵 S A 150603 (第 10 図) 溝 S D 150602 の東上肩の縁部から並んで検出した柱列で、柱穴 3 基 2 間分 (長さ約 3.6 m) を検出した。主軸は N35° W である。柱穴は径 0.4 m、深さ 0.2 m で平面形は円形を呈する。柱間は 2.1 m (南)、1.5 m (北) を測る。北東側は調査地外、南西側は溝 S D 150602 部分に当たり柱穴の延長を確認していないので柵とし



< 第 7 地区溝 SD150701 断面 >

1. 黒褐色粘質土 (10YR 2/2)
2. 暗褐色粘質土 (10YR 3/2)
3. 暗茶褐色粘砂質土 (10YR 3/3)
4. 暗褐色砂礫土 (10YR 2/3)
5. 暗茶褐色粘質土 (10YR 3/3)
6. 暗褐色粘質土 (10YR 2/2)

第 11 図 第 7 地区遺構配置図、
溝 S D 150701 土層断面図

たが、東側に展開する建物跡になる可能性もある。溝 S D 150602の上から掘られており、所属時期は溝より新しい。

7) 第7地区(第11図)

第6地区から新庄用水を越えた南側に位置する調査区で、溝1条、小ピットを検出した。調査面積は300㎡である。

溝 S D 150701(第11図) 第5次調査6地区の試掘調査で確認された溝 S D 601の南東延長部にあたる。溝は北西から南東方向にのび、幅約3m、深さ約1.5mを測る。延長約15m分を確認した。溝の断面形は底部の平坦な台形を呈し、黒褐色粘質土面から掘り込まれるが、北側では砂礫を多量に混じえる面から掘削される。溝の埋土は、黒褐色ないし暗褐色粘質土で、以下が粘質土の中に砂礫を含む土層、最下層は強度の強い粘質土になる。今回の検出地点では西上肩部からの粘質土の流れ込みがみられた。溝上層からは、古墳時代から奈良～中世の須恵器・土師器・陶磁器片が出土したが、これらは後世の流れ込みによるものと思われる。溝の時期については不明である。

8) 第8地区

第7地区南側の道路を越えた地点で行った試掘調査である。溝2条のほか、小ピットを検出した。調査面積は132㎡である。本地区については、第17次調査第2地区で西側部分を拡張し発掘調査を行った。

9) 第9地区(第12図)

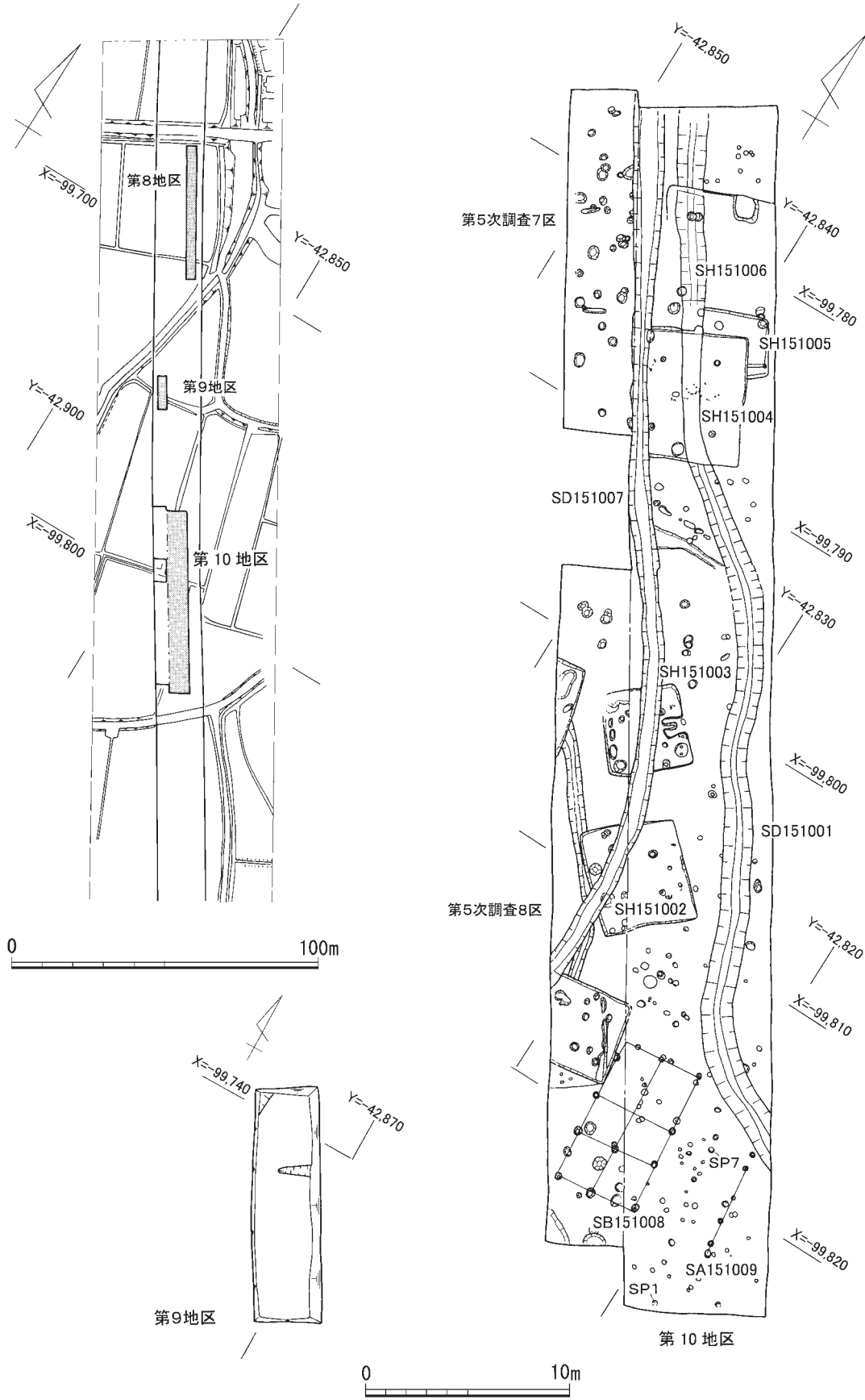
第8地区と第10地区の間に設けた調査区で、調査面積は30㎡である。調査地の北西肩で溝状の落ち込みの一部を確認した。このほかは特に顕著な遺構は検出されなかった。

10) 第10地区(第12・16図)

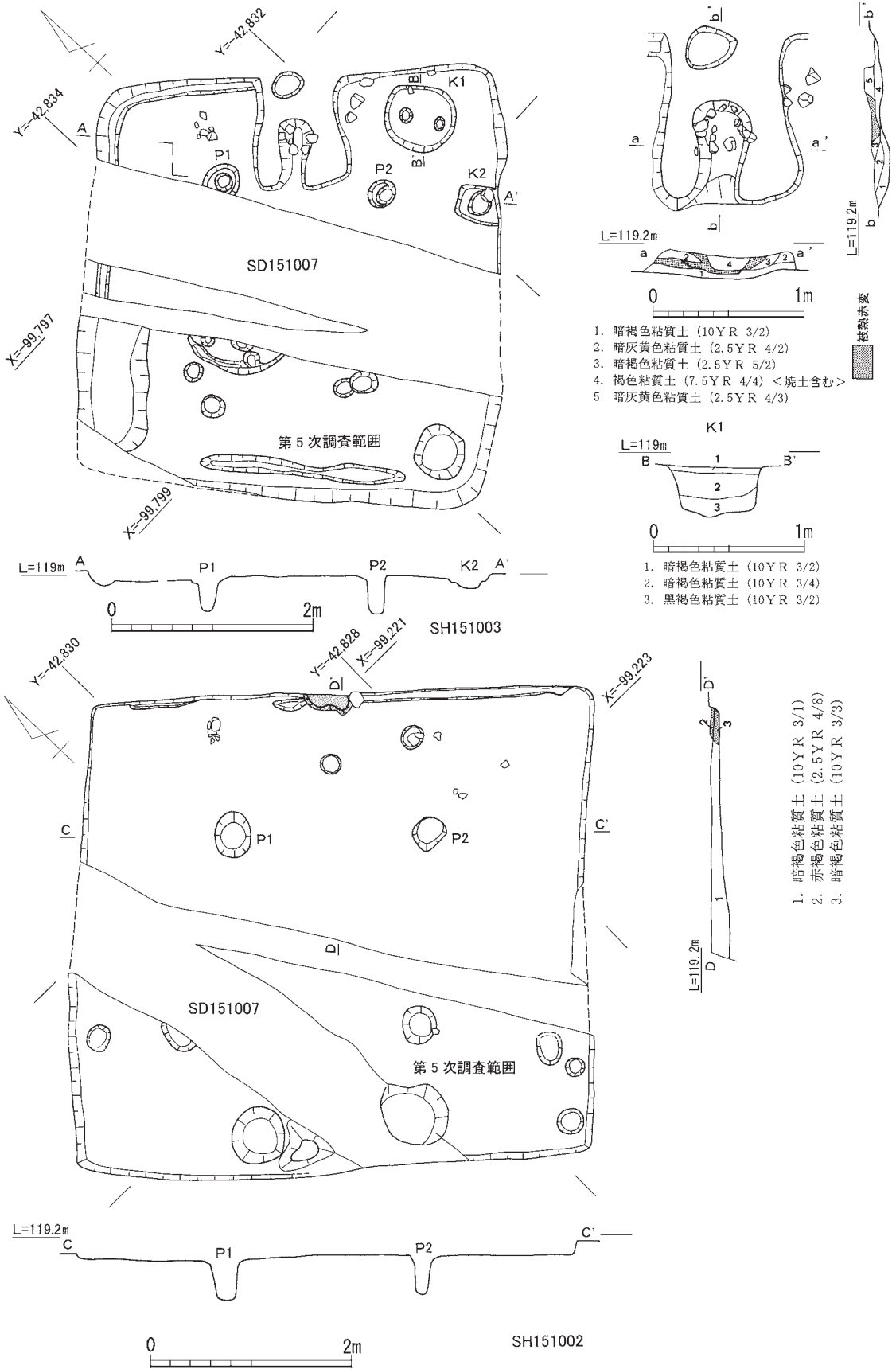
今回調査対象地のなかでは最も南側に位置する。主な検出遺構としては、竪穴式住居跡5基、掘立柱建物跡3棟、溝2条がある。調査面積は420㎡である。

竪穴式住居跡 S H 151002(第12・13図) 調査地南部で検出した方形竪穴式住居跡で、第5次調査の竪穴式住居跡 S H 805の北東側部分にあたり、未調査であった東側の2コーナーを確認した。住居跡東辺では、南北一辺の規模は長さ5mを測る。深さは最大で0.2m遺存する。主柱は、北東と南東の2基(P1・P2)を検出した。両柱穴の間隔は約2mを測る。住居跡東辺中央の壁面に沿って長さ0.5m、幅0.2mの被熱した粘土塊を検出した。遺存状態は悪いが造り付け竈の残存部と思われる。東側壁体に沿って浅い溝が遺存するが部分的である。住居内の東側床面付近で須恵器杯身、土師器甕片の散布が認められた。第5次調査でも陶邑編年 T K 23～47型式に属する須恵器杯が出土しており、住居の所属時期は古墳時代中期末～同後期前葉に比定される。

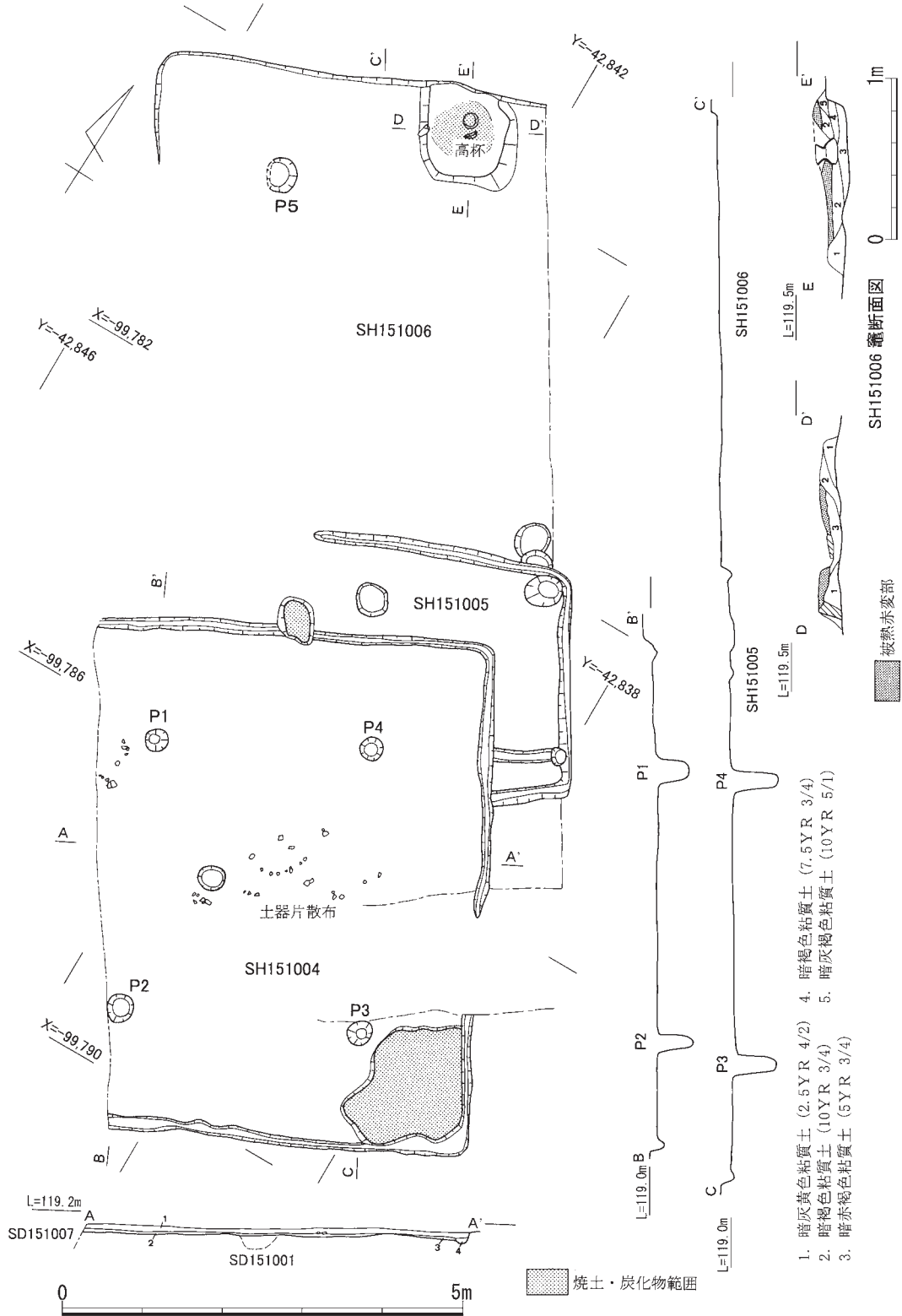
竪穴式住居跡 S H 151003(第12・13図) 竪穴式住居跡 S H 151002の北側2.4m離れた位置で検出した方形竪穴式住居跡。第5次調査で未調査であった竪穴式住居跡 S H 807の北東部にあたる。今回、住居跡の北東と南東隅を確認し規模が判明した。住居跡東側辺の長さは約4mを測りやや小型の部類に属する。住居跡の中央から西側にかけて後述する奈良時代の溝 S D 15007によって



第12図 第9・10地区遺構配置図



第13図 竪穴式住居跡 S H151002・151003実測図



- | | |
|-----------------------|------------------------------|
| 1. 黒褐色粘質土 (7.5YR 2/2) | 3. 黒褐色粘質土 (10YR 2/2) <炭化物含む> |
| 2. 黒褐色粘質土 (7.5YR 2/3) | 4. 黒色粘質土 (7.5YR 2/1) |

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1. 暗灰黄色粘質土 (2.5YR 4/2) | 4. 暗褐色粘質土 (7.5YR 3/4) |
| 2. 暗褐色粘質土 (10YR 3/4) | 5. 暗灰褐色粘質土 (10YR 5/1) |
| 3. 暗赤褐色粘質土 (5YR 3/4) | |

第14図 竪穴式住居跡SH151004~151006実測図

削平を受けるが、床面には主柱2基(P1・P2)が遺存する。柱穴は径約0.3～0.4m、深さ約0.36mで、間隔は1.6mを測る。住居跡東壁のほぼ中央に幅約1m、長さ約1.2mの馬蹄形状の造り付け竈を付設する。竈上面は削平を受けており遺存状態は悪いが、焚き口部分は赤く焼け締まっております比較的原始をとどめる。竈の南東側で長辺0.8m、短辺0.7m、深さ約0.32mを測る貯蔵穴と思われる不整形土坑(K1)を検出した。土坑K1とは竈を挟んで反対側の東と北側辺の壁体に沿って幅0.1m程の浅い周壁溝をめぐらすが、前回、北西側で検出された防湿用と思われる幅広の溝は、確認できなかった。竈の周囲から土師器甕片が散乱した状態で出土しており、前回調査時の所見と合わせて住居の時期は古墳時代中期～同後期前葉に比定される。

竪穴式住居跡SH151004(第12・14図) 調査区の北側部分で検出した方形竪穴式住居跡で、重複して竪穴式住居跡SH151005が存在する。住居跡は南北方向の軸に対して30°程西に傾いており、他の2基の住居跡もほぼ同様な方位を示す。住居跡の規模は南北軸で約6.5mを測るが、西壁側については不明である。住居跡の上面は大きく削平を受けており、検出面から住居の床面までの高さは0.1m程度が残るのみである。溝SD151001が埋没した後に構築されており、住居床面には黄褐色粘質土の貼り床が一部で残る。住居跡の四周には幅約0.1mの浅い周壁溝をめぐらす。主柱穴は4基で、直径0.3m、深さ0.4mを測る。住居跡北側の壁面中央付近に、壁面に接して焼けた粘土塊が遺存しており、造り付け竈痕跡とみられる。南壁側には壁面に接して貯蔵穴と思われる径約0.6m、深さ0.1mの浅い円形土坑があり、床面中央付近には土師器片が散布していた。住居の時期は、出土遺物から古墳時代後期に属するものと考えられる。

竪穴式住居跡SH151005(第12・14図) 竪穴式住居跡SH151004の北東部分と重複して検出した住居跡である。床面付近まで大きく削平されており住居跡と確定するには不安を残すが、「コ」字形に遺存する周壁溝と思われる細溝の状況から方形竪穴式住居跡とした。北東側の周壁溝の規模は長さ約3mを測る。北西側でも北東隅部分から約3m付近で途切れており、後述する竪穴式住居跡SH151006によって削平されたものと考えられるが当初から小型の住居であった可能性もある。南東側溝では0.5m内側に並行する溝があり、同一場所で拡張等による建て替えが行われたものとみられる。住居跡の床面付近まで削平されており出土遺物がないが、重複する住居跡との切り合い関係からみて、竪穴式住居跡SH151004・SH151006に先行するものと考えられる。

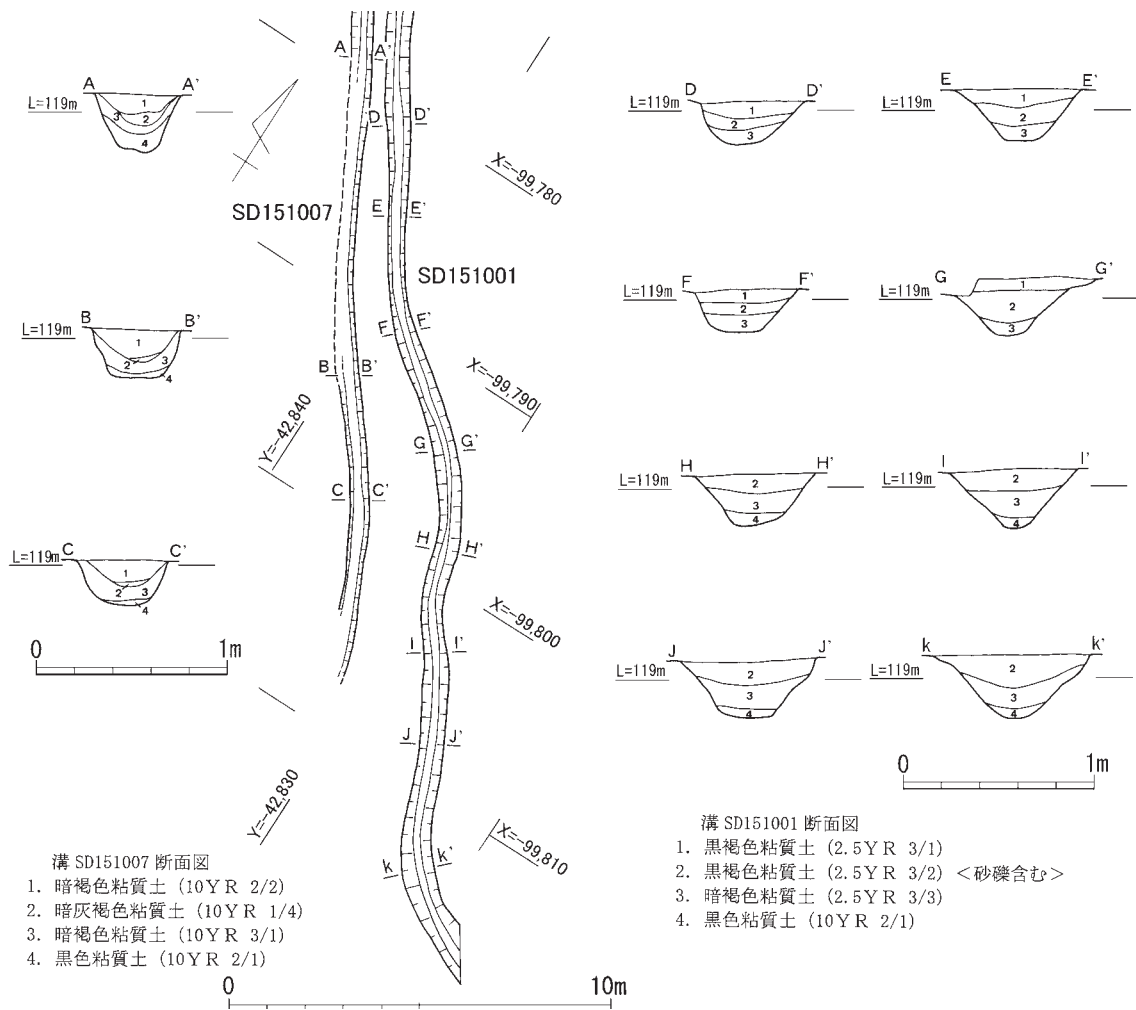
竪穴式住居跡SH151006(第12・14図) 調査区の北端に位置する住居跡で、竪穴式住居跡SH151004と同様、溝SD151001の埋没後に構築されている。住居跡の北西隅を含む北側と西側の壁面の一部を検出したのみで全体の規模については不明である。北壁側に造り付け竈を付設する。試みに竈を中心に周壁を北東側に折り返すと住居跡の全体規模は、一辺約7～8m程に復原できる。竈は長軸約1.2m、短軸約1.2mの規模をもつ。焚き口にあたる付近の床面からも炭や灰等の散布は認められなかった。竈は断ち割りの結果、燃焼部から須恵器高杯1個体(第17図12)が倒立した状態で検出された。竈に掛ける土器の支柱として転用されたものと考えられる。主柱穴については明確でないが、溝SD151001の肩部で検出されたP5が主柱穴の一つに相当するものと思われる。P5の規模は径約0.5m、深さ約0.5mを測る。住居の時期は、竈内で出土した須恵器高

杯片から古墳時代後期(6世紀後半)に比定される。竪穴式住居跡S H151005との先後関係は、住居跡の南半分が削平されており明らかでないが、本住居跡が先行する可能性がある。

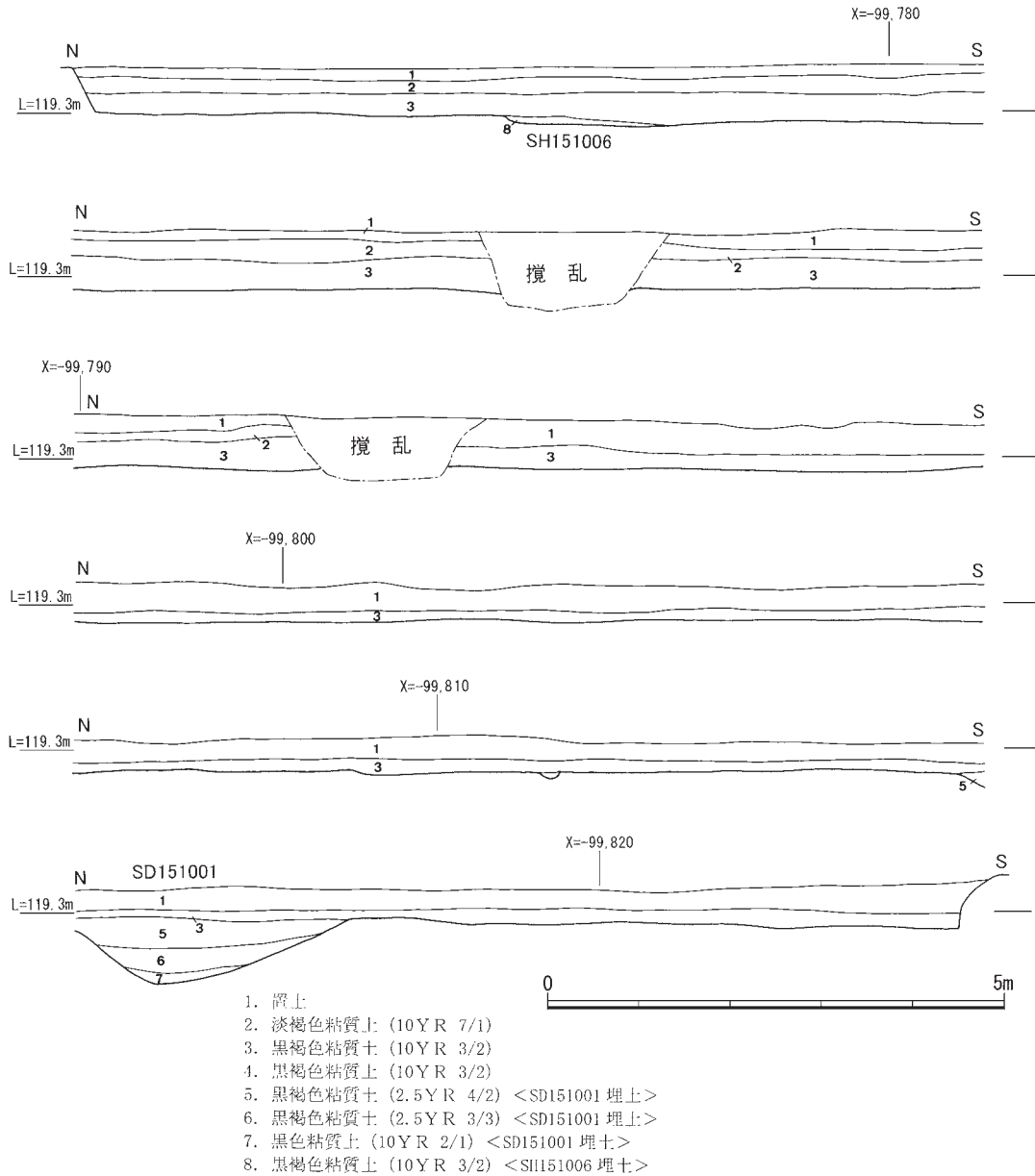
掘立柱建物跡S B 151008(第12図) 調査区南端部分で検出した掘立柱建物跡で、第5次調査時検出の掘立柱建物跡S B 801の北東部分にあたる。第5次調査では東西1間以上×南北3間の総柱建物跡に想定されているが、今回調査の結果、東西は2間であることがわかった。建物跡の各柱の間隔は南北列が2.4~2.5m、東西列は約2m等間を測り、建物規模は南北7.3m、東西4.2mに復原できる。柱穴は径約0.3~0.4mで、深さ約0.2m前後を測る。なお、妻部にあたる建物北側柱列の北側で柱穴1基を確認しており、建物規模がさらに北側に拡大する可能性がある。建物時期は平安時代後期~末頃に比定される。本建物の南側に位置するピットS P 1からは瓦器碗2点が出土しているが性格については不明である。

柵S A 151009(第12図) 掘立柱建物跡S B 151008の東側で検出した柵で、5~6基の柱穴が1~1.5mの不等間隔で並ぶ。柱穴は径約0.3m、深さ0.4~0.5m前後を測る。出土遺物がなく時期は不明であるが、方位が掘立柱建物跡S B 151008と等しく、同時期のものと考えられる。

溝S D 151001(第12・15図) 調査地北西端から南東方向にやや蛇行しながらのびる溝である。



第15図 溝S D 151001・151007土層断面図



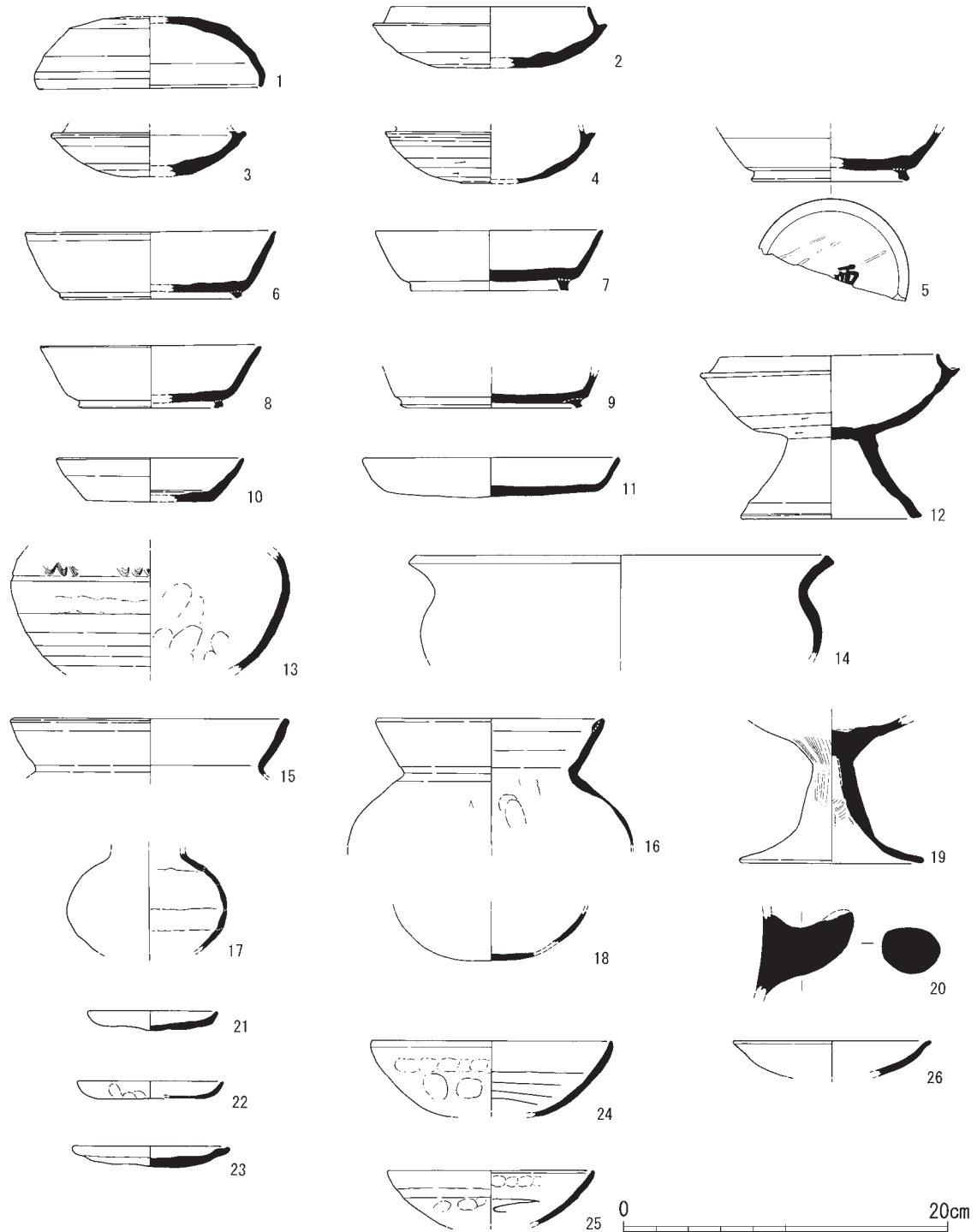
第16図 第10地区東壁土層断面図

幅約1.1～1.6m、深さ0.6m前後を測る。溝断面は「V」字形ないし溝底幅の狭い逆台形状を呈する。溝の所属時期については、上層から土師器の小片が出土したのみで詳細は不明であるが、本溝の埋没後、竪穴式住居跡 S H151004～151006が構築されており、これらに先行するものである。

溝 S D 151007 (第12・15図) 調査地の北西隅から調査地西壁の中程に沿ってのびる溝で、第5次調査時検出の溝 S D 803にあたる。幅約1m、深さ0.5mの断面台形状を呈する。今回、延長約40m分を検出した。溝北端部の上層から高台を有する須恵器杯身片1点(第17図8)が出土しており、奈良～平安時代に属するものと考えられる。この溝は埋没段階に掘り直されたことが埋土の状況からうかがえる。

2. 出土遺物(第17図)

第15次調査では、整理箱で計18箱の遺物が出土した。1～14は須恵器である。1は杯蓋で口径13.6cm、器高4.4cmを測る。第10地区堅穴式住居跡S H151006から出土した。2～4は杯身である。2は口縁部が受け部から直線的に内上方にのびる。復原口径12cm、器高3.85cmを測る。3・4は底部・口縁部とも欠損するもので、3は復原口径12.8cm、4は同12cmを測る。いずれも古墳時代後期に所属するものである。2・4は第10地区溝S D151007、3は第10地区堅穴式住居跡S H151002から出土した。5～9は高台をもつ須恵器杯Bである。底部から外上方に直線的に口縁



第17図 出土遺物実測図

部がのび、底部外縁のやや内側に高台を貼り付ける。口径は概ね13cmから15cm前後を測る。5は底部に「西」の字の墨書をもつ。下半部は欠損しており、これに続く文字があったかどうかは不明である。5～7・9は第6地区溝S D150601、8は第10地区溝S D151007から出土した。10・11は皿である。10は口径11.4cm、器高2.7cmを測る。11は口径15.4cm、器高2.45cmを測るやや大形のものである。10は前記の溝S D150601、11は第7地区から出土した。5～11の所属時期は、奈良時代後半～平安時代初頭(8世紀末～9世紀前半)に属するものである。12は須恵器高杯である。脚部は外反しながら底部にのびるが、下段ではやや内側に屈曲し稜をもつ。焼成はやや軟質である。第10地区竪穴式住居跡S H151006の竈内部から出土した。支脚として転用されたものとみられる。古墳時代後期に所属する。13は球形の体部をもつ壺である。胴部最大径の部分に波状文を巡らす。焼成は堅緻である。古墳時代後期前半に比定される。第10地区竪穴式住居跡S H151002から出土した。14は鉢あるいは甕と思われる体部上半部である。肩部の張った体部から短く立ち上がる口縁をもつ。焼成はやや軟質である。奈良～平安時代に所属するものと思われる。第6地区から出土した。15～20は土師器である。15は甕の口縁部である。16は甕の体部の上半から口縁部にかけての破片である。口縁端部はやや肥厚させる。肩部外面はハケ、体部内面はヘラケズリを施す。古墳時代中期後半に比定される。17は球形の体部をもつ小形の壺である。口縁部と底部を欠損するが、立ち上がりの短い口縁部を有するものと思われる。18は丸底の甕底部である。19は高杯脚部である。杯部は接合部を残して欠損する。脚部内面にしぼり目、外面にはハケメを施す。20は牛角状を呈する甑の把手である。17～20はいずれも古墳時代中期から後期に属するものと思われる。15・18は第10地区の竪穴式住居跡S H151003竈周辺から出土した。16・17・19は第10地区竪穴式住居跡S H151004、20は同S H151002から出土した。21～23は中世の小皿である。21・22の口縁部は横ナデを施し、端部は丸く収める。色調は淡灰褐色ないし灰黄褐色を呈する。23は口縁端部を屈曲させる。21は第10地区溝S D151001上層、22は第10地区ピットS P 7、23は第6地区ピットP 3から出土した。11～12世紀に所属するものである。24・25は瓦器碗である。24の口縁部は体部から内湾気味に立ち上がる。体部外面は指オサエ、内面見込み部にはミガキを施す。25の口縁端部は丸く収め、内面に一条の沈線を施す。口縁部内面と体部下半には指オサエの痕がみられる。24・25とも第10地区ピットS P 1から出土した。12世紀に属するものと思われる。26は灰釉陶器皿の口縁部である。第5地区ピットS P 41から出土した。

3. まとめ

今回の第15次調査では、これまでに数次に亘って実施された調査と同様、各地区から遺構が検出され、室橋遺跡が広範囲に広がるということが再確認された。

第1・2地区で検出された大溝はこれまで推定されていた室橋遺跡の範囲を越えてさらに北側にのびることが判明した。

第5地区では、奈良時代後期後半～平安時代初頭と推定される掘立柱建物跡が3棟検出された。これらの建物は時期を違えて存在したものであるが、建て替えに際してはその規模や建物の軸を

揃えて建てられており、強い計画性をもつ。第6地区溝SD150601はこれらの建物群のある位置から南方向にのびる溝であり、今回室橋遺跡では唯一の墨書土器が1点出土した。以上のように断片的な資料であり推測の域を出ないが、これらの建物群については何らかの公的機関の施設であった可能性も考えておきたい。さらに今回の調査域の北東方向にあたる第6次調査^(注2)では比較的規模の大きい奈良～平安時代の掘立柱建物跡が検出されている。おそらく当地区から北東側の山裾にかけての部分に、同時期の集落の主要部が存在するものと思われる。

第10地区では、古墳時代中期から後期にかけての竪穴式住居跡が5基検出された。周辺では、これまでの調査で多数の竪穴式住居跡が検出されており、今回の調査結果からも、古墳時代の集落が広い範囲に及ぶことが確認できた。

室橋遺跡では、広範囲に亘ってほぼ南北にのびる大小規模の溝が多数検出されており、当遺跡を特徴づける遺構群となっている。これらの溝は基本的に灌漑用水として開削されたものと考えられるが、掘削時期および各溝の関係や経路については不明な点が多い。今後の調査資料の増加と分析に俟ちたい。

(辻本和美)

(Ⅱ)室橋遺跡第17次調査

第17次調査の調査対象地は、道路建設予定地内における第15次調査の試掘結果を受け、京都府教育委員会・南丹市教育委員会との協議のもとに調査範囲を決定し、遺跡の北端部と中央部に計4か所の調査区を設定した。第1～3地区は、遺跡中央部から南部に配し、第4地区を遺跡北部に設定した。調査面積は、全体で1,200㎡を測る。

1. 調査の概要

(1)第1地区(第19図)

今回の調査において最も南に位置する調査区であり、第15次調査における第10地区の調査成果を受け、北側に隣接して設定した。調査面積は、50㎡を測る。調査区周辺は平坦な地形が広がり、調査前には耕作地として利用されていた。調査前の標高は約119.9m前後で、遺構検出面は115.5mである。遺跡周辺の土壌は、いわゆる丹波黒ボク層とされる黒褐色土およびその再堆積層が広がる地域である。調査区の層序は、上層から暗灰黄色粘質土(第20図下2層、耕作土)、オリーブ褐色粘質土(同3層)、黒褐色粘質土(同5層)、黒色粘質土(同19層)の順に堆積する。オリーブ褐色粘質土層は近世遺物包含層であり、第5層の黒褐色粘質土層は瓦器を含み、平安時代後期以降の遺物包含層とみられる。検出した主な遺構は、溝2条と柱穴群である。柱穴群は、調査区東寄りでも多く検出した。柱穴には土師器を出土するものがあり(P1)、おおよそ平安時代を中心とした柱穴群とみられるが、調査範囲内で建物跡として復原するには至っていない。

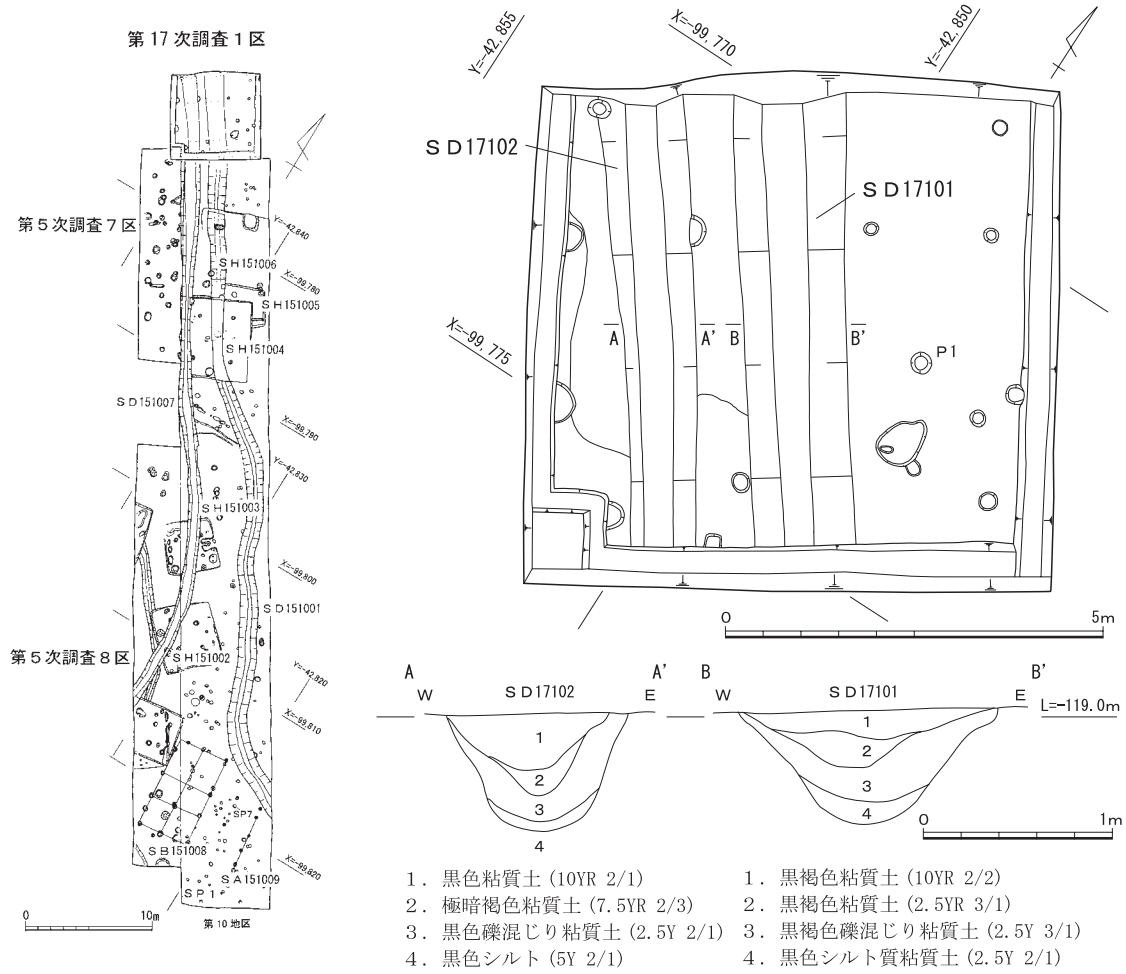
溝SD17101 調査区中央で検出した溝である。北西から南東方向に流れ、幅約1.4m、深さ



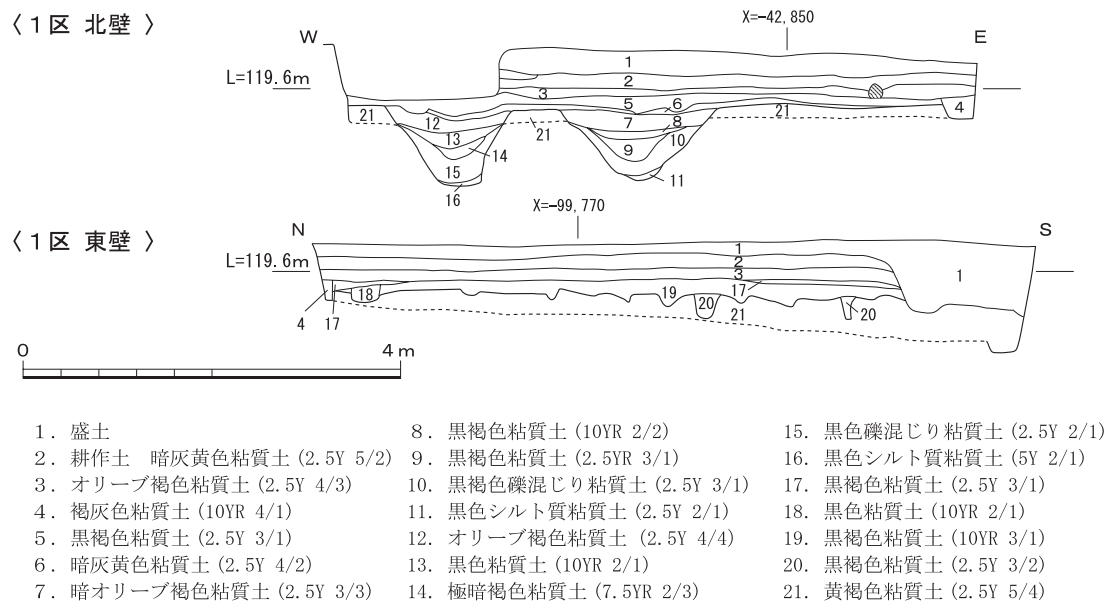
第18図 第17次調査地配置図

0.6~0.7mを測る。最下層はシルト質の土層をなし、下層にやや礫を含む。遺物は土師器片が出土したが、細片のため時期を明らかにできる資料ではない。南に隣接する第15次調査のS D 151001と連続する溝であり、およそ古墳時代中期~後期にかけての溝と推定される。

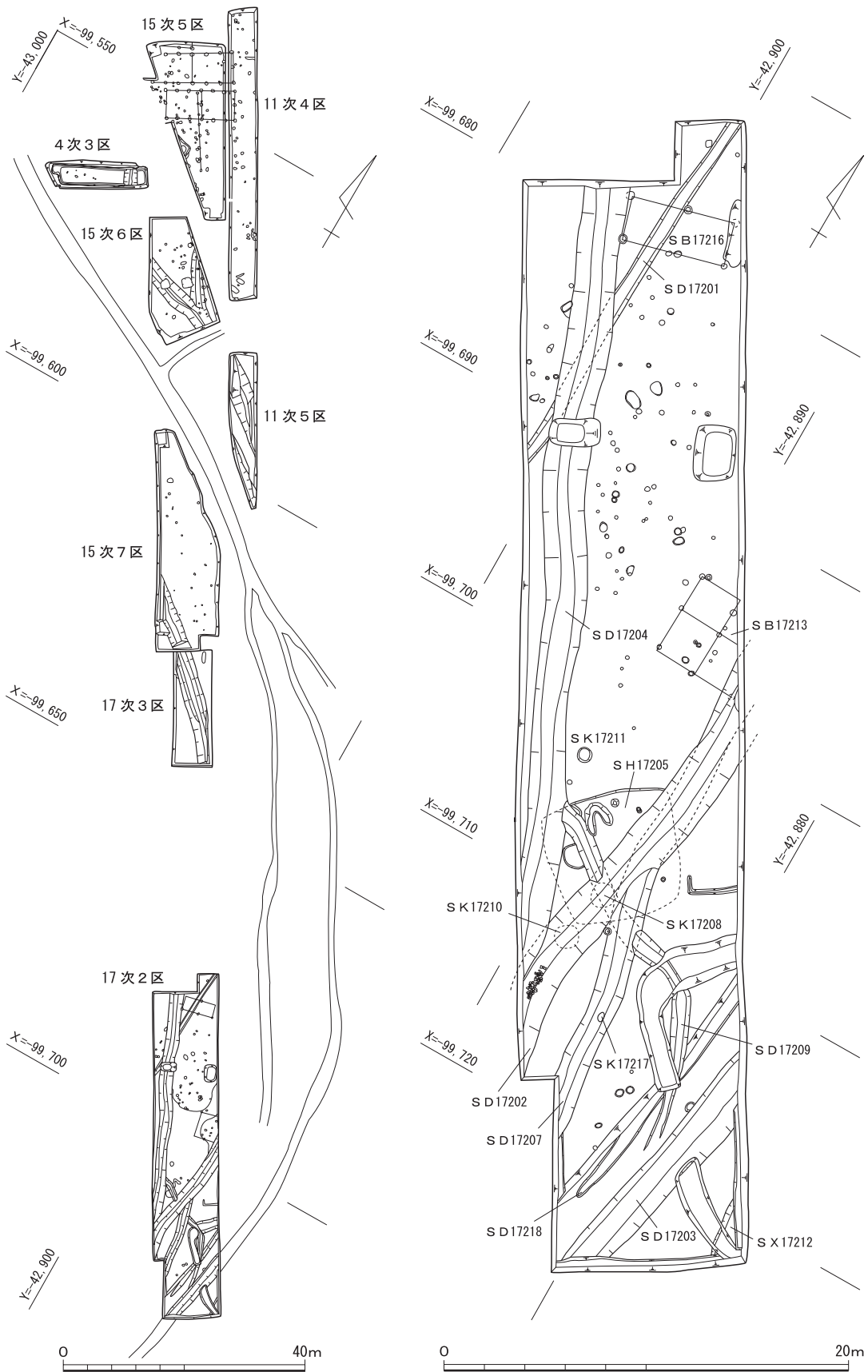
溝S D 17102 調査区西寄りで検出した溝である。幅0.9~1.1m、深さ0.6mを測る。溝内から土師器片や瓦器片が出土しているが、時期を明確にできる資料ではない。第15次調査の溝S D 151007、第5次調査の溝S D 803と同一の溝であり、過去の調査から平安時代中期~後期の溝と推定される。



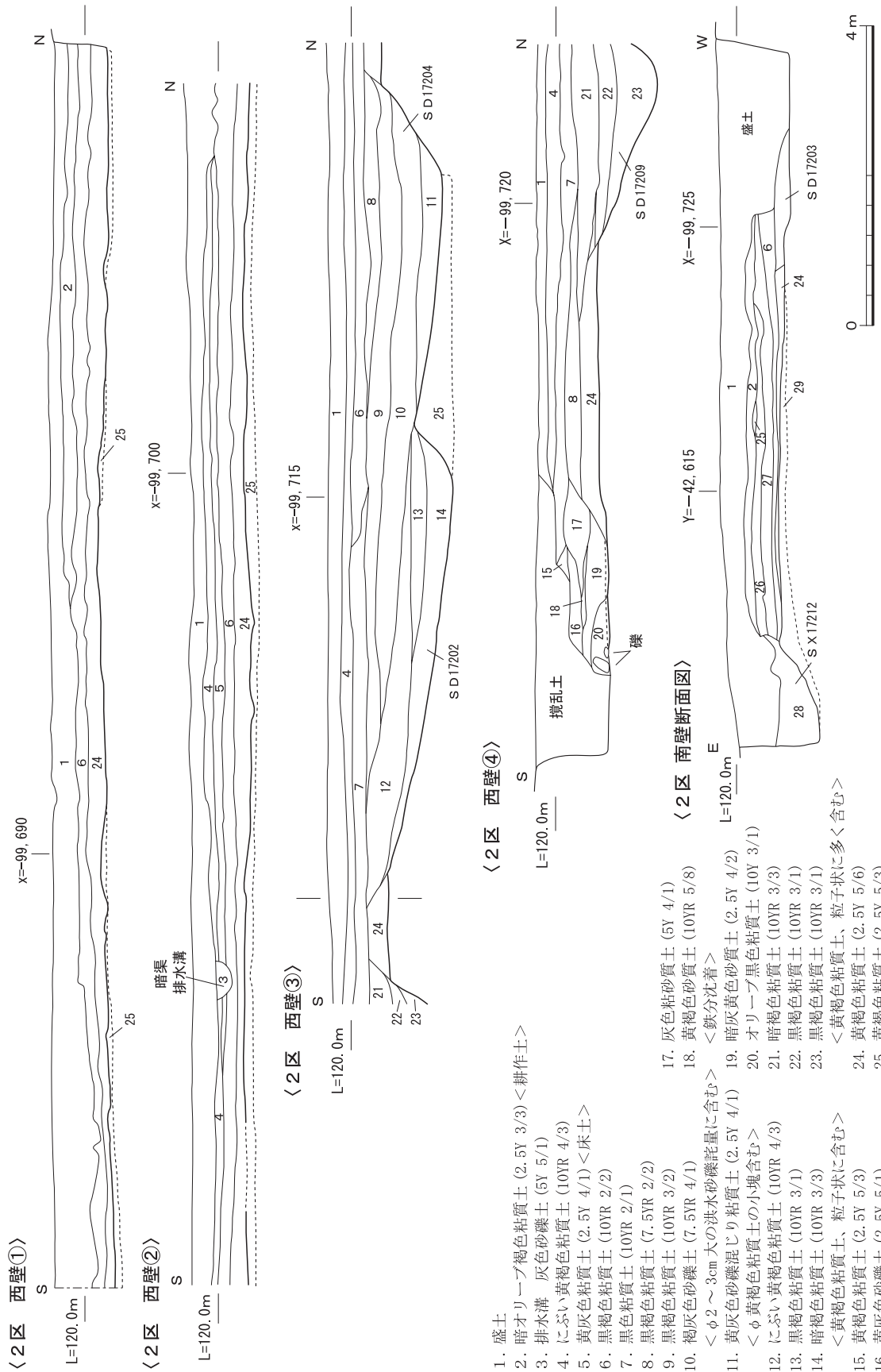
第19図 第1地区調査区配置図・遺構配置図、溝SD17101・17102断面図



第20図 第1地区土層断面図



第21図 第2地区調査地配置図・遺構配置図



第22図 第2地区土層断面図

(2)第2地区

遺跡のほぼ中央に位置する調査区である。第15次調査の試掘地点(第8地区)を拡張し、調査地を設定した。調査面積は、580㎡を測る。主な検出遺構は、古墳時代中期の溝1条、中期～後期の溝1条、古墳時代後期の竪穴式住居跡1基と土坑1基、さらに平安時代から鎌倉時代前期にかけての溝群である。調査前の周辺の標高は約120.3mを測る。層序は、上層から耕作土(暗オリーブ褐色粘質土、第22図2層)、黄灰色粘質土(同5層)、黒褐色粘質土(同6層)、黒色粘質土(同24層)の順に堆積し、黄褐色粘質土層が基盤層となっている。黒褐色粘質土層中には、瓦器等を含むことから平安時代後期以降の包含層とみられる。

①古墳時代の遺構

第2地区南部では、同一検出面に古墳時代中期～平安時代の溝が錯綜し、検出には困難を極めた。古墳時代の遺構は、おおよそ2時期あり、溝を中心とする中期～後期にかけての遺構群と、竪穴式住居や土坑からなる後期後半を主体とする時期がある(第23図)。

竪穴式住居跡 S H17205 (第25図) 調査区中央南東寄りで検出した住居跡である。溝 S D 17204・溝 S D 17209により西半を大きく削平されている。規模は、約5.8×6.1mを測る。主柱穴は4本からなると推定されるが、西側床面は削平されているため、詳細は不明である。北辺中央に造り付け竈をもつ。竈は、西側袖部の一部を後世の溝によって削平されるが、残存状況は比較的良好で馬蹄形を呈する壁体が良く遺存していた。規模は、長さ1.2m、最大幅1.3mを測る。中央部で火床とみられる炭化物を含む暗赤褐色層の広がりを確認した。また主軸上の中央南寄りで、竈支脚と推定される粘板岩の小石材を検出した。遺物は、竈中央部の落ち込みから土師器甕が出土し、前庭部東寄りで須恵器杯身が出土した。また竈の西側の床面で、土坑(K-1)を検出した。土坑内から須恵器杯身とみられる土器片が出土していることより、住居床面に伴う土坑と推定される。東半を溝によって削平されているが、復原径約1.2mと推定される。床面から出土した須恵器は、陶邑 T K10～T K43型式に相当し、おおよそ6世紀中頃～後葉の住居跡と推定される。

溝 S D 17202 (第24図) 中央部で約20mにわたって検出した溝である。北から南へ向かって流れる溝とみられ、規模は、幅約2.5m、検出面からの深さ1.1mを測る。断面形は「V」字形を呈する。S D 17202の層位は、最下層から中層にはシルト質粘質土を主体とし、砂礫を多く含む層はみられないことから、主に集落を区画する溝としての機能を持っていたと推定される。最下層には、ベースと同様の黄褐色粘質土が粒子状に入り、掘削から比較的早い段階に埋没したとみられる。中層には断面形に合わせて落ち込むシルト質のにぶい黄褐色粘質土が堆積し、滞水する状況があったことが伺える。また上層には小礫を多く含む黒色礫混じり粘質土が堆積するが、なお緩やかな「V」字形の断面形を有していることから、溝の機能は維持していたとみられる。溝は層状の堆積によって自然に埋没し、その後新たに S D 17207が掘削されている。溝の南西部の下層で長さ約2mの範囲に甕・高杯等などの土師器がまとまって出土した。土器はほぼ完形に近い個体に復原できる高杯などを含むが、全体に完形率は低く、一括廃棄されたとみられる。出土した土師器はおおよそ布留2式新相～3式古相に位置付けられ、古墳時代前期末～中期初葉を中

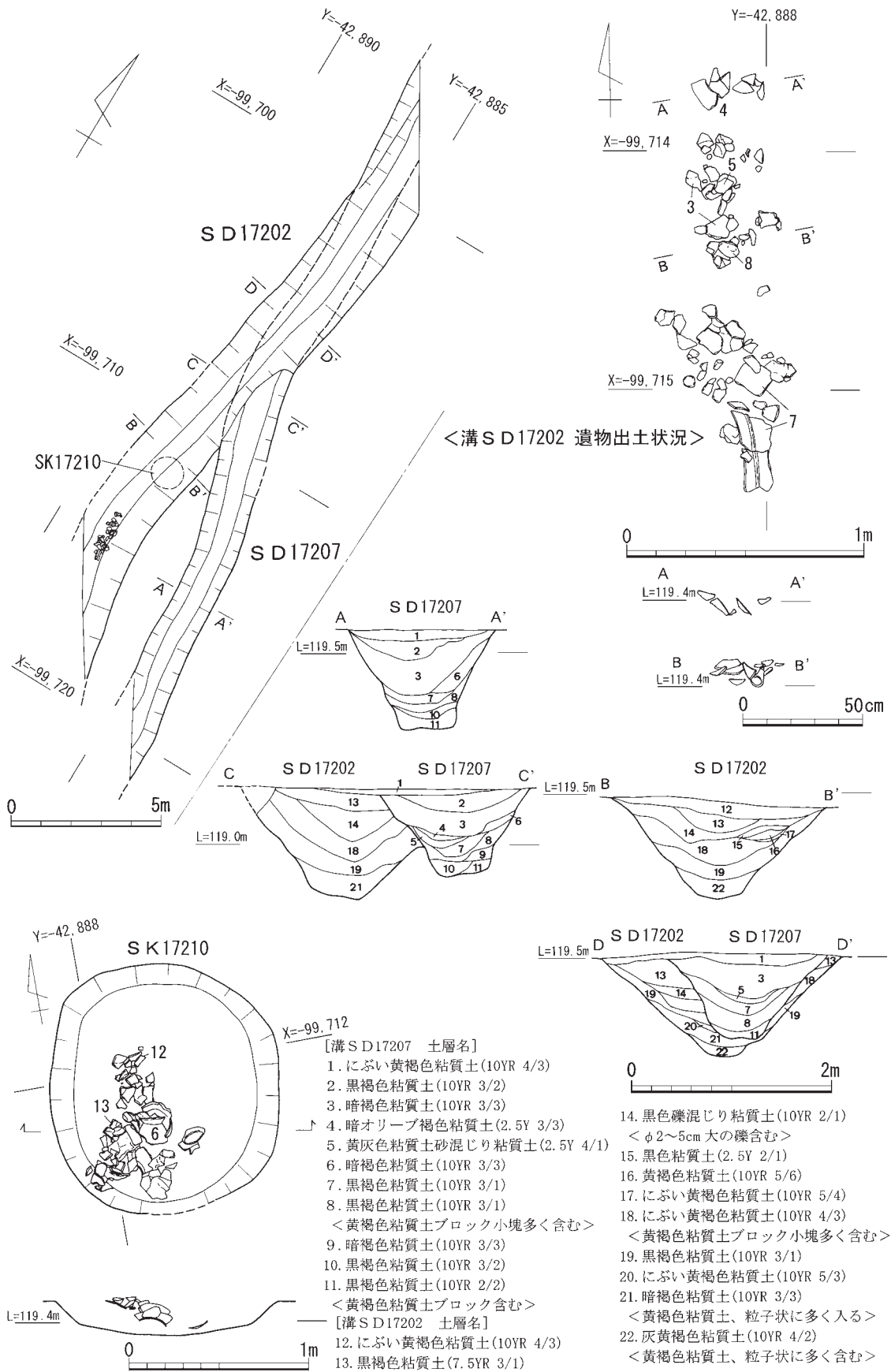


第23図 第2地区古墳時代遺構配置図

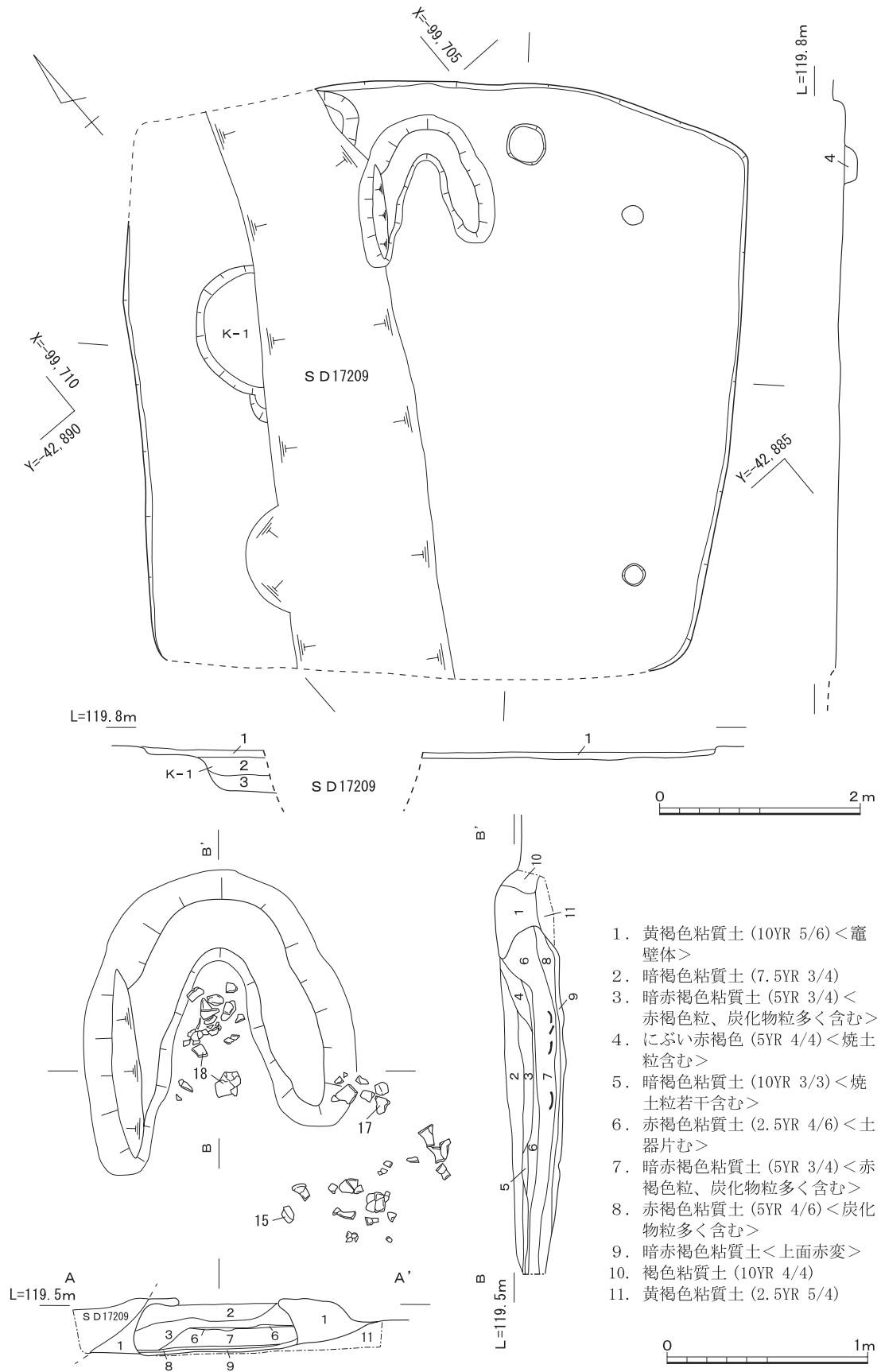
心とする資料である。

溝 S D 17207 (第24図) 中央部から南西部にかけて検出した溝である。北東から南西方向へ流れ、北部では S D 17202 と重複して検出した。規模は、1.3~1.5m、深さ0.85mを測る。断面形は逆台形を呈する。溝掘削面の立ち上がりは、下層の勾配が66°と大きい。溝 S D 17202 と大きく重複する溝の北東部では、溝 S D 17202 よりも徐々に北寄りに掘削され、調査範囲外へ延びる。南西部では大きく南東側に方向を変える。土層断面の観察から、S D 17202 が完全に埋没してから、新たに掘削された溝であることがわかる。埋土は、全体に砂礫が極めて少ないことから、基本的には流路として機能していたものではなく、S D 17202 と同様、空濠として区画溝などの性格を有していたと推定される。最下層は、基盤面の黄褐色粘質土のブロックを含み、下層には、黄褐色砂粒を多く含むことから、溝は比較的早い段階に埋まったと考えられるが、上層は良く締まった粘質土が層をなして堆積し、比較的長期間の間に自然に埋没したと推定される。出土遺物は極めて少なく、須恵器片が出土したが、時期を明確にできる資料ではない。溝は、後期後葉の竪穴式住居跡と重複し、住居が溝上面に構築されることから、それ以前に掘削されたことが明らかである。須恵器片が出土していることより、古墳時代中期後葉以降、後期前半を下限とする溝と推定される。

土坑 S K 17210 (第24図) 調査区南西部で検出した土坑である。S D 17202 と重複して検出し、その廃絶後に掘削された土坑である。平面形は歪な楕円形状を呈し、規模は長軸1.6m、短軸1.3



第24図 溝SD17202・17207、土坑SK17210実測図



第25図 竪穴式住居跡 S D17209 実測図

mを測る。土坑から須恵器杯身・杯蓋や土師器が出土した。出土土器は陶邑窯TK10～TK43型式に相当することから、土坑の時期は6世紀後葉と推定される。

②奈良・平安時代以降の遺構

掘立柱建物跡SB17213 (第26図) 調査区中央東寄りで一部を検出した総柱の建物跡である。東西2間(約4.8m)以上、南北2間(約4.6m)の規模をもつ。主軸はN4°Eとほぼ正方位をとり、柱間の距離は、2.1～2.3mを測る。東側の調査範囲外に桁行がさらに広がるとみられる。柱穴からの遺物は乏しく、時期を確定できる資料は得られていないが、正方位をとることや、柱穴の形状や埋土から、平安～鎌倉時代の建物跡と推定される。

掘立柱建物跡SB17216 (第26図) 調査区北東隅で検出した建物跡である。東西2間(約5.5m)、南北1間(約2.3m)の建物跡である。主軸は、N17°Wをとり、柱間は2.2～2.8mを測る。柱穴から遺物は出土していないが、SD17204に一部削平されることから、時期は平安時代前期以前の構築と推定される。

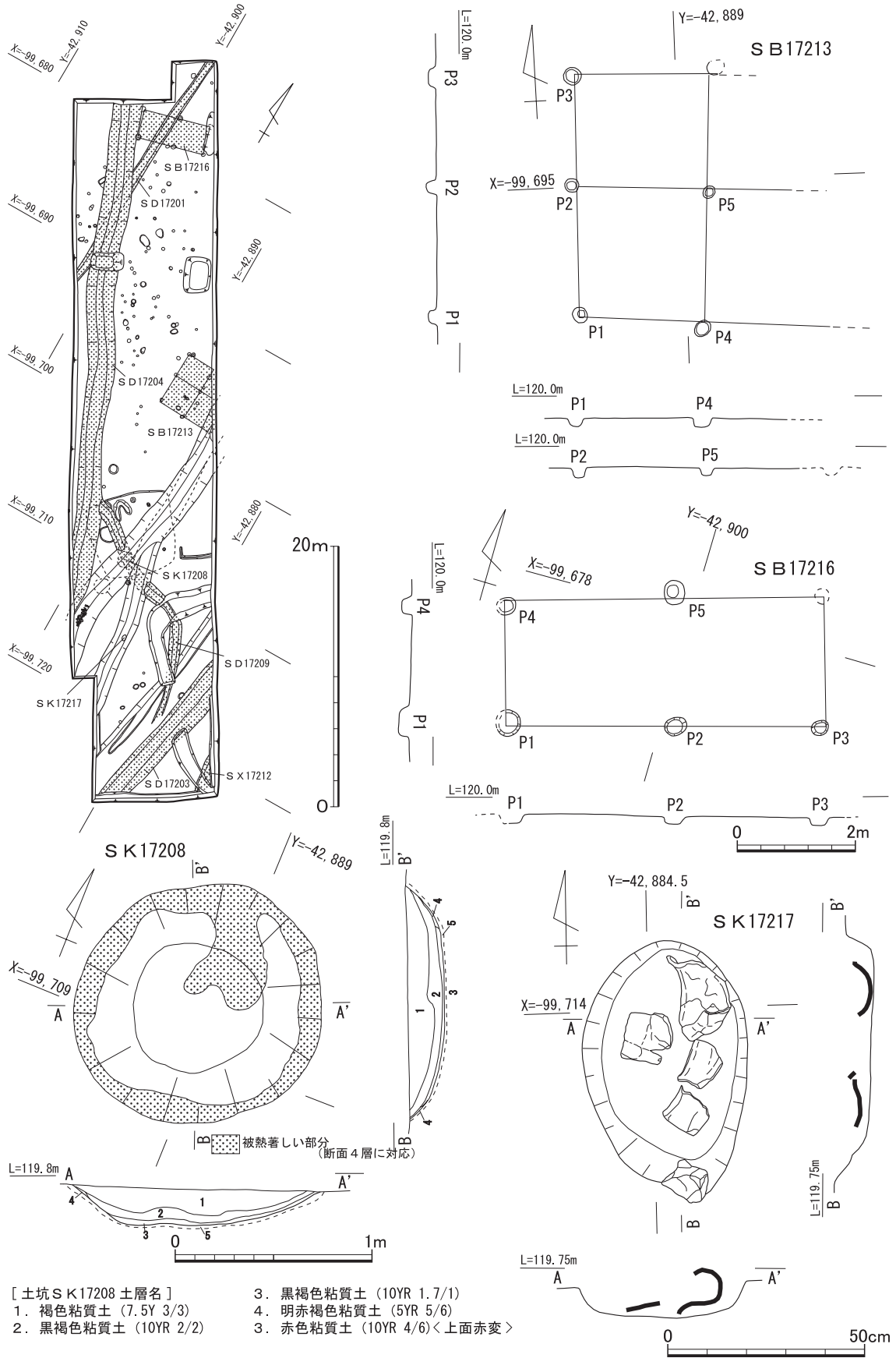
北部柱穴群(第26図) 調査区北半では、多くの柱穴を検出している。しかしながら建物として復原できるものは少ない。わずかながら遺物を出土する柱穴は、細片のため図化していないが、土師器・瓦器片があり、多くは平安時代から鎌倉時代にかけてのものとみられる。

土坑SK17208 (第26図) 調査区南部中央で検出した円形の土坑である。SD17202・SD17209、SH17205と重複して検出した。重複する遺構をいずれも削平し、最後に掘削された土坑である。規模は、直径約1.2m、検出面での深さ0.2mを測り、浅い播鉢状をなす。底部から側面にかけて、全体に被熱しているが、特に土坑内面上部が著しく被熱している。形状や被熱の状況から炉跡とみられ、炉床部分が残存したものとみられる。この土坑は耕作土の直下で検出し、上層は後世の削平を受け、上部構造は不明である。土坑内には炭化物を含む黒褐色粘質土が堆積していたが、遺物は出土していない。帰属時期は、平安時代後期～鎌倉時代前期と推定される溝SD17209の埋没後に構築されていることから、中世後期以降の炉跡と推定される。

土坑SK17217 (第26図) SD17207の中央上層で検出した小規模な楕円形の土坑である。規模は、長軸0.7m×短軸0.4m、深さ約10cmを測る。土坑内から甕1点と石材1点が出土している。出土土器から、平安時代前期の土坑と推定される。

溝SD17204 (第27図) 調査区西寄りで約40mにわたって検出した溝である。幅1.8～2.2m、深さは0.8～0.9mを測り、断面は逆台形状をなす。埋土は上層と下層に明瞭に分かれ、下層は砂礫層が堆積している。遺物は主に上層から出土し、奈良時代後期～平安時代中期の時期幅のある土器が出土した。遺物のほとんどは平安時代前期に帰属することから、奈良時代後期～末に流路として最初に掘削され、平安時代以降も再掘削され機能したものとみられる。出土土器の多くは溝南部で出土し、甕・鍋類が多く含まれることから、周辺に居住域があると考えられる。上層と下層に明瞭に分かれる埋土の状況は、後述する3地区SD17301と類似し、同一の溝である可能性が高い。

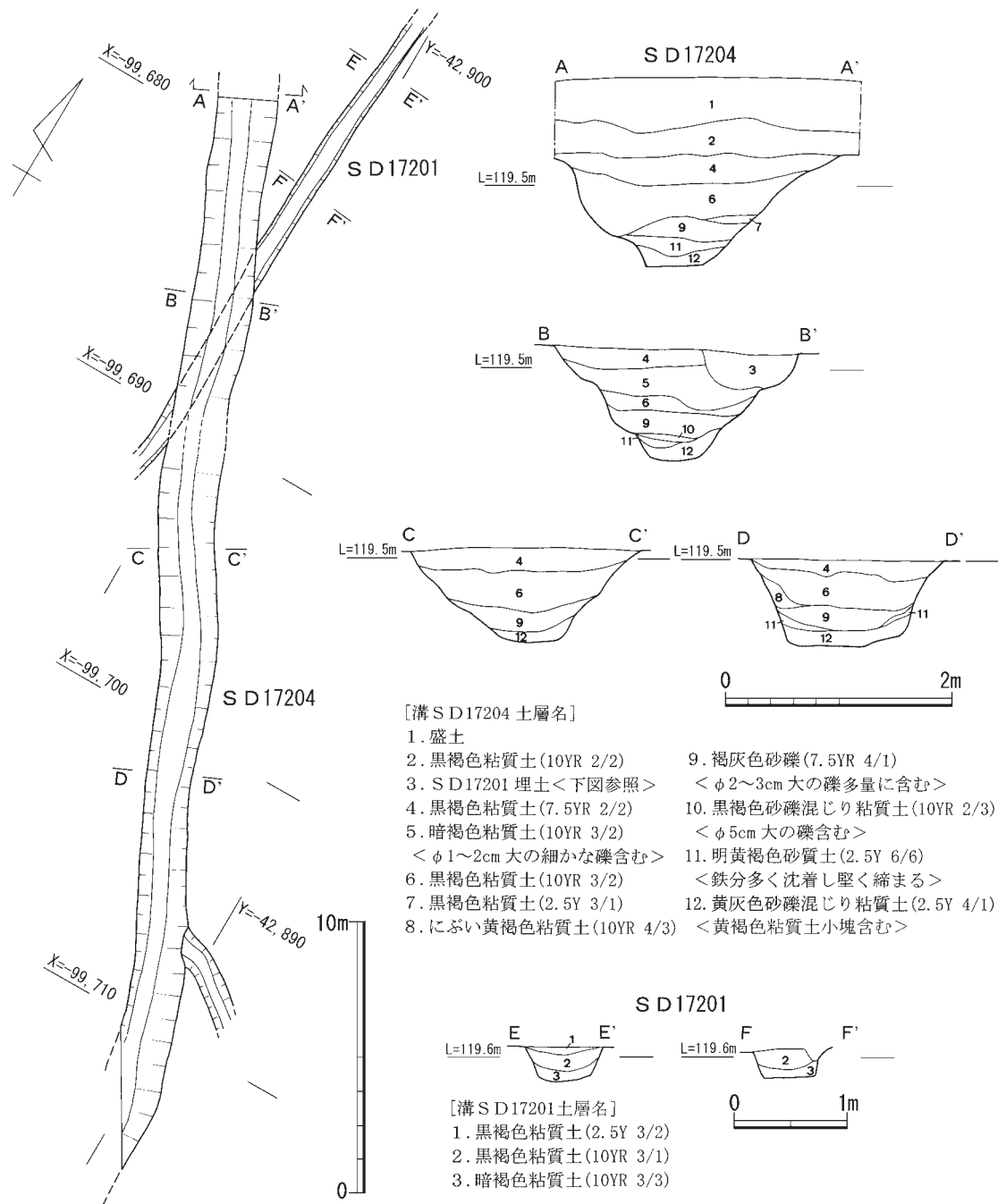
溝SD17201 (第27図) 調査区北部で検出した南北方向に直線的に掘削された溝である。規



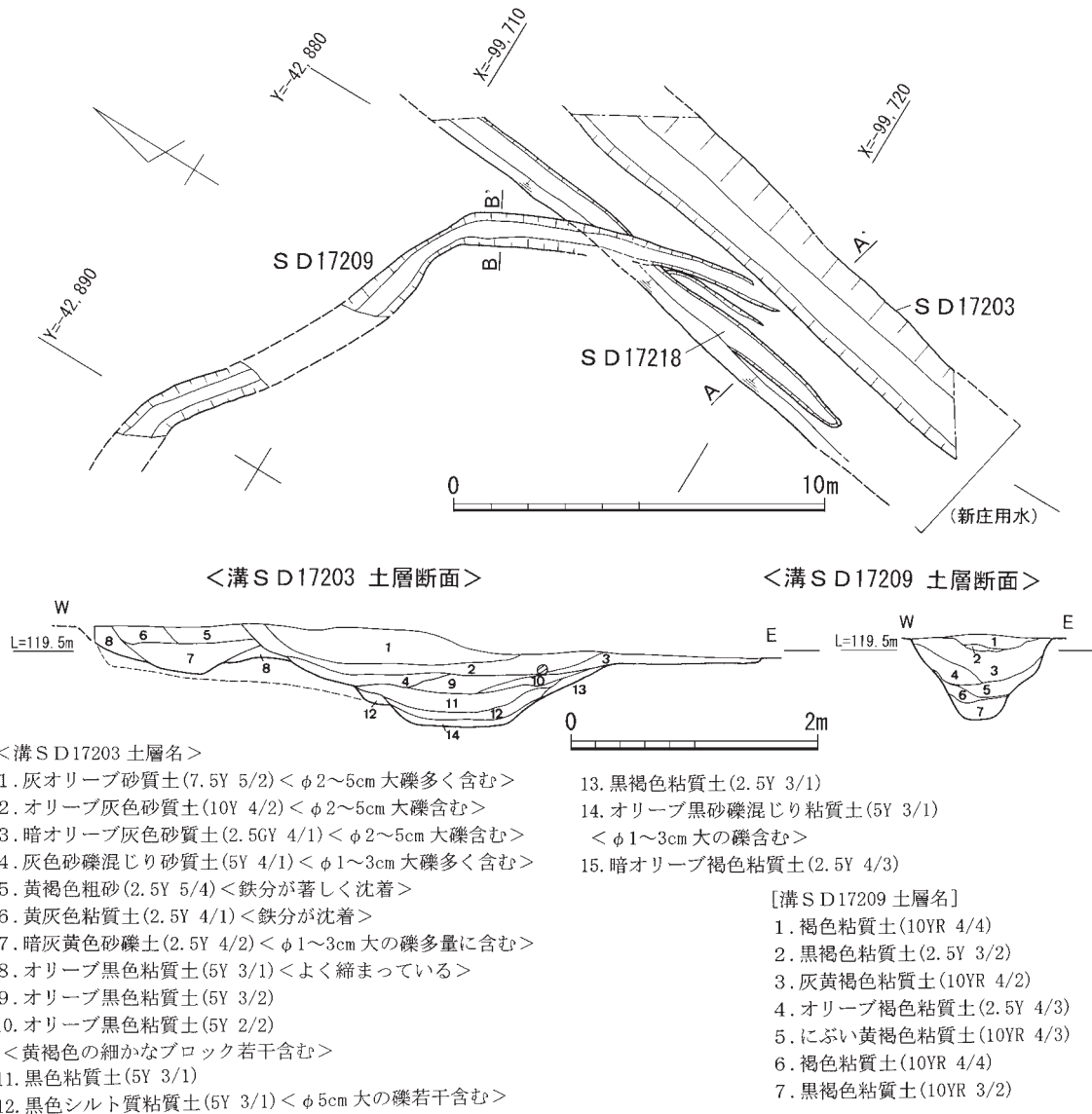
第26図 掘立柱建物跡S B17213・17216、土坑S K17208・17217実測図

模は、幅約0.7m、深さ0.3mを測り、断面は逆台形状をなす。約20mにわたって検出したもので、S D17204と一部交差する。断面観察からその埋没後に掘削された溝であることが明らかである。出土遺物から、時期は平安時代後期と推定される。

溝S D17203(第28図) 調査区南部で室橋地区の灌漑用水として活用されていた新庄用水の下層を調査し、新庄用水とほぼ主軸を一にして検出した南北方向の溝である。規模は、幅約2.1~2.5m、深さ0.4mを測り、断面は上層に向かって大きく開く逆台形状を呈する。溝上層は、幅約3mの規模の近世遺物を含む砂礫層からなる溝に大きく削平されている。溝の立ち上がり勾配などから、本来の規模は3m以上の規模をもつ溝であったと推定される。埋土は最下層から順に



第27図 溝S D17201・17204実測図



第28図 溝 S D17203・17209実測図

細かな砂礫を多く含むオリブ黒色粘質土、その上層に黒色シルト質粘質土が堆積していることより、流路として掘削され、滞水する状況もあったとみられる。出土遺物は12世紀中頃～後半頃の平安時代後期の遺物を主とするが、細片ながらやや古相を示す11世紀頃の須恵器片を含むことから、この時期にはほぼ同様な位置で再掘削され、最終的に平安時代後期に掘削された可能性が高い。

溝 S D17209 (第28図) 調査区南部で検出した北西から南東へ向けて掘削された溝である。規模は、幅約0.8~1.0mを測り、断面形は逆台形状をなす。溝の南東端で、S D17203と重複する溝である。出土遺物は S D17203と同様、11~12世紀頃の遺物と、13世紀前葉頃の遺物が出土していることから、平安時代中期～後期に掘削されたのち、鎌倉時代初期に再掘削が行われたと推定される。

落ち込み S X17212 (第21図) 調査区南東隅で検出した落ち込みである。深さ約0.3~0.5mを

測る。調査区外の南東に向かって緩やかに傾斜し、溝の肩部を検出した可能性がある。

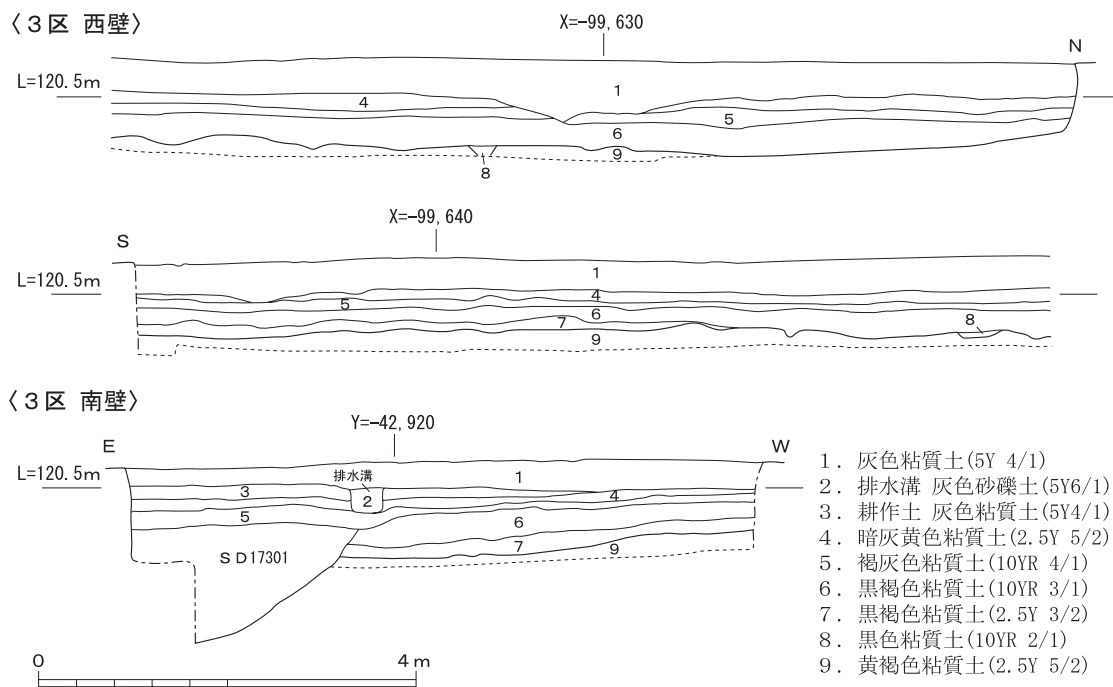
溝S D171218(第21図) 新庄用水下層で、溝S D171203と平行して検出した小規模な溝である。幅0.3m、深さ5cmを測る。染付片が出土し、江戸時代後期以降の溝と推定される。

(2)第3地区

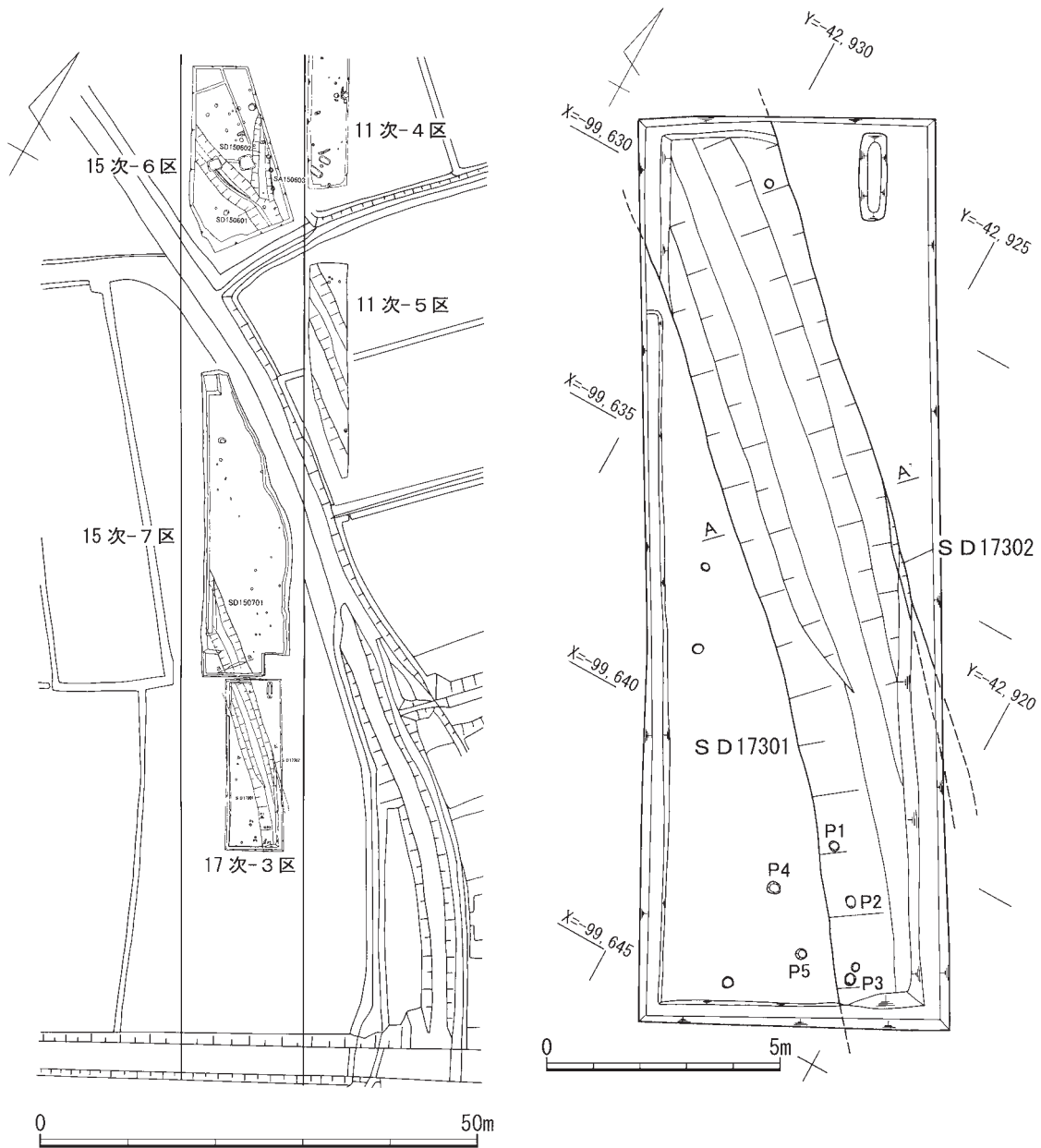
室橋遺跡のほぼ中央に位置し、第15次調査の第9地区南に設定した調査区である。調査面積は130㎡を測る。層序は、耕作土以下、上層から順に、暗灰黄色粘質土(第29図4層)、主に鎌倉時代～室町時代の遺物を包含する褐灰色粘質土(同5層)、平安時代の遺物包含層である黒褐色粘質土(同6層)、遺物をほとんど包含しない、いわゆる丹波黒ボク層の再堆積層とみられる黒褐色粘質土層(同7層)からなり、黄褐色粘質土層(同9層)を基盤層として確認できる。遺構面は、標高119.9m付近である。

調査区のほぼ中央部で溝を検出した。検出当初、1条の溝として認識していたものだが、調査の進行にしたがって、溝断面の断ち割りや出土遺物から2条の溝であることが判明した。また溝の周辺で柱穴群を検出したが、建物跡および柱列として復原できる柱穴群は確認されていない。柱穴には、土師器の細片を出土するものがあり、平安時代に帰属するものがある。

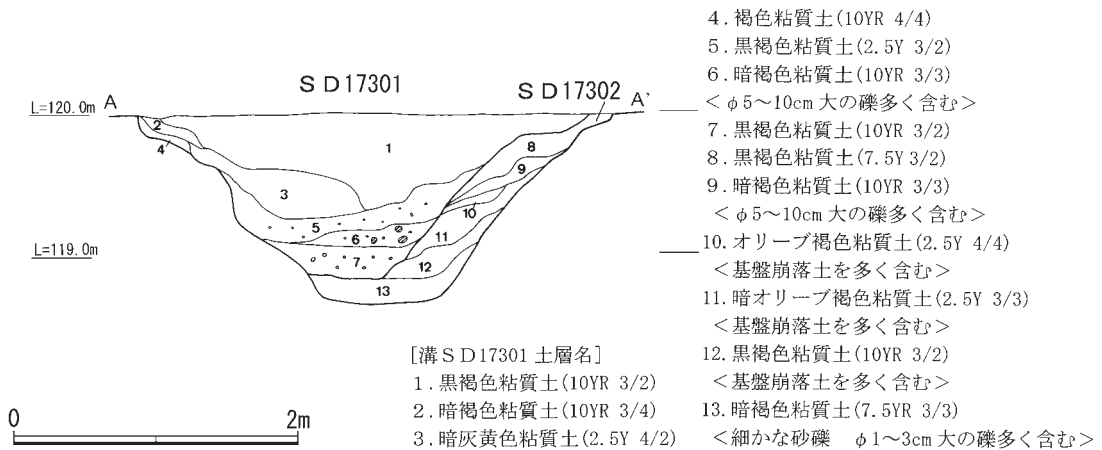
溝S D17301(第31図) 調査区中央で検出した溝で、北西から南東に向けて掘削されている。第10次調査の第9地区で検出されたS D15901の南東延長部にあたり、南に向けて徐々に西寄りに掘削される。規模は、幅約3.1m、深さ1.2mを測り、断面形は逆台形状をなす。層位は、砂礫を多量に含む下層と、砂礫の包含が極めて少ない上層に大きく分けられる。下層には、5～10cm大の中礫や、2～5cm大の小礫が層状に約0.5～0.7mの厚さで堆積し、流路として掘削されたと推定される。出土遺物は、わずかながら奈良時代後期～末に位置付けられる須恵器を含む



第29図 第3地区土層断面図



第30図 第3地区調査区配置図・遺構配置図



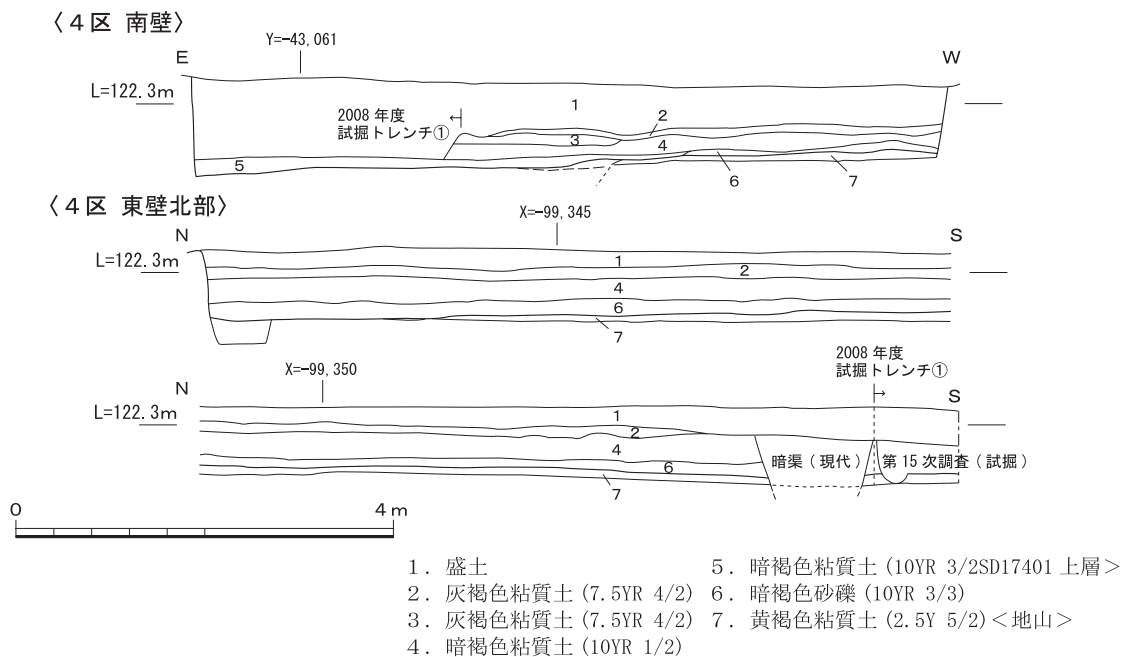
第31図 溝SD17301土層断面図

が、主に9世紀前葉の遺物を主体とし、さらに最終的な埋没に伴うとみられる若干の瓦器片が出土している。下層から出土した土器は極めて少ないが、9世紀前葉の土器を含むことから、奈良時代後期～平安時代前期にかけて機能した溝と推定される。また溝内の南西肩部で、4基の柱穴を検出し、南西平坦面でも柱穴を確認していることから、架橋に伴う支柱穴の可能性はある。なお、溝の南東延長部は、第4次調査で試掘が行われ、顕著な遺構は検出されなかったとされるが、南西部に向かって谷状に落ちる地形がみられ、溝の落ち込みを検出した可能性が高い。第2地区西側で検出したS D17204とは、埋土の状況や規模・断面形、出土遺物などが同様であり、連続する溝と推定される。

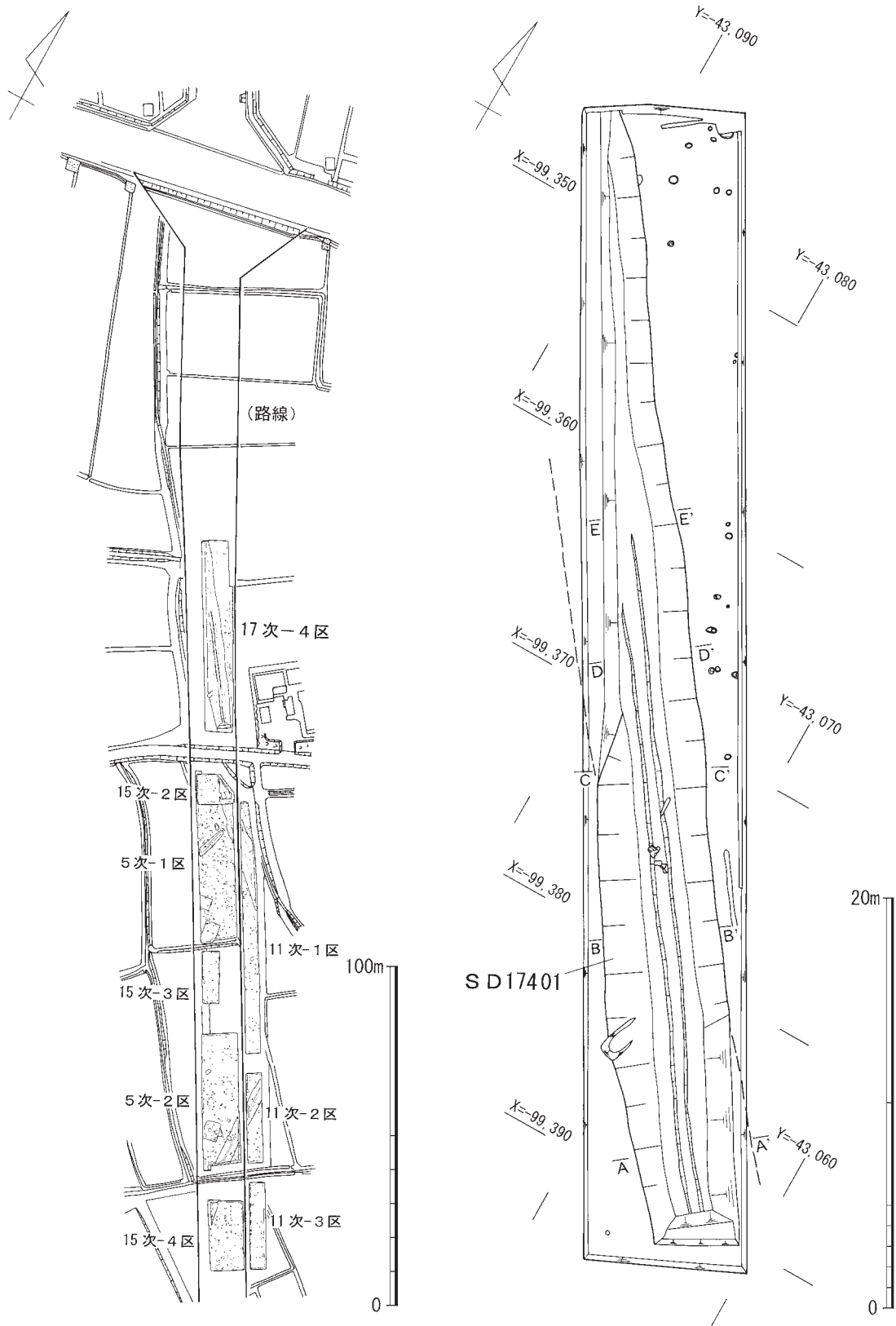
溝S D17302(第31図) S D17301下層で検出した溝である。最下層(第31図13層)には、1～3cm大の小礫が多量の土器片とともに堆積し、流路として機能した溝と推定される。この層位からは細片化した土師器が多く出土したが、歴史時代以降の遺物は含まず、いずれも古墳時代中期に帰属するものである。S D17301が調査区南部で徐々に西寄りに方向をとるのに対し、S D17302は南東に向け、直線的に掘削される。南部の第2地区S D17202と規模や断面形、時期などを同じくすることから、弧を描くように緩やかに屈曲し、S D17202に繋がる可能性が高い。

(4)第4地区

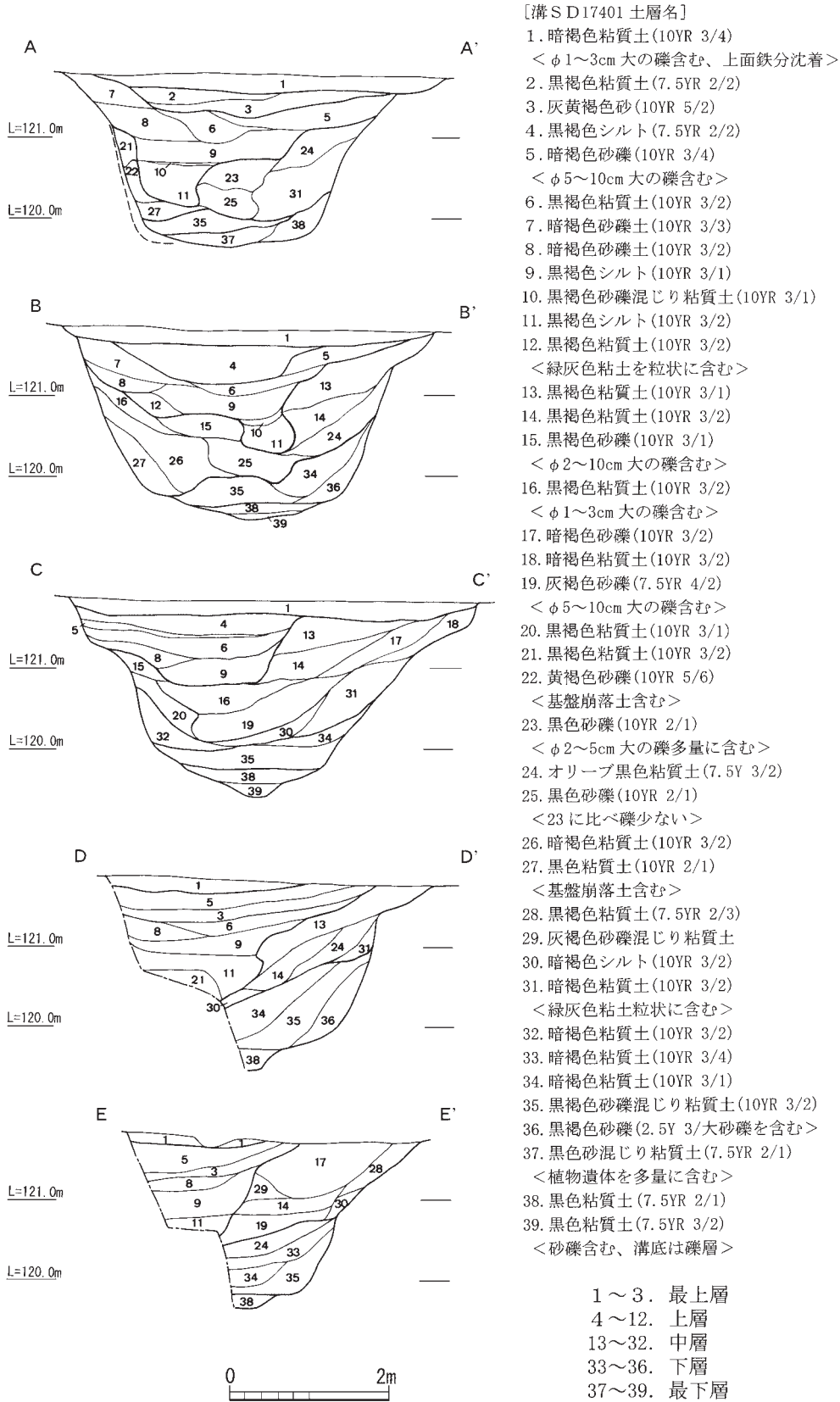
第4地区は、遺跡北端に位置し、第15次調査の試掘を受け、設定した調査区である。調査面積は440㎡を測る。検出遺構は、大規模な溝1条と柱穴群である。柱穴は、建物跡や柱列として復原できるものも確認されず、遺物は出土していないため時期は不明である。耕作土および床土下層で、瓦器片を出土する中世遺物包含層の暗褐色粘質土(第32図4層)が堆積し、その直下の標高119.8m付近で遺構面を検出した。



第32図 第4地区土層断面図



第33図 第4地区調査地配置図・遺構配置図



第34図 溝 S D 17401土層断面図

溝SD17401(第33図) 調査区中央において、北西から南東にむけて掘削された大規模な溝である。調査区内で約50m以上にわたって検出し、南東地点を調査した第11次調査のSD11101に繋がるとみられる。規模は、幅約5.0m、深さ約2.4mを測る。断面形は、逆台形状を呈するが、底面が広く掘削され、約2.0~2.5mの幅をもち、60~70°と急激な勾配の立ち上がりをなす。底面中央部は、幅約0.6m、深さ約0.15~0.2mの規模で一段深く掘削されている。溝は深度が深く、掘削作業の安全確保のため、人力掘削に加えて一部、重機を使用しながら中層まで掘削し、下層を主に人力掘削によって掘り進めた。溝の層位は、奈良時代~平安時代前期の遺物を出土する層を最上層とし、以下、大きく4層(上層・中層・下層・最下層)に分けられる(第34図)。上層から中層は、砂礫層とシルト層の互層であり滞水と堆積層の流失を繰り返していたとみられる。下層には、砂礫層が堆積したのち、黒褐色シルト・オリブ黒色シルトが厚く堆積し、この層位には植物遺体が多く含まれていた。また最下層は、砂礫を多く含む黒褐色粘質土層であり、この層からも樹木や種子など多くの植物遺体が出土した。最下層は一部土壌サンプルの花粉分析を実施し、「遺跡周辺は水田分布が示唆される」とする分析結果を得た。^(注3)出土遺物は、上層~中層、および下層上面からわずかに土器が出土している。上層遺物には、古墳時代前期の土師器の可能性のある細片が含まれ、中層から下層上面では弥生時代中期~後期とみられる土器細片が出土しているが、時期を詳細に確定できるだけの資料は得られていない。第11次調査では、この溝の南東延長地点を調査し、中層から下層上面でわずかながら弥生時代後期後半の土器片が出土したことから、溝の年代をおおよそ弥生時代後期後半~古墳時代初頭と推定した。一方、第11次調査と今回の調査において、ともに下層・最下層から出土した炭化物の加速器による放射性炭素年代測定を実施しているが、いずれも弥生時代中期の年代を得ている。^(注4)

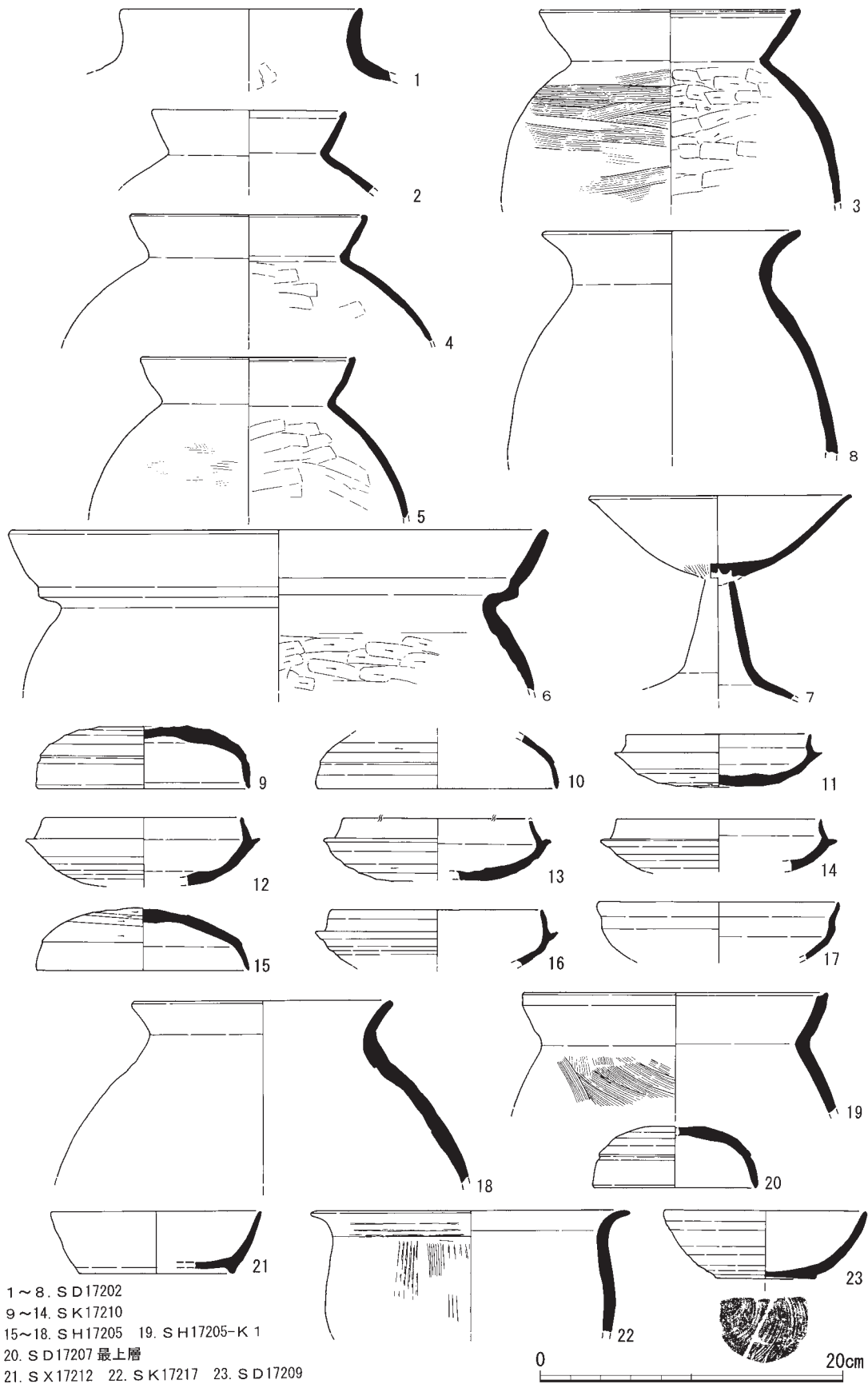
2. 出土遺物

第2~4地区から、整理箱計約25箱が出土した(第35~37図)。

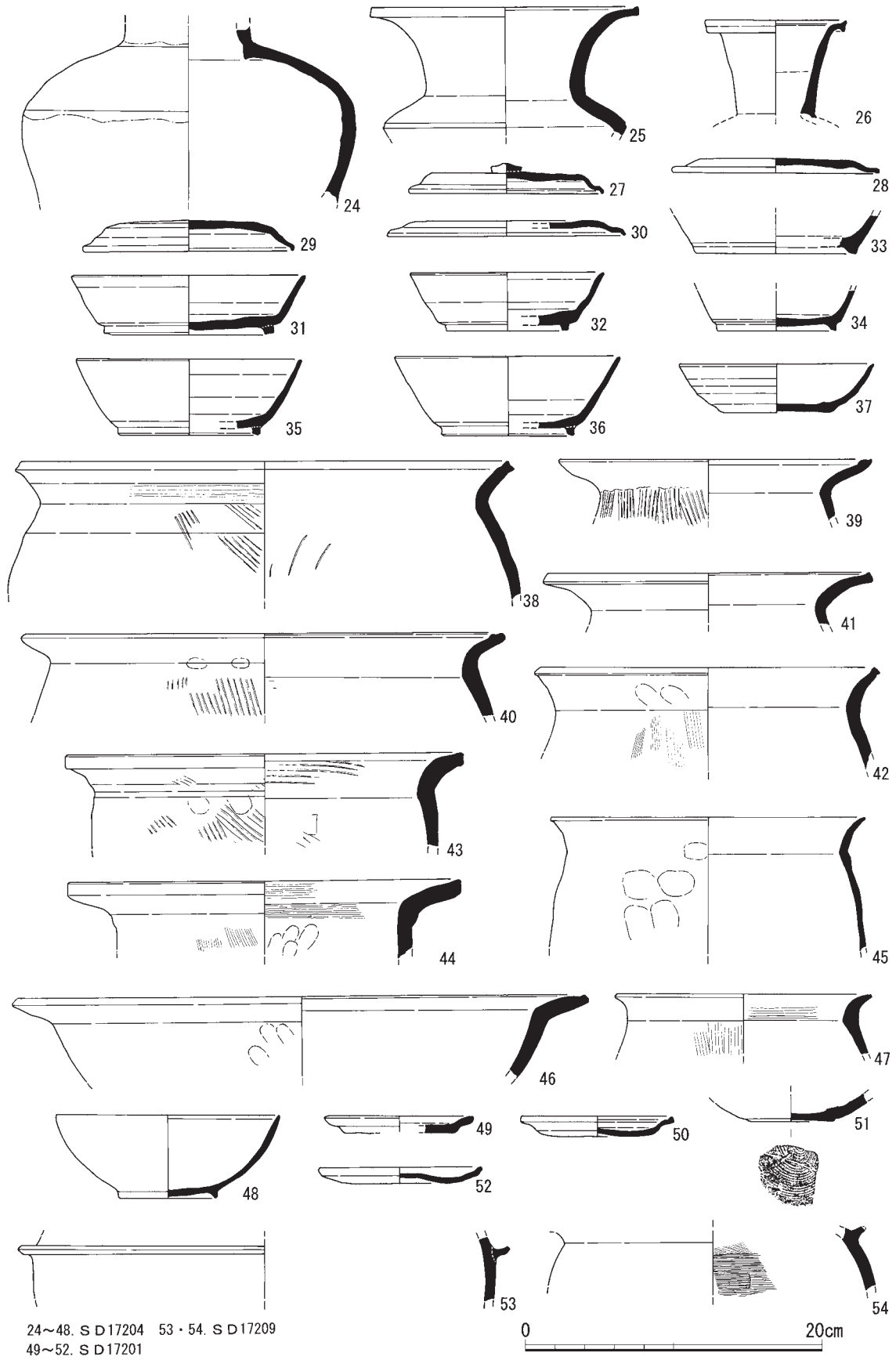
1~7は、第2地区溝SD17202から出土した土器である。1は、短頸壺口縁部で、口径16.6cmを測る。3~7は、溝南西部で一括して出土した。3~5は布留式甕である。口縁端部が肥厚するが、いずれも内傾角度が小さいことを特徴とする。6は、山陰系複合口縁甕である。7の高杯は、杯底部外面に刺穴をもつ山陰系の技法を残す。全体に布留2式新相に帰属する資料とみられる。

8~14は、土坑SK17210から出土した。9の杯蓋は口縁内面に段を残す。杯身は、底部外面に丁寧へラケズリを施し、受部立ち上がりが深い古い様相を示すもの(12・13)と、浅い新しい様相を示すもの(11・14)がある。おおよそ陶器窯TK10型式~TK43型式の特徴をもち、6世紀中葉~後葉の資料とみられる。

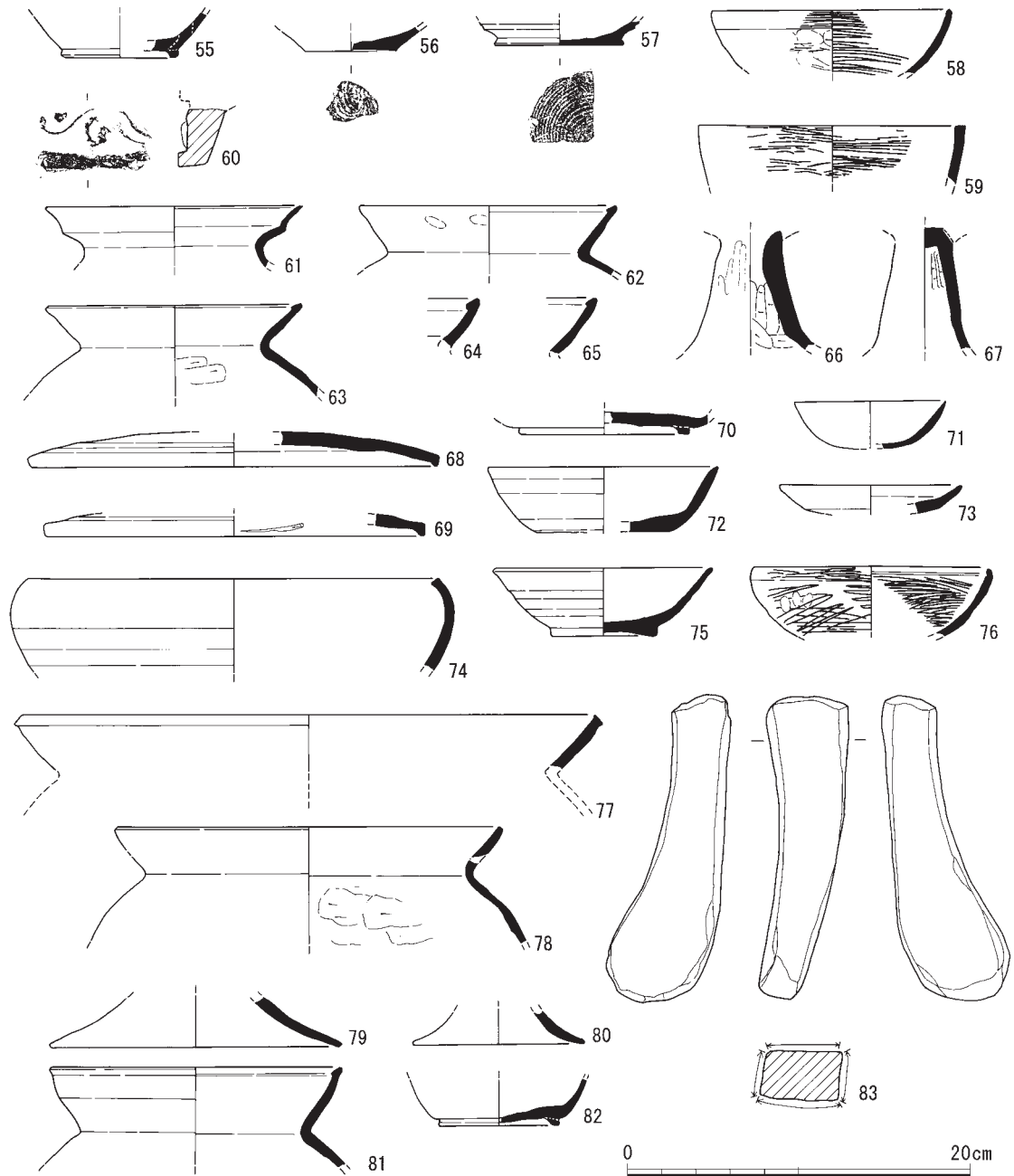
15~19は、竪穴式住居跡SH17205から出土した。15は、竈前庭部で出土した。天井部に丁寧にへラケズリを施す。16は、内面の稜を消失しているが、深い受部をなす。陶器窯TK43型式に相当する6世紀後葉の資料である。16~18は、竈の西袖部で出土した。17は土師器杯で、口縁部



第35図 出土遺物実測図(1)



第36図 出土遺物実測図(2)



55~60. S D17203 61~67. S D17302 68~76. S D17301 77・78. S D17401 79・80・82・83. S D17401 最上層 81. S D17401 上層

第37図 出土遺物実測図(3)

が緩やかに屈曲して立ち上がる。18は、竈内から出土した単口縁の甕である。

20は、2地区南部包含層から出土した須恵器杯蓋である。

21は、落ち込みS X17212から出土した。9世紀前葉の平安時代前期の資料とみられる。

22は、土坑S K17217から出土した。口縁部が緩やかに外反する土師器甕で、おおよそ平安時代前期に帰属する。

23は、溝S D17209から出土した底部糸切り痕のある杯で、12世紀頃の資料とみられる。

24~48は、溝S D17204から出土した。24は、肩部が張り、薄い灰釉がみられる。東海産の灰釉陶器壺である。25は、口縁部が大きく外反し、肩部に稜をもつ須恵器壺である。口径17.8cmを

測る。26は、9世紀前葉の須恵器小形壺である。27～30は、須恵器杯蓋で、宝珠つまみをもつもの(27)と、もたないもの(28・29)がある。31～36の須恵器杯は、いずれも高台をもつ杯Bである。器高が低く、高台を見込み側に内寄りに付すもの(31・32)と、器高が高く、高台を底部立ち上がりの外寄りに付すもの(33～36)がある。前者はおおよそ8世紀後葉～末、後者は9世紀前葉の所産とみられる。37は、須恵器杯で、おおよそ9世紀前葉に帰属する資料である。38～45・47は、土師器甕である。「く」字口縁をもつもの(38)と、口縁部が大きく屈曲し、口縁端部内面が肥厚するもの(39・40)、同じく緩やかに外反するもの(41・45・47)、さらに口縁部が外方に大きく屈曲して開くもの(43・44)があり、バリエーションがみられる。いずれも8世紀後葉～9世紀前葉の資料である。46は、復原口径38.3cmを測る鍋で、時期はおおよそ8世紀後葉とみられる。48の瓦器椀は、口径14.9cm、器高5.6cmを測る。摩耗が著しく暗文等は確認できなが、12世紀後半に帰属するものであろう。溝内から出土した平安時代後期の土器は、図化できない細片がわずかに出土しているにすぎず、ほとんどは奈良時代後期～平安時代前期に帰するものである。

49～52は、溝S D17201から出土した。49・50は、「て」字口縁およびその系譜を引く土師器の皿である。51は、底部糸切り痕を有する須恵器杯である。おおよそ12世紀前半の資料である。

53・54は、溝S D17209から出土した瓦器の羽釜で、13世紀前葉とみられる。

55～59は、溝S D17203から出土した。55は、高台付きの須恵器杯、56・57は糸切り底をなす須恵器杯である。58の瓦器椀は、内面に密に暗文がみられる。59は、内外面に細かな暗文を密に施す瓦器で、器種は鉢と推定される。60は、唐草文様をもつ近世の軒平瓦である。

61～76は、3地区から出土した。61～67は、溝S D17302から出土した。61は頸部が短く外反する山陰系の特徴をもつ二重口縁壺である。62～65は布留式甕で、66・67は高杯の脚部である。高杯は脚部径が大きく、66は弥生時代後期後半の遺物が周辺から混入したものであろう。おおよそ布留2式新相から布留3式古相を示す資料と考えられる。

68～76は、溝S D17301から出土した。70の須恵器杯は、高台をもつ杯Bで、奈良時代後半の資料とみられる。68・69はおおよそ9世紀前葉に帰属する須恵器蓋である。74は須恵器鉢で、口縁が大きく内湾する。75は、緑釉陶器の椀で、9世紀前葉のものである。口径12.6cm、器高4.0cmを測る。76は、溝内から1点のみ出土した瓦器椀である。内面に細かな圈線ヘラミガキを施し、12世紀前半の所産とみられる。

77～83は、4地区から出土した。いずれも溝S D17401から出土したものである。77は、「く」字口縁甕の細片を図化したもので、復原口径は約33cmを測る。大形の甕とみられることから、弥生時代中期～後期に帰属する資料であろう。78の「く」字口縁甕は、溝下層上面から出土したものである。内外面の摩耗が著しいが、内面ケズリにより器壁は薄く、口縁は単口縁をなす。内面ケズリ調整の「く」字口縁甕は、周辺地域では野条遺跡第7次調査の竪穴式住居出土資料にもあり、時期はおおよそ弥生時代後期後半とみておきたい。しかしながら、この土器が出土した土壌の加速器放射性炭素年代測定では、後述するように弥生時代中期の年代値が出ている。79・80は、高杯脚部である。79は椀形高杯の脚部、あるいは器台の裾部とみられる。81の布留式甕は、

検出面から約0.5m掘り下げた埋土上層で出土したものである。おおよそ布留3式に相当する土器である。82は、最上層から出土した高台付きの須恵器杯Bで、83は、各平坦面に砥面をもつ砥石である。いずれも奈良時代後期の所産とみられる。

(高野陽子)

3. まとめ

今回の調査成果とともに、調査対象となった各時代の遺構が集中する室橋遺跡北部から中央部の遺構変遷について主に述べ、まとめとしたい。

弥生時代 第15・17次調査における弥生時代の主な遺構は、遺跡北端の4地区で検出した溝SD17401をあげることができる。幅約5m、深さ2.4mに達する極めて大規模な溝で、北西から南東へほぼ直線的に掘削されている。掘削時期は、第11次調査と17次調査で出土した若干の土器から、おおよそ弥生時代後期後半と推定しているが、加速器放射性炭素年代測定では弥生時代中期に相当する測定年代を得ている。溝の性格に関しては、集落を画する溝としては規模が大きく、また埋土は砂礫層と粘質土層の互層からなり流水と滞留を繰り返していたとみられることから、基本的には灌漑用水として掘削された溝と推定される。後述するが、この地域は大堰川(桂川上流)が盆地西縁の丘陵背後に流れをとる地点にあり、古来、耕作のための水の確保に苦慮してきた地



域である。溝SD17401は調査区外に向けて、北西に直線的に掘削されているが、その延長上には、現在でも室橋から池上の農業用水が取水されている大堰川(桂川上流)とその取水堰がある^(注5)。この大規模な溝は、その延長上にある大堰川へ向けて、掘削されている可能性がある。また溝の構造で注目

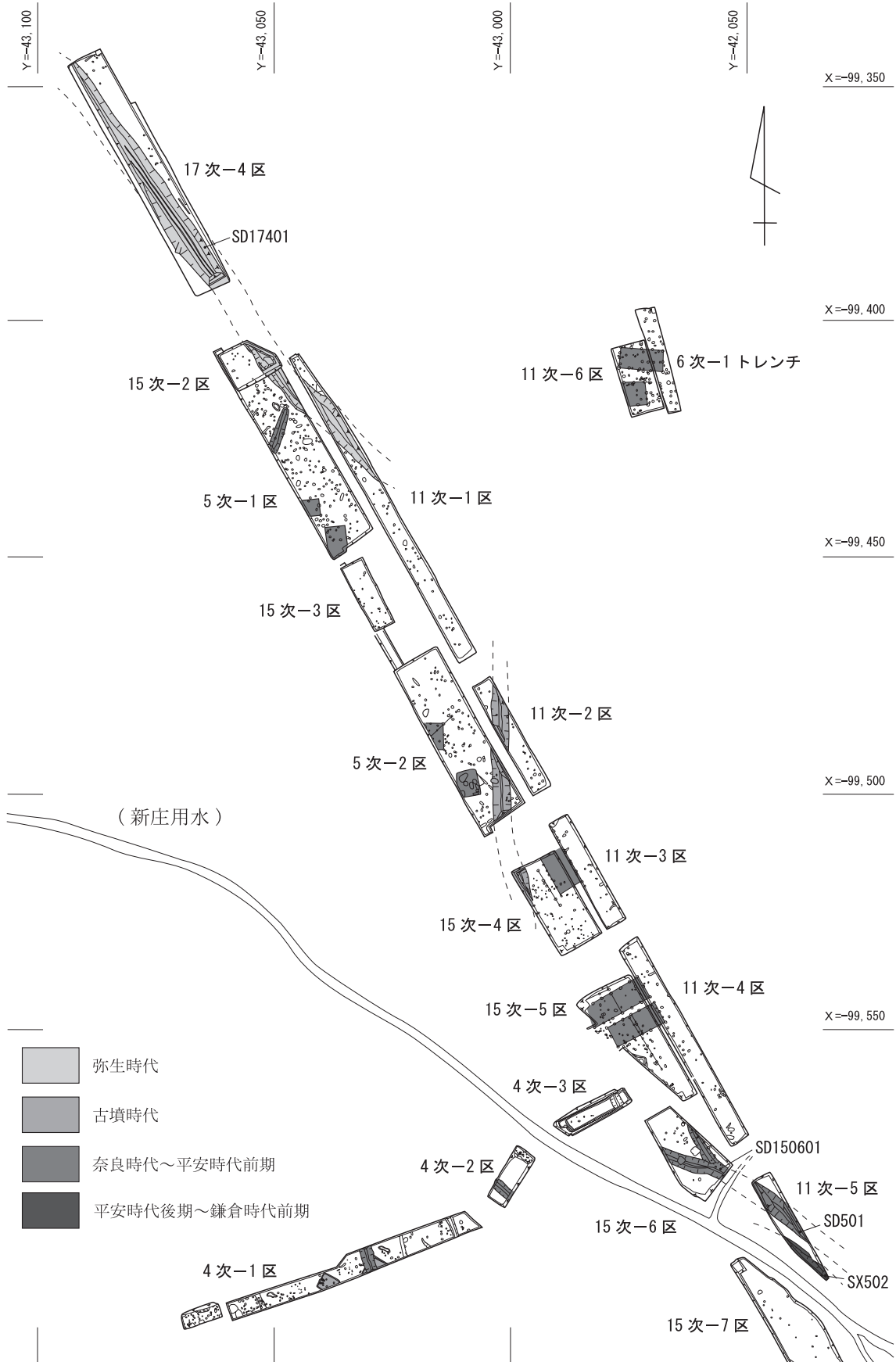
第38図 大堰川水取水堰・新庄用水配水路図(注5文献に加筆)

また溝の構造で注目

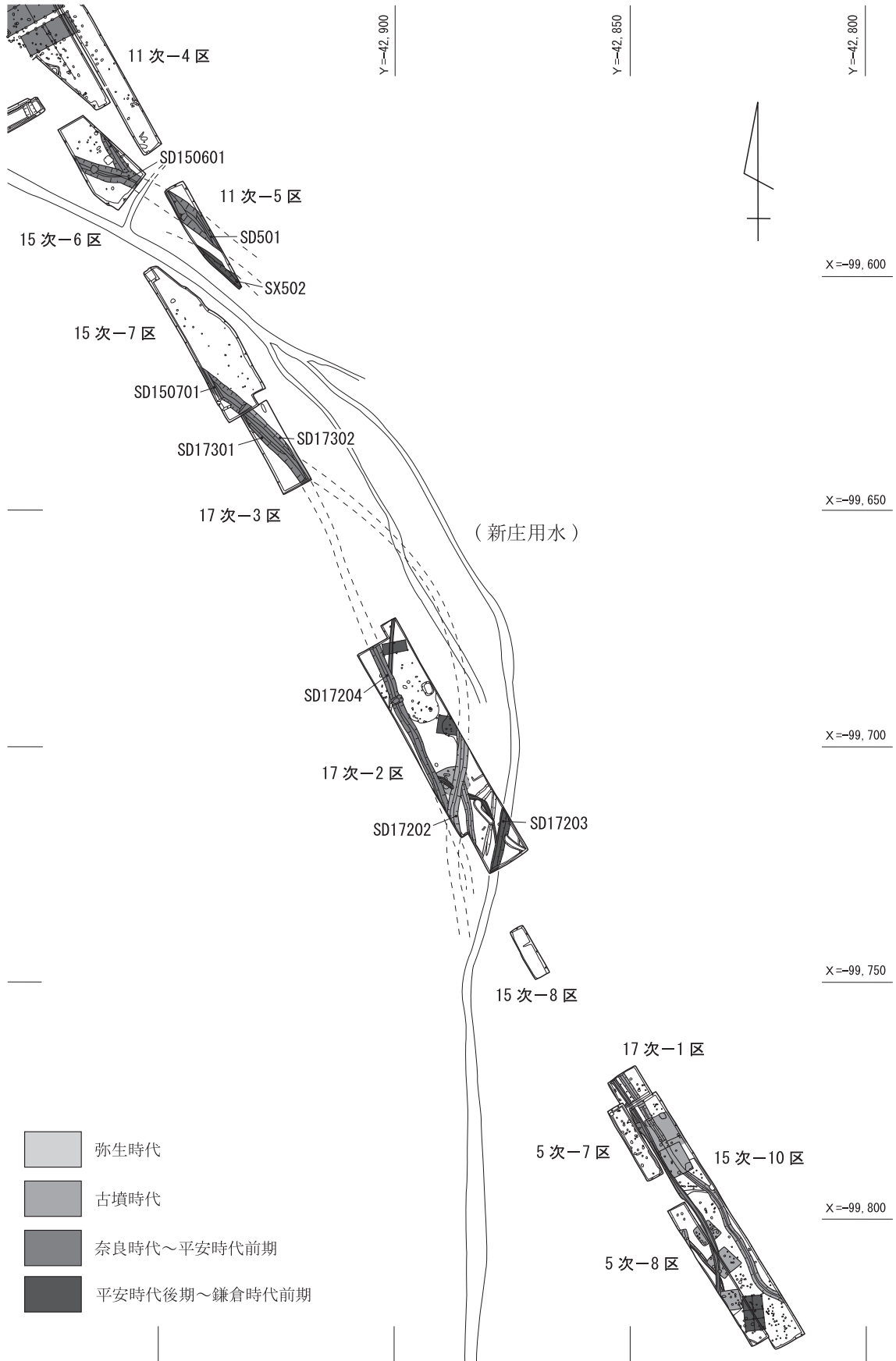
されるのは、底面が幅2m超と下層まで幅広く掘削されている点である。小舟の運行を可能にさせるだけの規模をもち、灌漑のための導水路としての機能にとどまらない可能性がある。溝からの出土遺物は極めて少なく、これまでの調査では、歴史時代の遺物は最上層から出土するに限られ、上層で布留式甕の小片が出土し、中層～下層上面では、弥生時代後期後半と推定されるわずかな遺物の出土が確認された。さらに下層および最下層からの土器の出土は皆無である。前述したように、これらの層位の土壌および炭化物の放射性炭素年代は2か年にわたって実施した4点のサンプルがいずれも弥生時代中期中葉頃の測定値を示すが、出土土器からみると、その可能性があるものが本報告の弥生時代中期の口縁部細片をみるにとどまり、溝の掘削年代の把握を困難にしている。弥生時代の集落は、後期の集落に関しては、後期後半の住居跡が東に位置する大谷口遺跡の調査などから、諸木山裾部に点在し、また野条遺跡南部でも幾つかの住居跡が検出されているが、母体となりうる大規模な集落は確認されていない。一方、弥生時代中期の集落は、室橋遺跡でも遺跡中央部で円形住居や溝が検出されているが規模は小さく、南方約1kmに展開する池上遺跡がこの地域の拠点的な集落となっている。放射性炭素年代の測定値を溝の掘削年代にそのまま当てはめたとすれば、弥生時代中期中葉にはじまる池上遺跡の集落形成にかかわる溝の可能性も出てくる。いずれにせよ、弥生時代の溝としては、近畿地方でも稀にみる大規模な人工水路であり、今後、周辺部の調査の進展によってさらに溝の性格や時期が解明されることを願いたい。

古墳時代 室橋遺跡は、古墳時代前期末～中期前葉に、導入期の竈や初期須恵器をもつ新興の勢力によって新たに開発されたと考えられる。古墳時代の遺構は、大きく前期末～中期の遺構群と、後期の遺構群に分かれており、前者は遺跡北部を中心に展開し、やや離れて遺跡南部にも居住域が広がることが判明している(第11次調査)。また後期の集落は、遺跡南部を中心とし、第5・7次調査や第15次調査で多くの竪穴式住居群が検出されている。今回報告した第17次調査の溝SD17402は、幅約3mの断面「V」字形の溝であるが、約200m北で検出した第5次調査の溝SD230と規模や断面形が酷似し、同一の溝である可能性が高い。出土土器から溝SD17402は、前期末に掘削されていることが明らかで、古墳時代中期に大きく展開する集落の初期の段階に掘削された溝と推定される。中期前半の住居跡は、第4次調査や第13次調査立会で遺跡中央から西部にかけて検出されていることから、溝SD17402や第5次調査の溝SD230は集落の東側縁辺部に掘削された区画溝と考えられる。

歴史時代 今回の調査では、遺跡中央部を対象とした第15次調査で、方形掘形をもつ大形掘立柱建物跡3棟を検出した。方形掘形をもつ掘立柱建物跡は、これまでに遺跡北東部を対象とした調査と(第6・11次調査)、西部を対象とした調査(第13次調査)でも確認されているが、建物の規模はさらに大きなものである。今回検出した地点から、第6・11次調査地点へさらに同時期の建物跡が広がる可能性がある。周辺の溝からは墨書土器が出土し、柱穴の出土土器から、奈良時代後期～平安時代初頭と推定される。これらの建物跡は主軸を合わせた規格性の高い建物群で、公的な施設である可能性が高い。



第39図 調査地北部遺構変遷図



第40図 調査地南部遺構変遷図



第41図 室橋遺跡調査区配置図

これまでの調査で検出された奈良時代以降の遺構の多くは大小の溝である。規模の大きな溝は、砂礫層の堆積が顕著で、灌漑用水とみられるものが多く、農業用水の確保に苦慮し、灌漑用水路の掘削が繰り返し行われたことが伺える。用水整備の時期は大きく3時期あり、大形掘立柱建物跡が建設される8世紀後半～9世紀前葉、平安時代後期の11世紀後半～12世紀前葉、さらに平安時代末の12世紀後半である。灌漑用水路網の開削は、すなわち耕地整備を意味する。各時期における用水路の開削と耕地整備の背景について述べ、まとめとしたい。

歴史時代における最初の灌漑用水の掘削時期は、大形掘立柱建物跡が検出される8世紀後半～9世紀前葉である。第11次調査の溝S D 11501と第15次調査の溝S D 150601、第15次調査の溝S D 150701と第17次調査の溝S D 17301は連続する溝で、いずれもこの時期である。また、やや離れるが第17次調査の溝S D 17204も、断面形や埋土から溝S D 17301から続く溝とみられる。この時期の大規模な開発は、国衙との関係が無視できないが、諸説ある丹波国府の所在地については、近年、発掘調査の成果から、当初から南丹市八木町屋賀から亀岡市池尻周辺に位置した可能性が高まっている^(注6)、その場合、室橋地区を含む刑部郷は、国衙の北部隣接地域となり、耕地管理が特に厳しく行われた地域でとみることができる。8世紀後半～9世紀前半の溝は、遺跡南西部を対象とした第14次調査でも新庄用水の東側で確認され^(注7)、広範囲に灌漑用水の開削が行われていることが明らかであり、国衙の主導による耕地開発が行われたと推定される。

9世紀以降、律令国家的な土地所有が変質してゆくなかで、室橋遺跡においても、9世紀後半～11世紀前葉まで、新たに開削される大規模な溝は確認できず、一元的な耕地管理が崩れ、灌漑用水網も荒廃したと考えられる。この地域で次に再び灌漑用水網が大規模に新たに開削されるのは、過去の調査成果から11世紀後半頃と推定され、その対象は、室橋地区から野条、池上地区を含む広範囲に及ぶものと考えられる。室橋遺跡第11次調査の溝S D 11707、野条遺跡第10・12次調査の溝S D 201、池上遺跡との境界域に近い野条遺跡第9次調査の溝S D 101などは、いずれも溝の規模、断面形、堆積状況などが一致し、最下層が砂礫層であることから、同時期に掘削された流路と推定される。最も北の室橋遺跡第11次調査の溝S D 11705の検出地点から、南の野条遺跡第9次調査で検出した溝S D 101まで、距離にして約1 km離れ、大規模な灌漑用水の整備が行われたと推定される。これらの溝は、第11次調査の溝S D 11705の出土遺物から、12世紀前半頃にその機能を終えたとみられる。11世紀後半以降の社会体制は「荘園公領制」と呼ばれ、11世紀中頃は、荘園政策の大きな転換点とされる時期である。そのきっかけは、長久元(1040)年の荘園整理令とされ、国衙はそれに基づき、荘園および公領の境界を確定し、田地面積やその管理者を確認して賦課単位を明らかにする検注作業を実施し、「郡郷制」とされる国衙領の再編成が行われた^(注9)。室橋遺跡および野条遺跡にみる11世紀後半の大規模な灌漑用水の整備は、こうした国衙領の再編成と荘園政策の大きな転換に連動し、公領であったとみられる刑部郷内では、受領・在庁官人による新たな耕地整備が行われたのではないだろうか。

灌漑用水路が新たに開削される次の段階は、12世紀後半である。今回の調査では、発掘調査が実施されるまで農業用水として用いられていた新庄用水の下層で、灌漑用水とみられる平安時代

の溝 S D17203を検出した。埋土に12世紀中頃～後葉の土器片を含むことから、平安時代末期に掘削された溝と推定される。また、第11次調査でも新庄用水西側隣接地の調査で、用水側に向けて落ち込む溝の肩部とみられる S X502を検出し、12世紀後半の灌漑用水が、近年まで使用されていた新庄用水とおおよそ近いラインで掘削されていることが明らかになった。12世紀後半は、室橋地区を含む刑部郷の所有が目まぐるしく変わる時期である。以下、吉富庄の変遷について付記しておきたい。

吉富庄は、1087年に知行国主藤原頼親により立荘された現在の京北町を中心とした宇津庄と呼ばれる莊園を母体に、12世紀後半に成立したものとされる。この宇津庄は、11世紀に源義家に寄進されたと伝えられ、12世紀前半には源義朝の私領となるが、12世紀中頃に平治の乱で平家に没収されたのち、宇都庄として、平家と縁戚関係にあった藤原成親が伝領する。知行国主藤原成親は、新たにこれに神吉・八代・熊田・志麻、それまで公領であったとみられる刑部郷の五郷を加え吉富庄とし、12世紀後半、承安4(1174)年に後白河法皇御願の法華堂に寄進した。^(註11) 新たに加えられた五郷は吉富新庄と呼ばれるが、これはほぼ現八木町の全域を含み、刑部郷に属する室橋地区もこれに含まれる。吉富庄は寿永3(1184)年には、莊園を元々所有していた源氏に帰し、源頼朝の所領となる。頼朝が神護寺の僧文覚と親交があったことから、吉富庄は高尾神護寺に寄進されたが、さらに文覚は後白河院領であった刑部郷を含む吉富新庄の寄進を願い出て、同年、吉富庄一円が神護寺領として認められたという。

文覚は、12世紀後半に各地の開発伝承にみえる神護寺の僧で、室橋地区には、「文覚池」や、文覚の見水場とされる「室橋堂(通り堂)」など、僧文覚に由来した地名や伝承を今に伝え、この地の灌漑用水を造り、耕地開発にも大きく関わったとされる。今回、検出した平安時代末期の新庄用水下層の溝 S D17301や11次調査の S X502から、平安時代末期の灌漑用水と推定される溝が現在の新庄用水の流路と大きく重なっていることが明らかになり、こうした伝承を改めて想起させるものとなった。新庄用水は、船枝・室橋・諸畑・野条・池上の田地用水であり、「新庄堰水」がそのはじまりであるという。「新庄堰水」の開削については、室橋地区の如城寺蔵「室橋縁由」には「治承元(1177)年五月新庄堰水之工成り」と記される一方、船井郡誌では文治4(1188)年の開削とされ、約10年の開きがある。この間、刑部郷の所有は前述したように短い期間で変遷しており、前者であれば、神護寺に寄進される以前に「新庄堰水」は掘削されていたことになる。溝 S D17203からの出土遺物はわずかであり、その時期はおおよそ12世紀中頃～後葉の幅で捉えられるものである。溝 S D17203の開削時期は神護寺領となる時期よりもやや早く、後白河法皇領として寄進される前後であった可能性が高い。いずれにせよ、12世紀後葉の新たな灌漑用水の掘削時期は、野条遺跡第10・12次調査で検出した条里型地割に沿う規格制の高い掘立柱建物群が構築される時期とおおよそ一致し、条里施行とも関連した大規模な耕地整備に伴う灌漑用水の掘削が行われたと推定される。一方、溝 S D17203の周辺に流れ込む小溝である S D17209からは、13世紀前葉の土器片が出土していることから、この段階まで溝 S D17203は存続している可能性が高く、用水の管理が引き続き行われていたと考えられる。文覚伝承は、未だその開削時期が不明

な「文覚池」などと合わせ検証する必要があるが、平安時代後期～末期の大規模な灌漑用水網の建設や段階的に行われた改修を象徴する伝承としてこの地に長く伝えられたものであろう。

平成17年度以降、継続的には場整備と府道建設に伴う発掘調査を行い、弥生時代～近世に至る各時代の遺構を検出した。特に灌漑のための溝を中心とした遺構は、室橋遺跡だけでなく、野条遺跡にも広がり、古代～中世の耕地開発に関わる多くの資料を得ることができた。発掘調査によって得られたこうした成果が、今後、この地域の歴史を考える貴重な資料として大いに活用されることを願って止まない。

(高野陽子)

注1 調査参加者は以下のとおりである(敬称略、順不同)

(作業員) 西垣久江・梅井ゆき子・広瀬伊佐夫・杉山雅之・松本敏子・松本孝子・松本安治・川勝千代・笠波恒正・若井邦明・明田弘之・麻田忠晴・宅間文治・柚田晋・福本正吉・八木辰男・麻田節子・松井和美・松本拓・三觜順子・平井美登里・木村末子・西山尚史・国府京子・西田恵美子・矢木正代・竹井美津子・中川智子・木村あき子・中川実・中川照子・服部良彦・山本雅彦・小林義明

(補助員) 中川慎也・廣瀬慶典・松元和也・野中洋志・井川怜・丹上新太

(整理員) 丸谷はま子・中島恵美子・松下道子・荒川仁佳子・茶園矢壽子・清水友佳子・村岡弥生・福島厚子・田村佳恵・大村潤子・槻啓宏

注2 福島孝行「府営農業整備事業関係遺跡 平成18年度発掘調査報告」(『京都府埋蔵文化財調査報告書』(平成18年度)-2 京都府教育委員会) 2007

注3 最下層および下層から出土した炭化物については、加速器による放射性炭素年代測定を実施した。測定は、(株)加速器分析研究所に委託した。資料サンプルの14C年代は、下層上面が 2310 ± 30 yrBP、黒褐色粘質土上層が 2240 ± 30 yrBP、最下層が 2240 ± 30 yrBPである。おおよそ弥生時代中期中葉頃の年代測定値となっている。

注4 花粉分析は、(株)古環境研究所に委託し、遺跡周辺の植生について、以下の報告を受けた。

花粉群集は樹木が多く、照葉樹のコナラ属アカガシ亜属と落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属が優占し、他に照葉樹ではシイ属、落葉広葉樹ではトチノキ、カバノキ属が伴われ、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科の針葉樹も比較的出現率が高い。周辺は森林の多い環境であり、低地にコナラ属アカガシ亜属を主にシイ属の照葉樹林が分布し、周辺山地の中高所にコナラ属コナラ亜属を主にカバノキ属の落葉広葉樹林が分布し、谷沿いにトチノキが分布していた。

遺跡周辺は、草本花粉でイネ属型を含むイネ科、ヨモギ属が、水田雑草の性格をもつオモダカ属、ミズアオイ属の水生植物を伴って出現し、水田の分布が示唆される。イネ科は水田雑草としてだけでなく、ヨモギ属とともに溝の周囲や畦などのやや乾燥したところに耕地雑草および人里植物として分布していたと推定される。

注5 八木町教育委員会編『神護寺領丹波国吉富荘故地調査報告書』(『八木町史編さん事業歴史資料調査報告書』第2集) 2009

注6 丹波国府推定地については諸説あるが、「丹波国吉富庄絵図」にみる「国八庁」と記された国庁の記載から、南丹市八木町屋賀から亀岡市馬路町池尻付近に求める屋賀説が有力だが、歴史地理学的検討から、木下良氏は千代川町拝田に国府があったと推定し、平安時代末期に移転したとする。上島

亨氏は、僧皇慶と池上寺の関係から国府の仏事を担う僧として迎えられたのではないかとし、11世紀前半には少なくとも丹波国府は屋賀周辺にあったとし、国府移転説そのものが文献的な根拠が乏しいとして否定的である。近年の発掘成果では、池尻遺跡で奈良時代後期の大形掘立柱建物群が検出される一方、千代川遺跡では国庁に付随するような大規模な建物跡は確認されておらず、考古学的知見からも国府が当初から屋賀にあった可能性が高まっている。

木下良「丹波国府址一亀岡市千代川に想定する一」(『古代文化』第16巻 第2号) 1966

上島 亨「池上院と神護寺・丹波国府－新資料の紹介と皇慶の活動をめぐって－」(『郷土史八木』第10号) 2000

注7 福島孝行「府営農業整備事業関係遺跡 平成19年度発掘調査報告」(『京都府埋蔵文化財調査報告書』(平成19年度) 京都府教育委員会) 2008

注8 網野善彦「荘園公領制の形成過程」(『日本中世土地制度史の研究』 塙書房) 1991

下向井龍彦「激動の院政」(『武士の成長と院政』 講談社) 2001

注9 川端 新「院政初期の立荘形態」(『日本史研究』407号) 1996

注10 院政期の荘園の立庄では、特に王家領などは寄進された私領を核にし、周辺の国衙領などの公領を取り込んで荘園形成がなされたのではないかとされる(坂本賞三「免除領田制」『日本王朝国家体制論』東京大学出版会 1972)。室橋遺跡東方約2kmに「水所」という地名が残るが、この一帯は平安時代末期の丹波国府推定地の南丹市八木町屋賀に近く、「水所寄人住所」と吉富庄絵図にもみえ、国衙領と考えられている。上島亨氏は近辺の寺院として創建された池上寺とともに、国衙領であった刑部郷一帯が、立庄に際して後白河院領として取り込まれたとする(上島前掲注6文献)。

注11 現存する荘園絵図として知られる京北町宇津の真継家所蔵の「丹波国吉富庄絵図写」は、このとき作成されたものとされる。

仲村 研「丹波国吉富庄の古絵図について」(『史朋』2号) 1963

飯沼賢司「丹波国吉富荘と絵図」(『民衆史研究』30号) 1986

参考文献

田代 弘「野条遺跡第11次・室橋遺跡第4次」(『京都府遺跡調査概報』第122冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007

高野陽子「野条遺跡第10・12次、室橋遺跡第5次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第128冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008

辻本和美・高野陽子・中居和志「府営経営体育成基盤整備事業『川東地区』」関係遺跡平成19年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第130冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008

辻健二郎「第19年度の調査」(『南丹市内遺跡発掘調査報告書』第7集 南丹市教育委員会) 2008

『京都府の地名』平凡社 1981

圖 版



(1) 第15次調査地遠景(上が南)



(2) 第15次調査地遠景(上が北)



(1) 第15次第1・2地区(南から)



(2) 第15次第4～7地区(南から)



(1) 第15次第1地区(南から)



(2) 第15次第2地区(南から)



(3) 第15次第2地区溝 S D150201
断面(南から)



(1) 第15次第4地区(上が東)



(2) 第15次第4地区全景(北から)



(1) 第15次第3地区全景(南から)



(2) 第15次第4地区柵S A150402
(南から)



(3) 第15次第4地区柵S A150402
柱穴P 1内柱根(南から)



(1) 第15次第4～6地区遠景(上が東)



(2) 第15次第5・6地区(上が東)



(1) 第15次第5地区掘立柱建物跡群、柵列(上が東)



(2) 第15次第5地区掘立柱建物跡 S B 150501・150502・150504 (上が東)



(1) 第15次第6地区(上が東)



(2) 第15次第6地区全景(南から)



(1) 第15次北部調査地遠景(上が南)



(2) 第15次第7地区(上が西)



(1) 第15次第5地区掘立柱建物跡
S B 150501・1505012
(北から)



(2) 第15次第6地区溝 S D 150601・
150602(南から)



(3) 第15次第7地区溝 S D 150701
(北から)



(1) 第15次第10地区調査地遠景(西から)



(2) 第15次第10地区全景(北から)



(1) 第15次第10地区調査地中央部(上が東)



(2) 第15次第10地区調査地北半部(上が西)



(1) 第15次第10地区竪穴式住居跡群
(北から)



(2) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151003(北から)



(3) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151003竈(西から)



(1) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151002(北から)



(2) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151002(南から)



(3) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151004 ~ 151006 (北から)



(1) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151004・151005 (北から)



(2) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151004・151005 (南から)



(3) 第15次第10地区竪穴式住居跡
S H151006竈内高杯出土状況
(西から)



(1) 第15次第10地区溝 S D151001・
151007 (北から)

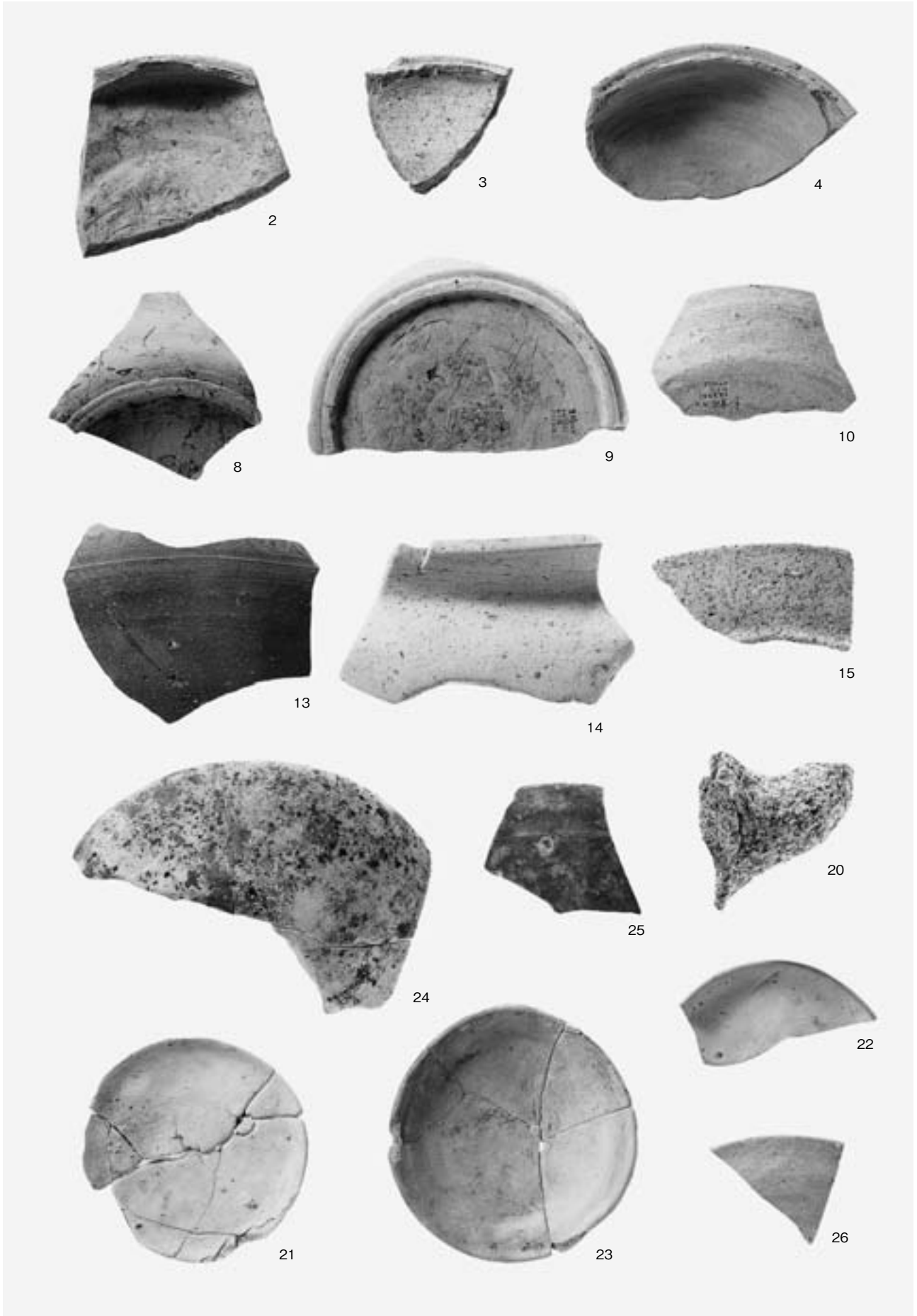


(2) 第15次第10地区溝 S D151007
断面(南から)



(3) 第15次第9地区全景 (南から)







(1) 第17次調査地遠景(南東から)



(2) 第17次調査地近景(北西から)



(1) 第17次調査地北部近景<手前に新庄用水、丘陵背後に文覚池> (東から)



(2) 第17次調査南部調査区全景(上が北東)



(1) 第17次調査第1地区全景(上が北東)



(2) 第17次調査第3地区全景(上が南西)



(1) 第17次調査第2地区全景(上が南西)



(2) 第17次調査第2地区南部全景(上が南西)



(1) 第17次調査北部調査区全景<正面丘陵の基部に大堰川> (南東から)



(2) 第17次調査第4地区全景(上が南西)



(1) 南部調査区調査前全景
(南東から)



(2) 第17次 1区全景(南東から)



(3) 第17次 1区全景(北西から)



(1) 第17次第2地区全景(南東から)



(2) 第17次第2地区溝S D17203(南から)



(1) 第17次第2地区竪穴式住居跡
S H17205(南東から)



(2) 第17次第2地区竪穴式住居跡
S H17205竈(南東から)



(3) 第17次第2地区溝 S D17202・
17207(南から)

(1) 第17次第2地区溝 S D17202
土器出土状況(南西から)



(2) 第17次第2地区溝 S D17202
断面(南から)



(3) 第17次第2地区溝 S D17202・
17207断面(南から)





(1) 第17次第2地区掘立柱建物跡
S B17213(北西から)



(2) 第17次第2地区掘立柱建物跡
S B17216(北西から)



(3) 第17次第2地区落ち込み S X
17212(南東から)



(1) 第17次第2地区溝 S D17204
(南東から)



(2) 第17次第2地区溝 S D17204
断面(C-C') (南東から)



(3) 第17次第2地区溝 S D17204
断面(D-D') (南東から)



(1) 第17次第2地区溝 S D17203
(南東から)



(2) 第17次第2地区溝 S D17203
断面(南から)



(3) 第17次第2地区溝 S D17209
断面(東から)



(1) 第17次第2地区土坑 S K 17208
(南東から)



(2) 第17次第2地区西壁断面
(北東から)



(3) 第17次第2地区南壁断面
(北西から)



(1) 第17次第3地区全景(南東から)



(2) 第17次第3地区溝 S D17301
断面(南東から)



(3) 第17次第3地区溝 S D17301
西肩部柱穴検出状況(北から)



(1) 第17次第4地区調査前全景
(南東から)



(2) 第17次第4地区溝S D17401
(南から)



(3) 第17次第4地区溝S D17401
(北西から)



(1) 第17次第4地区溝S D17401(南東から)



(2) 第17次第4地区溝S D17401全景(南東から)



(1) 第17次第4地区溝 S D17401
断面(B - B') (南東から)



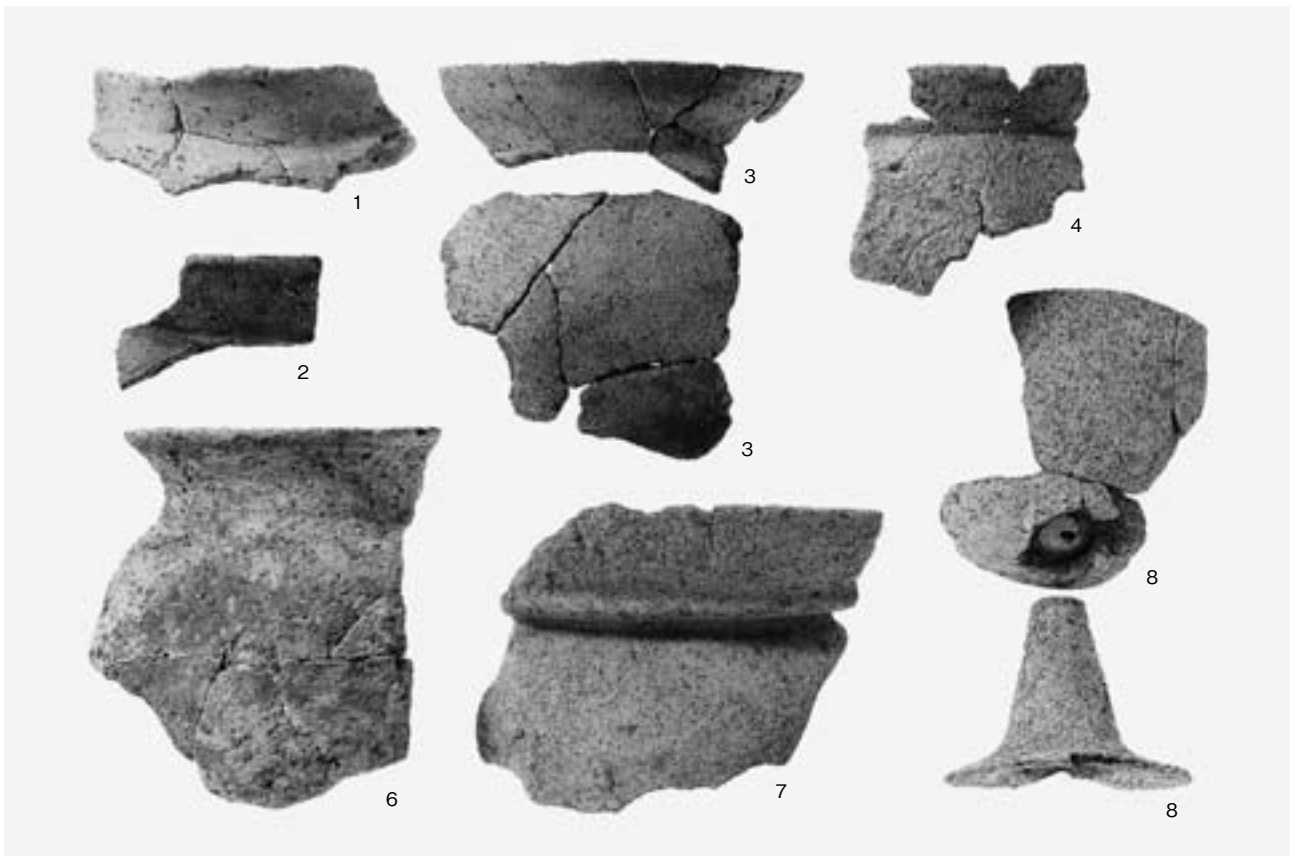
(2) 第17次第4地区溝 S D17401
断面(C - C') (南東から)



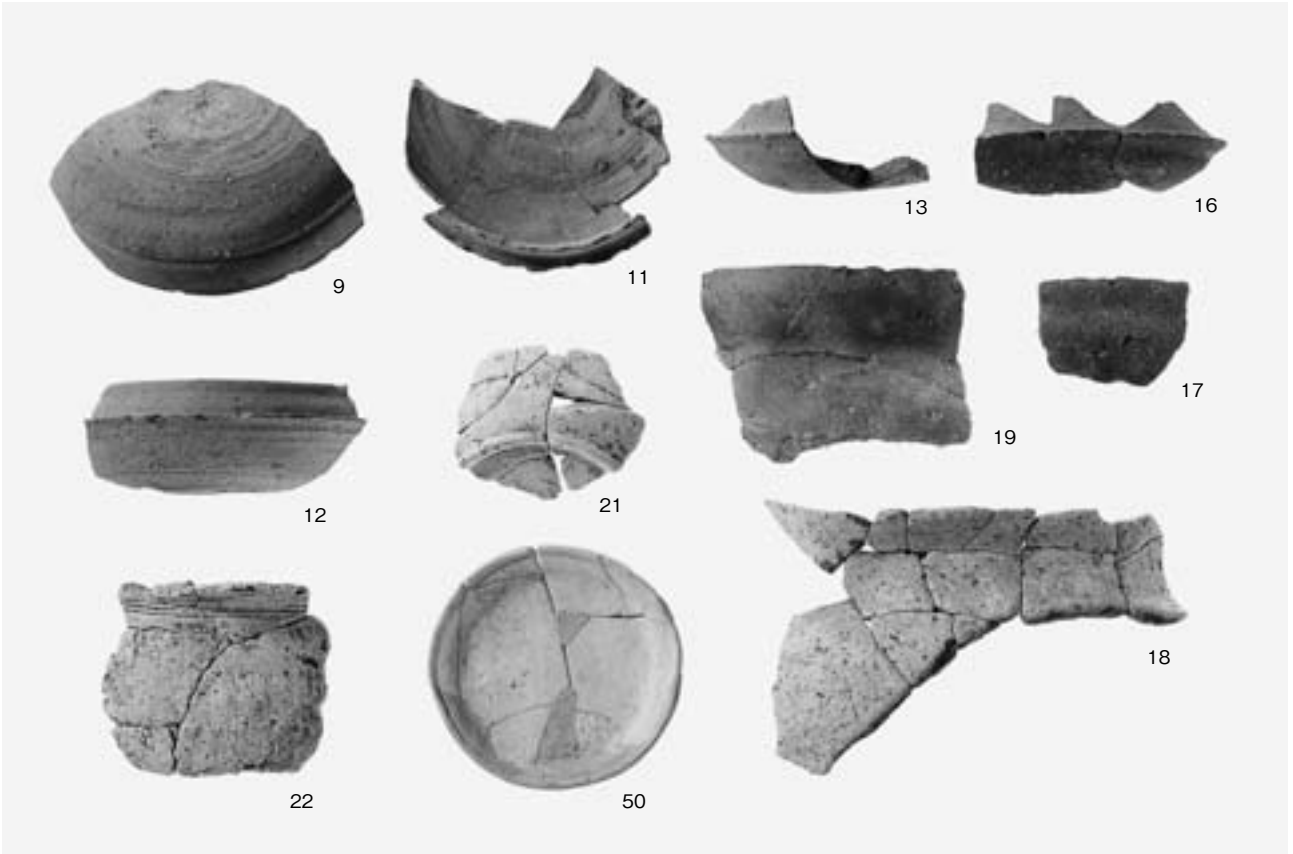
(3) 第17次第4地区溝 S D17401
底部検出状況(南東から)



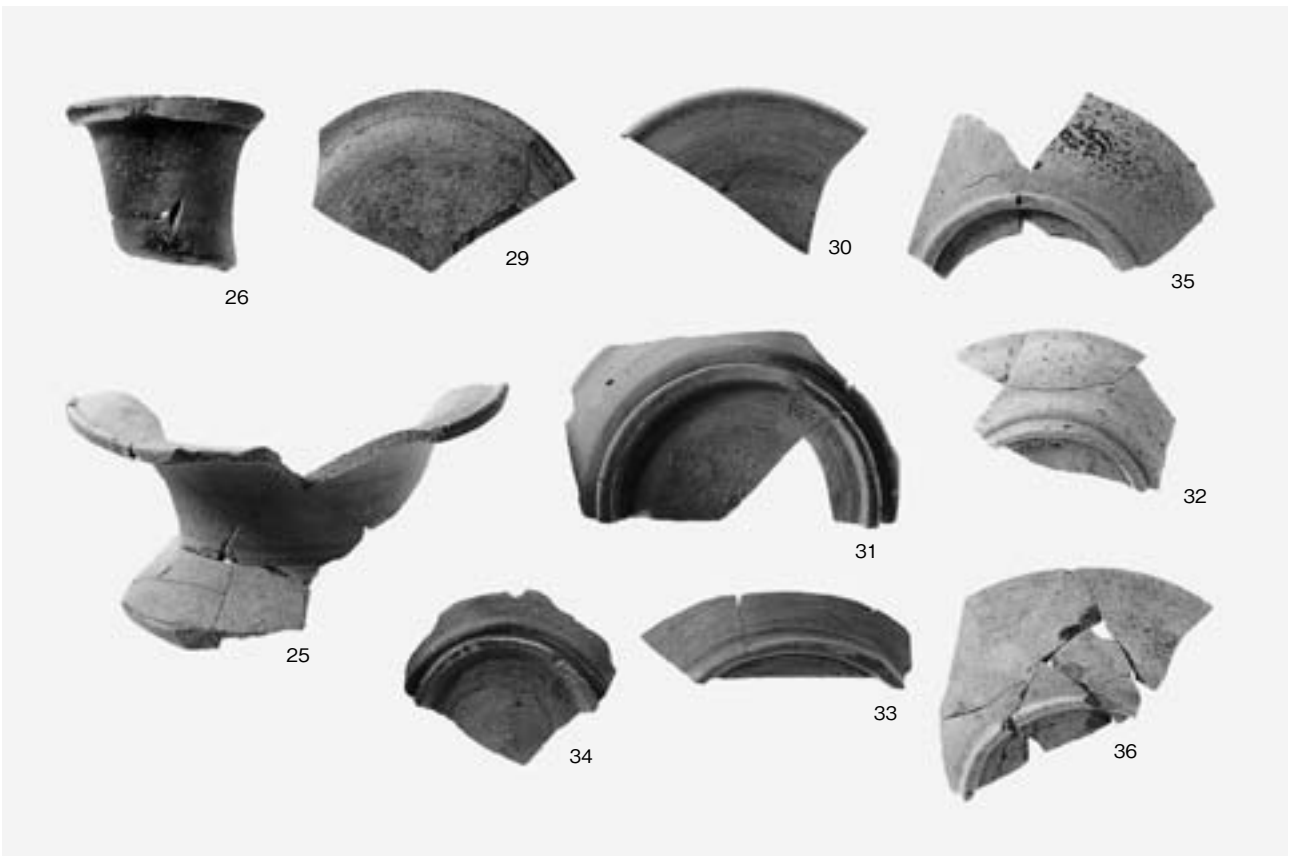
(1) 出土遺物 1



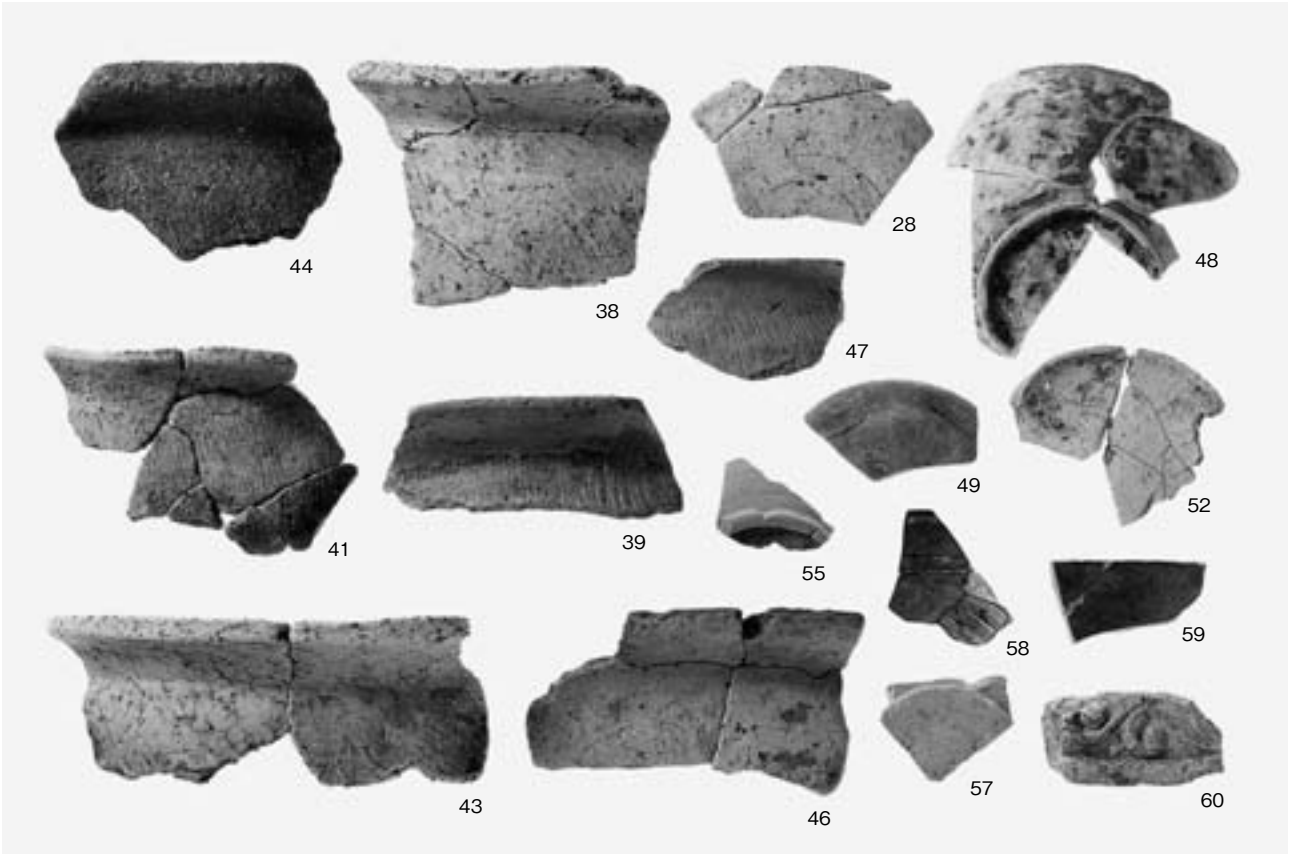
(2) 出土遺物 2



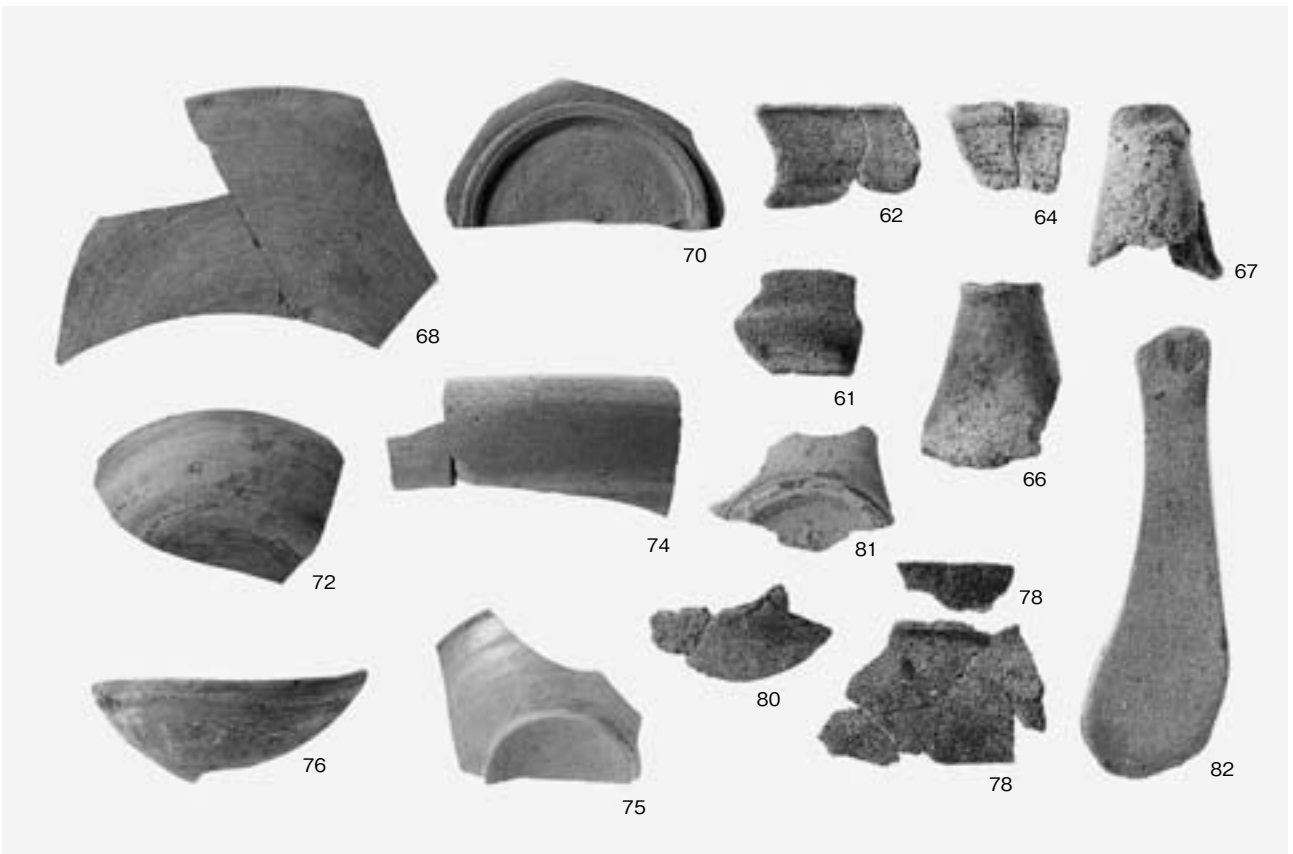
(1)出土遺物 3



(2)出土遺物 4



(1) 出土遺物 5



(2) 出土遺物 6

京都府遺跡調査報告集 第 139 冊

平成22年 3 月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141